

この「意見」は平成14年8月2日（締切：平成14年8月31日）に評価対象機関に対して行った「平成13年度着手の大学評価に係る自己評価の方法等に関する意見について（照会）」について、頂いたご回答を原文のまま掲載したものです。

(1) 回答数

対象機関数	113 機関
回答のあった機関	97 機関
うち意見のあった機関	89 機関
回収率	85.8%

(2) 設問内容

1. 自己評価の内容・方法に関して、自己評価を経験された立場から、わかりにくかった点、問題や課題、あるいは有意義だと思われた点等について御記入ください。（以下「自己評価に関する課題等」）
2. 目的及び目標の設定に関する説明を充実したこと、評価項目に『要素』を設定したこと、「特記事項」を設けたこと等、平成13年度着手分の評価における変更点や改善を図った事項(参考資料参照)についても御意見があれば御記入ください。（以下「変更点等への御意見」）

(3) 掲載順序

「全学テーマ別評価」，「分野別教育評価」，「分野別研究評価」別，大学順に掲載

1. 全学テーマ別評価

北海道大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

- ・それぞれの評価項目を「要素」と「観点」に下位分類して評価するという方式は、各大学の自己評価を比較する上では適切であろうが、「観点ごとの評価結果」「要素の貢献の程度」「各項目の水準」という記述をすべての項目について求めるのは機械的すぎる。また、評価の「記述法」を指定しているが、アンケート調査ではないのだから、このような画一的な表現を求めることは適切ではないと考える。
- ・教養教育に関して「教育の効果」について評価を求めるのは不適切である。示された「要素1」は「履修状況や学生による授業評価結果」についての判断を求めるものであり、これはむしろ「教育の内容」ないし「実態」と呼ぶべきものである。また「要素2」では「専門教育」の側からの判断が求められているが、ここには「教養教育」を「専門教育」に従属する準備教育と見る偏見が隠されてはいないか。さらに「卒業後の状況」の調査から教養教育の効果に特化した評価ができるとは考えにくい。いずれにせよ、「教養教育」について、性急なアウトプットを求めることには疑義がある。

2 変更点等への御意見

- ・「とらえ方」、「目的」、「目標」という三項目は果たして必要か疑問である。「教養教育の位置づけと目的」、「目的を達成するための具体的目標」ということで十分ではないかと思われる。
- ・根拠データを別添ではなく、本文記載としたことは評価できる。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- ・設定した目的・目標とその評価の際の評価の観点との関連がわかりにくい。
- ・目的毎に具体的な目標を数項目にわたって、明確かつ具体的に示すことが必要とされているのであるから、評価は、その具体的目標が達成されたか否かでなされると考えられる。評価に当たって新たに評価の観点の設定がなぜ必要なのか疑問である。
- ・評価項目が3通り、さらにそれぞれを分類1, 2で分けて6個のマトリックスが生じ、各々の目的に対し、それを新たな評価の観点ごとに評価すると、実際の評価と目的・目標の関係が極めて複雑にならざるを得ない。
- ・評価の手順の個々の項目の説明にこだわりすぎて、全体の整合性を欠く要請がなされていると感じられる。

2 変更点等への御意見

- ・ 目的及び目標に関する説明はわかりやすい明確なものであり，評価項目の要素も理解する上で参考になった。
- ・ 特記事項は各大学の特色を説明する上で有効なものと思われる。

北海道教育大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

教員養成系学部の単科大学である本学は，教育目的・目標として教養教育を重視しているが，今回のような教養教育に限定した自己評価は初めてであり，成果や問題点が多面的にかつ総体的に明らかにできたことは大変有意義な機会であった。

評価項目のうち「教育方法」と「教育の効果」については，教員個々人の評価に基づいてなされることが正当であるので，担当教員全員に対する自己点検評価の調査を行った。

2 変更点等への御意見

「要素」の設定は，自己評価を行う上で有効であった。

根拠データ等を自己評価報告書の本文中に記載する方法は，自己評価の内容が記述上の論理性を確保でき，有効であった。

「特記事項」の設定は疑問が残る。各項目毎に「特に優れた点及び改善点」を記載するが，それと別途に「記載事項」で「補足的事項や今後の展望」をあえて一律に述べさせ，更にその記述に対して機構が所見を付し公表するという意義が直ちに了解できず，「特記事項」をどのような内容とするか戸惑いがあった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

本学は教員養成学部の単科大学であり，その専門分野の多様な広さに特徴がある。そのため研究活動は広義の教育活動そのものを対象とし課題とする側面があり，個々の教官の教育と研究活動それぞれが知的資産として地域への社会貢献と強く結合していると捉えられる。

そのため，今回の「研究連携」の自己評価に当たって機関はもとより教官個人への「実状点検調査」を実施し，集約・分析を行った。その結果，本学のこれまでの成果や課題を明らかにすることができるなど，大変有意義な機会となった。

2 変更点等への御意見

変更点においては、根拠資料の扱いなど、評価方法や実施方法の簡便化を図った点においては評価したい。ただ、「目的及び目標の設定に当たっての視点」については、それぞれの視点の説明文がいささか難解で理解に戸惑った。端的な説明と表現例を示すことでよいのではないか。

旭川医科大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

(わかりにくかった点)

分類1と分類2にまたがる取組について、どのように区分するかの判断。
多岐にわたる取組で構成される分類の評価に用いる観点をどのように設定するかの判断。
どの資料をどの程度まで『根拠資料』として添付するべきかの判断。

(問題や課題)

総合大学と単科大学では取組の内容の多様性や量的な面で大きな差があり、同じ評価方法(評価項目や文字数など)では無理があると思われる。
分類1と分類2にまたがる取組が多くみられ、それらを適正に評価するためには各々の分類で評価することとなり、取組によっては評価項目ごと、分類ごとに取組の内容・現状等の説明が繰り返し記述されるなど、評価作業や自己評価書を複雑でわかりにくいものになっている。分類は取組の整理上の意味はあっても、それぞれを完全に分けて評価する意味はないようにも思われる。

根拠資料を本文中に掲載する今回の方法は、

-) 自己評価書の内容変更のたびにページ数の変更やページをまたぐ表の項目欄の移動等その管理が煩雑となっている。
-) 表で示すことが多い根拠資料の設定(フォント・行間設定等)は、本文とは別に設定した方が見やすい。また、根拠資料が数ページにわたる場合に本文が分断される。
-) 一つの取組に関するデータが評価の根拠として評価項目や分類ごとに分かれて掲載され、取組全体の状況が把握しづらい。

などの理由から、根拠資料は自己評価書の後にまとめて添付するようご検討願いたい。

(有意義だと思われた点)

当該テーマに係る本学の目的及び目標を明らかにし、それらを学内に周知できたこと

。本学と社会との研究面でのつながりが明確になり、その重要性を再確認することができ、今後の取組の活性化が期待できる。

当該大学評価も2回目となり、目的及び目標に即した評価や第三者機関による評価等への認識が深まった。

2 変更点等への御意見

) 目的と目標の説明の充実、) 特記事項の新設、) 参考資料の作成、) 観点の例示等の改善は、評価作業を進める上で、また、自己評価書を作成する上で非常に役に立った。特に特記事項は今後の改革課題や構想等についても記述することができ、学内外に現状の取組と関連づけてビジョンを示すことができるようになった。

一方、評価項目に『要素』を設定しすぎると、画一的な評価になりがちで、当該大学評価の基本的な方針の一つでもある「大学の個性や特色が十二分に発揮できる評価」が薄れるのではないかと懸念される。

弘前大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価のとりまとめを通じて、今後、取り組むべき課題を明確にできたことは有意義であった。

2 変更点等への御意見

「要素」及び「特記事項」が設定されたことにより、評価の流れが明確になった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

「社会との連携及び協力するための取組」と「研究成果の活用に関する取組」に区別して評価を記述する必要があるが、例えば産学連携活動についていえば、学内の研究者の研究成果を社会との連携のなかで活用していくという、大きな流れの中で考えた場合、両方の取組に対応するケースがある。具体的には「産学官連携フォーラム」や「研究シーズ交流会」等については、まさに両方の目的をもった事業であろう。「改善のための取り組み」についても、両方の取組を包括して改善する動きがあるなど、あえて2つに分ける必要があるか疑問である。

2 変更点等への御意見

「特記事項」について
本報告に関する補足的事項および展望について記述することができるため、適切な改善が図られたと考える。

「評価の観点例及び根拠となるデータ等例」について自己評価を行うにあたって、大変参考になった。

岩手大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

「4. 教育の効果」を自己評価するのが難しいと思われた。どんなデータが出れば目的・目標が達成されたことになるのか、簡単に判断できないのではないかと。本学は平成12年度に教養教育を大幅に改編して間もない段階にあるので、今回の自己評価はいわば中間段階の評価として本学にとって大きな意義をもつものであった。それはそれとして、やはり、改編間もない段階における大学の場合の改善課題とそうでない大学の場合の改善課題にはやはり違いがあるので、今回の大学評価に関する本学の自己評価の取り組みにおいては、特にその点に関して苦慮した。

全国の大学で、「教養教育」の軽視が言われているとき、今回のテーマは時宜にかなったものと評価できる。

各大学が設定した目的・目標を前提とする評価を基本としたことは、きわめて有意義であった。

2 変更点等への御意見

目的及び目標に関する説明が特にインプットもしくはプロセス、及びアウトプット等の用語によって補完されたので、目的及び目標の設定に関して要請されていることの趣旨を受け止めるうえで好都合であった。

「要素」の設定は、評価するときの項目立てに大いに役立ったと思う。

東北大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1) わかりにくかった点

過去5年間の教養教育に対する自己評価を行うこととされているが、本学のように過去5年以内に旧教育課程等に関する自己評価に立って教養教育の改革を行い、現在、旧教育課程と新教育課程の双方に基づく教育が実施されている場合、双方の自己評価をどのように重みづけて記述するかに苦慮した。特に目的・目標などは限られた字数の中で記述しなければならず、どのように記述すべきか苦慮した。このような場合の記述の具体例などをあげていただければよいと思う。

2) 問題や課題

評価の観点も目的・目標に即して自由に設定してよいことになっているが、どうしても観点を踏まえることになり、評価のものさしが画一化ないしは標準化してしまうように思われた。これでよいのか、これがよいのかを考えたいと思う。

3) 有意義だと思われた点

今回の自己評価書の作成を通して、これまでの教育の改善がよかったのかどうかを再認識する機会が得られ、また今後何をすべきかを具体的に考える機会が得られたことは、有意義であったと思われる。

2 変更点等への御意見

1. 「特記事項」が設けられたことにより、大学の特殊事情等の情報が記載できるようになったことは、大学側にとって有用なことだと思われた。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 「第 IV 章 評価項目ごとの自己評価結果」においては、評価項目を「(1) 研究活動面における社会との連携及び協力の取組」、「(2) 取組の実績と効果」及び「(3) 改善のための取組」という3項目に分類し、それぞれについて、目標達成にどの程度貢献しているかを示す“水準の評価”を記載するようになっている。この場合、「(2) 取組の実績と効果」の節は、そのまま素直に“水準の評価”につないでいけるが、「(1) 研究活動面における社会との連携及び協力の取組」と「(3) 改善のための取組」の節については、それらの取組について“水準の評価”まで論理の飛躍なく導こうとすると、結局それらの取組の実績と効果に触れないわけにはいけなくなる。結果として、“取組の実績と評価”の記述を上記(1)～(3)の3つの節に、ある程度重複しつつ、また、あえて焦点を変えつつ記載しなければならなくなり、この点が分かりにくかった。

2. 同じく「第 IV 章 評価項目ごとの自己評価結果」において、二つの評価項目「(1) 研究活動面における社会との連携及び協力の取組」と「(3) 改善のための取組」の関係が不明確であるように思える。5年間のうち、例えば、はじめの2年間である取組を行い、その後取組方法を改善して3年間実行したとする。このとき、(1)節で記載すべき取組は、はじめの2年間の取組だけなのか、それとも5年間全体の取組についてなのか。また、それに応じて(1)節で記載すべき“水準の評価”は、はじめの2年間に関するもののみなのか、5年間全体に関するものなのか。言い換えれば、(3)節で記載する後半3年間の取組とその“水準の評価”は、(1)節の記載に含まれるのか、含まれないのか、という点が不明確であると思われる。

3. また、全体として、取組を「1. 社会と連携及び協力するための取組」と「2. 研究成果の活用に関する取組」というに2区分に分けて記載するようになっている。“研究成果の活用”はほとんどが社会に役立てるためであり、これは“社会と連携及び協力する活動”であるから、区分2は、概念的には、区分1に含まれるように思える。区分1を評価する観点のひとつとして、「研究成果の活用」という観点があるぐらいが適当ではないかと思う。結局、記載する側としては、明らかに区分2に属する事項を区分2に記載し、それ以外を区分1に記載したという感じであって、区分を2つ作る必然性がよく理解できなかった。

4. いずれにせよ、以上述べた点は、重大な欠陥というものではない。大学評価・学位授与機構で作成した「自己評価実施要領」は、非常によく検討され丁寧に記載されていたこともあり、じっくり読めば読むほど、記載すべき個々の内容の論理的な相互関係について記載する側で十分検討してからでなくては書けなくなるような、暗黙のうちに記載する側に深い考察を指導する素晴らしいものであったと思う。

また、“水準の評価”の記載について例が示されていたのが、大変役立った。

2 変更点等への御意見

1. 「特記事項」を設けたことは、大学側の立場で改めて論点を整理してこれまでを振り返り、同時に今後の取組に対する姿勢をまとめられる点で、評価される大学側から評価する機構側への意思伝達を向上させるのに有意義であったと思う。

宮城教育大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

平成13年度実施の「実情調査」と平成14年度実施の「本調査」との関係が不明確であったため、本調査における自己評価書の作成にあたって、実情調査時の記載をどのように位置づけたらよいのかについて迷う面があった。

2 変更点等への御意見

「目的及び目標の設定に関する説明を充実したこと」「評価項目に[要素]を設定したこと」「機構のホームページに自己評価書様式を掲載したこと」については、自己評価書を作成するにあたって、利便性を高める一助となった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

評価項目の(1)～(3)と取組の分類の1, 2との関係を理解するのに苦労した。「研究連携」を「分類1：社会と連携及び協力するための取組」と「分類2：研究成果の活用に関する取組」とにあえて分けて評価しなければならぬ理由がよく理解できず、これらをそれぞれ(1)～(3)の評価項目ごとに検討していく作業が難しかった。それは、実際に行われている研究連携が、分類の1と2の両方にまたがるものが多いということからきている。一本化できないものだろうか。

2 変更点等への御意見

秋田大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

・秋田大学の全学出動体制による教養教育実施にあたり、曖昧であった目的、目標の全学的合意・周知並びにその実施が円滑となり、今後の継続的な改善・改革がこれまで以上に行いやすい環境が整った。

・各観点からのオーバービューやそれらを踏まえた特記事項により、秋田大学において今後取り組むべき課題が抽出された点は意義あるものであった。

2 変更点等への御意見

・目的及び目標の設定に関する説明の充実により、秋田大学としての設定は冗長部分が削ぎ落とされ、具体的かつ明確に表現することができたと考えている。その結果、全章を通じて一貫した記載方法でまとめることができ、論理的、整合性のある自己評価がなし得た。

・全体を網羅する意味で要素が予め設定されていることは意義があると思われる。その一方で、要素と観点が連動していることを考えると、各大学の事情により要素にも多少の文言変更や追加の余地があってもよかったのではと考える。

・特記事項が設けられていたことにより、秋田大学が教養教育の改善に積極的な取り組みをしていることや、現行の特徴的な内容を提示することができた点は別の視点から秋田大学を評価してもらえる意味で有意義であった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

・資料を文中に貼り付ける方法をとった点は我々としても資料の整理、コンパクト化ができ、可視的に記述文章を構成できた点は良い方法であったと思われる。

・大学として様々な面から社会への情報提供が重要である点が今回の評価を通じて確認できた。同時に資料の収集、整理、共有化、点検、公表という一連の作業が恒常的に行われるべき点も十分認識できた。

・学部によって特徴はあるものの、今回のテーマは特定学部也相当依存することになった点は本学の課題として抽出され、この自己評価は良い機会であった。

2 変更点等への御意見

- ・目的及び目標の設定に関する説明が充実されたことにより、概念的な記述ではなく、明確、具体的な形で表現することが必要となった。これに伴って、記載内容に全体的なバランスが保持される結果となり、このことは自己評価が論理的となった。
- ・指定された取組の分類の設定は評価区分を十分にカバーしており、自己評価書作成側からすると視点が定まるという意味ではメリットがあった。しかし、取組の分類によっては記述内容に苦慮する部分があったことも事実であった。
- ・特記事項が設けられたことにより、指定項目で述べ得なかったことの追加や、本学の特徴、更に今後の取組等を提示することが可能であった。

山形大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

- 1 各評価項目ごとの自己評価を行うことにより、教養教育全体の自己評価、全学的な位置付けを行うことができ、将来の教養教育の充実のために、非常に有意義であった。
- 2 評価の基本となる「とらえ方」と、全体的な意図である「目的」を区別して記述することが難しかった。「とらえ方」と「目的」の区分以外は、全体的な構造が明確であったと思われる。
- 3 「評価項目の水準」と「要素ごとの貢献の程度」の記述は、非常に難しい。客観的評価が難しく、どうしても組織内部での自己評価の域を出ないことになる。
- 4 実施要項の説明の記述が、あちこちに分散して記述されており、もう少し整理していただきたい。また、「参考イメージ」は分かりやすく、参考になった。

2 変更点等への御意見

- 1 「要素」と「観点の設定」は、記述する立場からは、非常に書き易かった。
- 2 「特記事項」については、各評価項目の範疇では評価が難しいが、教養教育全体としてはどうしても欠かせない事項について記述することができ、有効だった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- 1 実施要項第2章 について、機構の行う評価が対象機関の設定した目的に即して行うものなら、評価項目ごとの自己評価結果の記述・評価を、観点ごととするよりも設定した目標ごとにする方が効果的と思われる。観点ごととするか目標ごととするか今後の検討に期待する。
- 2 実施要項第2章 について、「連携及び協力の取組」、「実績と効果」及び「改善のための取組」の区別が難解で、趣旨を理解するまでに努力を要した。例えば、どの取組についてもインプット・プロセス的なものからアウトプット・アウトカム的なものまで一連のつながりがあり、この2つを分離して記述、評価することはかなり難しいというのが実感である。また、「連携及び協力の取組」と「改善の取組」の区別も、改善の定義が明確でなく記述の際に苦労した。

2 変更点等への御意見

- 1 各評価項目について観点の代表例が設定され、どのような観点から評価すればよいか予め明示された上に、いくつかの観点例を目標に即して選択できたので、評価項目の取組状況の記述や評価に有益であった。
- 2 参考資料を本文中に挿入することにより、記述側は苦労するが、読む側の理解を深めるのに有益と思われる。
- 3 特記事項の設定は、評価を受ける側が自己アピールしたい強調点を表現できるので有効である。
- 4 参考資料1に「根拠となるデータ等例」が挙げられており、データを収集する上での出発点となり、参考になった。

福島大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

「目的」と区別される「目標」の「具体性」をどの程度のものと理解するかについて、大学ごとでかなりの相違が出てくるのではないかと予想される。この「目標」の設定が評価を行う上での基準となるというわけだから、機構の求める枠組みのなかでの「目標」の具体的記述に大学側はたいへん苦労することになる。

どの大学でも「教育効果」の評価に最も苦労したのではないと思われる。「教育効果」の評価にはそれこそ多様な観点があってしかるべきだと思われるが、評価にあたっては根拠となる「資料・データ」を示すことが義務づけられている。そのためには学生や教員、卒業生に対するアンケート調査に頼らざるをえなかったが、意識調査で果たして「教育効果」をはかれるのかという疑問が終始つきまとった。この点では「教育効果」の「要素」の設定に問題があったのではないかと考える。

2 変更点等への御意見

「評価の観点の設定」から始まり、「観点ごとの自己評価」、「要素ごとの貢献の程度」、そして「評価項目ごとの水準の判断」という3段階の流れで自己評価するという今回の方法は、実際には複雑で煩瑣な方法であると思われる。「観点」も「要素」もそれぞれが複数あり、それぞれの段階の評価を積み重ね、それを踏まえて総合的评价として「評価項目ごとの水準の判断」をくだすという場合、その「総合的」というのが、各大学では難しい判断とならざるをえない。制約された評価の枠組みから少し離れて、大学が任意に記述できる項目として「特記事項」が新たに設定されたこと自体は評価できる。ただそれに対して、機構側が付すという「所見」がどのようなもので、いかなる観点からなされるのか、必ずしも明確ではなく、大学側に一抹の不安を残すことになるように思われる。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価の提起から作業の時期が年度をまたがっており、時間的制約がきつい。年度始めの提起で、1年程度かけて自己評価を行えば、より充実した内容になると思われる。

観点例の添付はわかりやすく良いが、制限された時間の中で自己評価作業を行うため、例示の内容に引きずられてしまう危険性もある。

取組の分類1・社会と連携及び協力するための取組と、取組の分類2・研究成果の活用に関する取組との間で、内容に重複がでがちである。あまり細分化するより、統合化したほうが総合的な自己評価ができると思われる。

取組の分類1・観点ごとの評価結果・・・3段階評価

取組の分類1の貢献の程度・・・5段階評価

取組の分類2・観点ごとの評価結果・・・3段階評価

取組の分類2の貢献の程度・・・5段階評価

取組の水準・・・5段階評価

以上の評価構造となっており、大学評価・学位授与機構の側で読みとるには整理された体系であるが、作成する現場からすれば、構造が複雑すぎて記述しにくいと思われる。

2 変更点等への御意見

大学ごとの規模差、学部構成の差（理系学部の有無）、進む方向性の違いなど、大学ごとの多様性が増してきており、それぞれの大学ごとに独自の目的及び目標を設定するという基本方針は重要であり、支持しうる。

特記事項について

大学は社会と学問の要請により日々動いているものであり、過去の分析と評価だけでは正しい自己評価ができない危険性がある。その点で今後の改革、将来構想の展望を「特記事項」として記載できるようになったのは、大きな改善点として評価したい。

特に福島大学においては、現在、既存の教育、行政社会、経済の三学部を、人文社会と科学技術の二学群、人間発達文化、行政政策、経済経営、共生システム理工の四学類に再編成し、文理融合型の教育重視の人材育成大学へと大転換を図っている。

このような時に、「特記事項」が設定され、これらの点を記述することができるようになったのは、大学の過去 - 現在 - 未来をつないで評価する上できわめて重要であると思われる。

茨城大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価の内容・方法に関して

大学評価・学位授与機構に提出する「自己評価書」の内容は、過去の取組事例の概括と一定の評価である。評価といっても、評価基準（到達すべき目標）が過去に設定されていないので、取組事例を全般的に点検（検証）して社会的な効果（評判）が見て取れる場合にそれなりに評価するといった手法である。問題点が発見されれば、その原因を究明して解決（改善）策を提起し適用していくことになる。かようにある意味で単純明快な作業であると考えられる。したがって、点検・評価作業を分かりやすく、かつ労多きものにしないようにすべきである。その点で、平成 13 年度着手の大学評価に係る自己評価の方法には、分類・要素・観点といった区分が導入され、結果的に記述を複雑にさせ、重複を不可避として論旨を明快なものにさせないようにしている。自己評価なのであるから大学側にもっと自由に、かつ容易に記述できるような仕組みを採用していただきたい。

（わかりにくい点）

- (1) 「取組の水準」に関する表現例が“貢献の程度”を表す表現になっているため、「取組の分類の貢献の程度」に記述すべき内容と「(2).....の取組の水準」へ記述すべき内容の記述分だけで混乱した。結局、同じ表現を記述することになった。
- (2) 「3.改善のための取組」には過去5年間の取組に関する事項の記述を行うものとする、ここに記述すべき内容の多くが、すでに前章において「(3)特に優れた点及び改善点」にも記述されていなければならないことになる。可能な限り重複記述を避けたが、どのように書き分けるのかの例示などが必要である。

（評価書記述の簡素化）

- (3) 記述フォーマットを、数値や現状を記入するだけで、簡単に作成できるような形式にするべきである。

2 変更点等への御意見

「Ⅴ.特記事項」が新設され、将来計画について記述できるようになったことは、非常に良いことである。しかし、制限が半ページであるので、十分な記述ができない(資料の引用もできない)。ページ数を増加して、現在取組途中の改善や取組強化の将来計画についても、内容がわかる記述を可能としてはいかがか。

筑波大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

- ・ 本学は設立当初から教養課程と専門課程という段階的な区分を設けず、一般教育的教育内容に相当する科目(基礎科目「共通科目等及び関連科目」)と専門教育的な科目(専門基礎科目・専門科目)を有機的に連携させたカリキュラムを編成している。そのうち、一般教育的教育内容に相当する科目としての基礎科目(「共通科目」及び「関連科目」)については、それぞれの科目毎に個々の目的及び目標を設定した実施体制となっている。これを大学設置基準で示されている教養教育(「幅広い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ための教育)として目的及び目標を整理し、明確化し評価を行うことは、容易ではなかった。
- ・ 教育の効果で、「専門教育履修段階や卒業後の状況等から判断した教育の実績や効果の状況」における、専門教育実施担当教官、専門教育履修段階の学生の判断及び卒業後の判断に関して、各教育組織毎に専門教育を含めた総合的な判断についての評価は容易であったが、教養教育に限定した判断についての評価は、教養課程と専門課程という段階的な区分を設けていないため容易ではなかった。
- ・ 専門基礎科目も教養教育に含めることが一般的になってきたと思われるが、この点について、自己評価実施要項の中で、明確に示していただきたかった。

2 変更点等への御意見

特になし

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 大学評価はあくまでも大学の教育・研究活動又は社会貢献活動を活性化するために行うものであり、そのためには、単一の基準に照らして機械的に序列をつけるようなことは極力避けなければならない。そのような意味で、大学評価・学位授与機構の行う評価が、それぞれの大学が自ら設定した目的・目標にしたがって実施する自己評価を基にしていることは、合理的であり、正しい方向であると考えます。
2. 全学テーマ別評価（研究連携）では、研究活動面での社会貢献活動を、取組の分類、すなわち(1)「社会と連携及び協力するための取組」及び(2)「研究成果の活用に関する取組」に分類して評価することとされている。しかし、例示の中に分かりにくいもの（例えば「教育委員会などとの研究協力」は(1)に、「地方公共団体や学協会等の調査活動への協力」は(2)に分類されている。）や、相互に関連していて分類することが反って不適当なもの（例えば、技術相談のためのリエゾンオフィスの設置については、例示では技術相談は(2)に、リエゾンオフィスの設置は(1)に分類されている。）などがある。評価項目が3つに分類されているので、それをさらに分類の取組によって2つずつに分類する必要があるのかどうか、疑問がある。

2 変更点等への御意見

1. 平成13年度着手分の評価において、目的及び目標の設定に関する説明が充実されたこと、特に、「目的及び目標の双方に通ずる確認の具体的な視点」の項目が設けられたことは、具体的な目的及び目標を設定するに当たって、実際に有益であった。
2. 平成13年度着手分の評価において、「特記事項」が新設されたことは、それぞれの大学で自己評価を実施した際の特別の意図を記載する欄が設けられたことになり、実際に評価に当たってみると、大変有意義であった。

宇都宮大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

根拠となるデータ等を、本文のわかりやすい位置に挿入するために非常に無駄な労力と時間を必要とした。MS-Wordまたは一太郎でこれを行うのには無理がある。「データ等の貼付が困難な場合には」、あるいは「指定した形式により作成できない場合は、ご相談ください」とあったが、不可能ではないので苦心をして作成した。様式が合致していれば他のソフト(PageMakerなど)の使用も認めてほしい。あるいはPDFファイルでの提出を認めてほしい。

2 変更点等への御意見

要素が設定されていることは、自己評価を行う側にとっても実施しやすい。ただし、その下に例示されている「観点」については、必須のものとそうでないものが混在していると思われる。必須の観点を明示し、それ以外の観点についてはできるだけ多くの例示をあげておいた方が、自己評価も第三者評価も行いやすいのではないか。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

根拠となるデータの評価書本文への記載は、煩雑で非常に多くの時間を要し、また、見る方にも見難いと思われることから、より良い方法を再検討願いたい。作業に要する労働効率を高める工夫が必要である。

2 変更点等への御意見

群馬大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1. 教養教育を、カリキュラム、授業内容、実施体制、学習環境など全般的に点検できた貴重な機会であった。
2. 要項の提示から評価書提出までのタイムスケジュールには、厳しいものがあった。
例えば、教育効果を調べるためには、学生・教官向けのアンケート調査が必要であるが、時間不足で十分出来ない。
3. 参考資料の提示方法が本文にはめ込むという方法なので、ほとんど冊子になっている資料を適切に提示することが難しかった。

2 変更点等への御意見

1. 教養教育への姿勢や取り組みは、大綱化以来、大学間で大きく差が生まれているように見える。よって、そこを明確にするように「目的及び目標」の欄を充実したことは意味があった。
2. 評価項目に「要素」を設定したことにより、何を意味するのかがわかり易くなったが、さらに各大学の特色を出せるように、要素の設定についても工夫の余地があった。例えば、各大学独自の要素を設定することも考えられる。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

今回、機構側から示されたフォーマットは、分類1「社会と連携及び協力するための取組」と分類2「研究成果の活用に関する取組」に分け、それぞれ観点を設定して自己評価を行うこととなっているが、分けて記述する必要があるのか疑問である。特に、観点を設定する上で、「運営、実施体制、検討体制等の組織」、「広報」、「国際性、地域性」・・・などは、ほとんど共通した事項であり、同じ事を繰り返し表現せざるを得ないことになる。むしろ、個々の観点の中（共通に説明できない事項については別にして、）で分類1と2を説明すると共に評価を行う方が分かりやすかったのではないかと思える。

2 変更点等への御意見

特になし

埼玉大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 全般に重複を避けて明瞭に記すのが困難であった。例えば、II 2 取組や活動の現状に記すべき事項とIV以降に記すべき事項の大半の重複は避け難く、またIVの1、2、3に記すべき事項は互いに関連があり、整理してわかりやすい記述に至るのは困難であった。また、「社会と連携及び協力するための取組」と「研究成果の活用に関する取組」との区分も困難であった。
2. 「全学的組織あるいは全学的な方針の下に部局等で行われている活動」がどの範囲まで及ぶかの判断に窮する場合もあった。

2 変更点等への御意見

特になし

千葉大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

観点ごとの評価を三段階（優れている、普通、問題あり）で行う場合、区分が判定しにくい例がしばしばあった。五段階の方がよい。

「おおむね貢献」と「かなり貢献」の用語の使い方と評価の順位について検討を要す。

2 変更点等への御意見

「教育の効果」で提示するデータが、「履習直後の学生による評価」、「専門課程終了時の学生による評価」、「卒業後2,3年の卒業生による評価」では、評価対象となる教育が年代的に違っているため、比較できない。

特に、2,3年単位で教育改革を進めている現状では、いつの教養教育について自己評価しているのかに、大学評価機構は注意深く、報告書を見て評価していただきたい。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

次世代の社会構造に適応し、かつ、社会や国民に貢献する大学を構築するため、今回のような絶え間ない自己評価と外部評価およびそのフィードバックは必要不可欠と思われる。今回、全学テーマ別評価を実施した所感を以下に記す。

(1) 評価書作成にあたり、評価実施要領は指針として大変有効ではあったが、反面、一読しただけでは分りにくい説明文が見られた。「インプットの」、「プロセス的」、「アウトプット、アウトカム」など、一般的でない言葉の使用はなくした方がよい。また、目的、目標など、重要な用語は「定義」を箇条書きで掲げると分り易くなると考えられる。

今回の評価書作成に当たり、各教員に対して必要項目に関するアンケート調査を実施した。アンケート実施を通じて、「今後の大学に何が求められているのか」とのメッセージを伝えることが出来たと考えられる。しかしながら、教員数が1,000人を超える大規模大学では回答は多岐に亘り、全て評価書に記述できなかつた。必要項目に関するアンケートの難形があれば、統一的な評価も容易・可能になるものと思われる。一方、類似したアンケートが幾度となく届くため、教員側からは嘆く声が多い。学術情報センターが実施する調査項目を増やし、これを各大学で利活用できれば、簡素化できるとの意見もあった。

(2) 評価項目が大きく3つに分類されているが、「改善のための取組」は既に実施していた項目が多く、これを「実績と効果」に組入れるべきか否か、判断に迷うことが多く、基準または事例紹介が必要と思われた。

2 変更点等への御意見

評価書をダイジェスト的に閲覧する場合、特記事項の追加は各大学の個性が顕れ、良いと思われる。一方、「連携及び協力するための取組」と「研究成果の活用に関する取組」の分類は事前調査結果の事例として紹介されていたが、評価実施要領からは十分読みとれなかつた。また、ある項目では両者に関連する場合があり、記述が一部困難であった。

東京大学

< 全般 >

1 自己評価に関する課題等

全般的に、評価項目の水準を記載するに当たり、自らに対する要求レベルを高くとって厳しく評価すべきか、むしろ様々な制約の中で現実的に到達可能な最高レベルに対して評価すべきか、苦慮いたしました。

これは、「平成12年度着手の大学評価に関する意見と大学・学位授与機構の対応について（以下、意見と対応）」の29番の意見とも関連することかもしれません。その回答にあるとおり「目的・目標は各大学で既に行っている意図や課題を整理するもので、目的・目標を意図的に操作する」ことは考えられませんが、同じ目的・目標の記載内容であっても、その達成度を自己評価する時には、理想的な状態を基準とするのか、様々な制約の下で現実的に到達可能な最高レベルの状態を基準とするのかによって、評価結果は異なるものと考えられます。

「意見と対応」の8番の意見にあるように、機構の評価が自己評価の結果に影響されるという可能性をめぐりきれず、研修やシミュレーションを実施したとしても、理想的な状態を基準として評価するのか、様々な制約の下で現実的に到達可能な最高レベルの状態を基準として評価するのかを統一することは難しいのではないかと考えます。

少なくとも、どちらの基準に基づいて自己評価すべきか、配布された資料からは判断することが難しかったというのが感想です。

このことは、機構が行う評価の本質的な問題点と関連しているものと考えます。それは、「意見と対応」の46番の意見で述べられていることに関連しております。その回答として「各大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、各大学等で設定した目的及び目標そのものの評価はしない」となっています。設定された目的・目標に関して何ら評価を行わないというのが評価のあるべき姿として妥当であるかどうかは、議論が尽くされているとは言えないのではないのでしょうか。現在の枠組みを活かしつつ、設定された目的・目標に対する多元的な評価を加えることは、検討に値すると思います。

「意見と対応」の50番の意見に対して「国立大学法人に対する評価のあり方についての検討をしていく予定」とであると記載されていますが、現在行っている試行的な評価は、国立大学法人に対する評価になってゆくことが想定されているものと理解しております。このような本質的な点に関する議論は、試行期間に済ませておくことが望ましいと考えます。

社会が求めているのは各大学の絶対評価であり、どのように表現を工夫し、説明を尽くしても、「自ら設定した目的・目標に対する達成度」の評価結果は、達成された内容の絶対評価に結び付けてしまわれるのではないかと危惧いたします。このことが自己評価における評価項目の水準の記載を難しくしているものと考えます。

2 変更点等への御意見

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1 今回の自己評価には原則としてここ5年間の評価という縛りがあり、それは短期的目標の明確化という点ではおおいに役立ったが、他方、教養教育の長期的目標を見失わせることになるのではないかという危惧を抱いた。長期的目標は数値化できないものであるが、長期的目標が明確でないままの短期的目標は単なる状況の対処になる可能性がある。たとえ数値的裏付けがなくとも、長期的目標は正しい方針と正しい方策とにより実現できるものであろう。その正しさをどう捉えるかは各教育機関の教育哲学に関わることと思う。国立大学協会のシンポジウムでも数値的裏付けのないことは述べないほうが自己評価に一貫性があると意見が講師の一人から提出されていたが、それは上述の危惧を裏付けるものであった。

2 「自己評価実施要領」で教養教育の体系性が強調され、システムの柔軟性についての観点の言及がなかったことは、教養教育硬直化への批判的視点を失わせることになる危惧を感じた。現今、教養教育の意義が再検討され、その意義は教育の体系性と一貫性とから測られる傾向にあるが、同時に教養教育の多様性は尊重されるべきものと思う。体系性・一貫性とともシステムの柔軟性についての言及が実施要領にあったほうが良かったと思う。

3 今回の自己評価作成においては、特定の教官の奉仕的活動に頼らざるを得なかった部分が多かったが、本学の教養教育を新たに検討できたことは何よりも良かったと思う。教養学部の各科目担当責任部会、教務委員会はそれぞれ教養教育の最適化にこれまで最大限の努力を払ってきたが、より多くの人の本学の教養教育の特長と改善点とを明確に把握できたことは、今回の評価のおかげであり、その点で感謝したい。

2 変更点等への御意見

全体として説明が分かりやすくなったことは有難かった。ただし、以下のような問題点を感じた。要素・観点については、「自己評価実施要領」のものは例示であり、あらたに要素・観点を付け加えることは自由であると明確に述べられていたが、例示は全体の流れを決めることになったとも思うので、あえて注文を述べる。

1 大学における課外活動への視点が足りなかった。学生にとっての大学生活において勉学と同時に課外活動も重要であり、それへの支援が大学として必要であることは疑問の余地がないと思う。知識の獲得を超えた教養教育全体という観点からは課外活動への目配りも欠かせないだろう。

2 実施要領で明示されてはいたが、要素・観定の例示において国際的視野がもっと強調されても良いように思った。

東京医科歯科大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1) 分かりにくかった点

・観点、要素、項目についてそれぞれ3段階、5段階、5段階の評価を求められていたわけだが、そこで使用するべき言語表現（特に観点ごとの評価）に、どれくらいの自由度が許容されているのかが判然としなかった。「1から5までの数字で表現し、それを根拠づける言語表現は自由に行う」といった指示の方がやりやすいのではないか。

・観点ごとの評価が基本的な出発点になるが、そこでの3段階（優れている、普通、問題がある）は、やや分類が粗すぎる印象をもった。ここについても5段階評価にした方が良いのではないか。

2) 問題や課題

・これは自己評価そのものに必然的に伴う問題で、容易には解決しないと考えられるが、高い目標を立てて厳しい自己採点したために相対的に評価が低くなるというケースがあり得る。やはり基本的な考え方としては、各大学にはできるだけ自分の大学の良いところを宣伝してもらい、提出されたデータをもとに評価機構がその自己宣伝から一定のルールに従って減点していくといった方法が採られるべきだと考える。商品評価や就職試験をはじめ各種の資格認定でも、被評価者と評価者との役割分離は、基本原則のように思われる。

3) 有意義だと思われた点

・どのような形式にせよ、自分たちの組織の問題点を言語化し、洗い出す作業は、それだけでも改革のための動因となる。評価の結果よりも、評価を行うこと自体が有意義と考える。

2 変更点等への御意見

「要素」を設定したこと、また「特記事項」を書かせるようにしたことは、良い判断であったと思う。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

観点ごとの評価について

観点ごとの評価は「優れている」「普通である」「問題がある」の3段階とされているが、これらの用語は相対評価（他との比較）の語感を有するため、他大学との相対比較を行わないとする本評価制度にはなじまず、誤解を招くおそれがあると考えます。

評価項目ごとの評価について

自己評価事項が多岐にわたることから、これらを統一的基準で総合し評価を導く作業は容易ではないが、こうした総合のプロセスを複数段階で行うこととなるため（「観点ごとの評価」「分類ごとの評価」「評価項目ごとの評価」）、最終的な評価結果と個々の活動状況との関係が弱くなり、評価の意味が薄れるおそれがある。

2 変更点等への御意見

「特記事項」の新設によって、各項目に入りきらないことも記述できることとなったのは良い変更点と考えられる。

東京学芸大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

要素2の「教育課程の編成」において評価対象が抽象的で、具体的な評価になじまない部分があった。この要素は主に大学の教養教育の編成の概要を記述するものであるから、評価項目の要素としてではなく、むしろ評価の基礎資料として前書きの部分にあるべきだと思う。

2 変更点等への御意見

東京芸術大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

特に意見はない。

2 変更点等への御意見

特に意見はない。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

特に意見はない。

2 変更点等への御意見

特に意見はない。

東京工業大学

< 各評価区分共通 >

1 自己評価に関する課題等

目的・目標ごとに評価項目，取り組みの分類によって，細かく整理されるため，各評価観点ごとの評価は易くなる反面，観点と評価対象のミスマッチが現れることが出てくる。

根拠の裏付けとなるデータ等を本文中に記載することは，非常に手間がかかり，自己評価書の作成にあたり負担となった。大学側の立場では，平成12年度の手法の方が優れていた。

評価項目ごとの評価結果の記述について，「水準を分かりやすく示す記述法」として，別紙で示されていたが，各評価項目の「要素」及び「観点」の水準を示す記述については，本文中に，複雑な表現で記載されているので，評価項目と同様に分かりやすく示してもらえば有り難い。

評価項目の水準の区分のうち，「おおむね」と「かなり」の表現の違いがわかりづらいのではないか。

評価結果だけがひとり歩きしないためにも，併せて目的及び目標を公表するべきではないか。

大学自らが設定する目的及び目標にそって，自己評価を行う現状では，目的及び目標の設定の仕方によって，いかような評価結果も得られると思われる。公平な評価を実施するために，各大学が設定する目的及び目標の妥当性についても判断する必要があるのではないか。

2 変更点等への御意見

「特記事項」については，現在までの活動状況だけでなく，今後の改革課題や将来に向けての構想等を記述することができ，おおむね原文のまま公表されることは，大学の現時点における課題や将来構想が端的に表せるものであり，有益であると思われる。

評価項目に要素と観点例が示された点は作業の助けになった。評価項目の要素、観点が各評価項目で相互に関連しているので観点对応表等を例示していただけると今後の評価書作成の助けになると思われる。

東京商船大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価手引書の文に抽象的で難解な箇所　たとえば「一貫性」、「体系性」などの語を用いた箇所がある。特に観点例の記述において目立つ。もう少し具体的で明晰な文章で説明してもらいたい。

評価書にも記したが、教養教育は比較的早くその効果が顕れる部分と、長い時間を経て効果が顕現する部分とに分かれる。特に、後者は、教育を受けた本人ですら、その効果が自己の受けた教養教育に起因するとは判じ難い。このような、教養教育の特性を考慮するとき、今回のような評価によって、現在実施している教養教育の的確な評価がなされ得るのか不安を覚えた。

今回の自己評価によって、本学の教養教育の在り様を反省的に見直す契機となったことは、有意義な点だと思う。

2 変更点等への御意見

変更点や改善点を設けた分だけ、指針が増えたわけであり、作成しやすくなったことは事実である。機構としてどのような形の報告書の作成が望ましいのか、更なる指針を与えていただけるとありがたい。

但し本文中に資料・データをつけるとかえて、本文と資料・データの区別が不明確になりがちである。一般研究論文のように、本文の該当箇所に(1)のような番号をつけ、資料・データはすべて報告書のあとにつけるといった形を取ったほうがいいのではないか。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

なし

2 変更点等への御意見

なし

東京水産大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

教養教育は大きな問題であり、評価する場合、その立場によって目的・目標が大きく変わってくる。重要な事であり、その目的・目標をどこに置くかなどの議論が必要と思われる。

大学内でどの程度の議論がなされているのか、それが全学的に統一した考えの基に育っているのかを計ることが重要であることがわかり、有意義であった。

大綱化以降「教養教育」をどのように再構築していくかが各大学で検討されているが、評価の対象として何を挙げるべきか、学内でも意見の分かれるところであり、ある程度の示唆が必要かと思われる。

2 変更点等への御意見

要素を抽出してあるので評価しやすくなった。

しかし、例えば「実施体制」では実施組織に関する評価を求めているが、組織がどのように機能しているのかを示すものを添付するような、実証に基づく評価を行うことを要求すべきかと考える。

ただし、指定された要素に縛られる結果になることも確かなため、評価項目については、更にご検討いただきたい。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

[有意義であった点]

- ・学内の「研究貢献」に関する各種情報集約の一元化のプラットフォームが出来た。
- ・「研究連携」を基軸に、学内の活動を整理概観することが出来、文字通りその趣旨である現状の評価と今後の課題を明確化する機会となった。

[問題]

- ・学内データを収集した後の評価文言作成に多大なる時間が必要であった。
- ・項目の遺漏が心配された。

[問題に関する提案]

- ・今回各大学から出された各項目を整理、共通項を集約し、できる限りフォーマット化して、数値評価できるようにすべきである。評価はクラス分けして、例えば五段階にて記入するなど。
- ・共同研究数、特許数など数値表現できる項目を明確にし、これはテーブル化して数値を入れればいよいよにし作成ロードを軽減する。
- ・上記数値化、共通化を徹底した後、これに入らない各大学独自の評価項目をあげ、特徴づけを各大学に任せる方法をとる。

以上によって、客観化、数値化を行ないながら、各大学の特徴を生かし、かつ作成ロードを軽減できると考えられる。

2 変更点等への御意見

上記と同様に、これも出来るだけ形式化、数値化を図るとともに、ビジュアルに概要を理解しやすい工夫が必要である。

例えば、工程表のような形式にする。目標各項目に対して、着手、実施、中間評価、完了、最終評価、を経年的にタイムテーブルの中に矢印などで示す。このタイムテーブルに関連イベント、例えば、新規導入特殊機器、施設、人員配備、組織変更などを書き入れられるようにすれば、一目にて目標設定とそれに至る工程がわかることになる。

お茶の水女子大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

「学習環境」面で、施設面（建物・教室・IT環境）など、一大学での予算だけでは、どうしようもないものについて、自己評価を下すのは奇妙である。
もう少しやり方に工夫があってしかるべきである。

2 変更点等への御意見

要素が設けられ、観点例が例示されたことで、やや束縛を受けた面はあるが、全体的に前年度よりは書きやすくなった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

第 章の「1 研究活動面における社会との連携及び協力の取組」「2 取組の実績と効果」「3 改善のための努力」の区分が分かりにくい。節の表題どおりに取れば、「取組」の内容を評価を含みながら紹介する(1)ことは、すなわち、その「実績と効果」(2)に言及せざるを得なくなる。また、「実績や効果」(2)を記述すれば、それに対応する「3 改善のための努力」に言及せざるを得なくなる。ここだけではなく、各所で、内容を重複して書かざるを得ない項目立てになっている。

したがって、パーツ毎に「a取組」「b実績と効果」「c改善のための努力」を連続して記述するほうが、無駄がない。また、第 章に限って申し上げれば、たとえば、「1 取組を推進するための全学的な制度面の努力」「2 全学的な方針による研究グループによる取組例」「3 その他の研究グループによる取組例」のような項目立てにすれば、多少とも重複を避けて記述できるのではないか。

2 変更点等への御意見

「要素」「観点例」が示されたので、要求されている内容がイメージし易くなった。ただし、大学毎の個性を尊重する前提ならば、「これらの例示に、まったくこだわる必要がない」との注記が一文あるほうが適切だと思う。

「特記事項」欄は、まったく異なる各大学の実状について補足できるので、ありがたい。

一橋大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

各観点毎に5段階で評価することになっているが、観点に関してとらえた実態がその5段階（特に中間の2～4段階）のどこに位置するかを判定することが困難である。というより、その判定は各大学の主観に委ねられ、その結果を比較したり、全体傾向をみようとすることに無理がある。

5段階の記述方法（「おおむね」「かなり」「改善の余地がある」など）をきちっと踏襲すべきなのか、表現のニュアンスの違いを加味して異なる表現をする余地があるのか、微妙な記述の違いが全体の評価にとって意味があるのかどうか。記述上いろいろと困惑させられた。

理念や目的・目標の記述とその後の観点別の評価とが、整合性を持って評価することができなかったという印象を持っている。これは、こちらの評価の仕方の問題か、それとも今回の評価方式の問題か？

2 変更点等への御意見

最後の「特記事項」の自由筆記欄を設けたことは改善であると思うが、機構の評価で特記事項の内容がどのように考慮されて評価がなされるのかがわかりにくい。たとえば、本学の場合は、今回自己評価した事項にかかわって、現在どのように改善しようとしているかを書いたが、現状の問題点や課題が認識されていて改善に取り組もうとしている場合とそうでない場合とでは、評価が異なって当然であると思うが、そのようなことを特記事項を読んでカウントされるのかどうか、という疑問である（特記事項はさまざまな書かれ方をするであろうから、統一した扱いはなされないだろうと推測する）。

今回の自己評価報告書の性格にかかわって、次のような傾向が生じがちな点をどう考えるか？

すなわち、このような第三者（評価機構）が評価し、公表することを目的にした自己評価（いわば外向けの評価）と、あくまで学内で自己改革・自己改善のために行う自己評価（いわば内向きの評価）とでは、評価が異なってくる（外向けには甘くなり、内向きには厳しくなる）という傾向が生じることが不可避であろう。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

用いられた自己評価の方法は、多様な記述を許容しながらも一定の形式と内容とを導くための枠組みとして、総じて具合よく設計されていたと思われる。

評価実施要項に示された説明のうち、「評価項目」と「評価の観点」の意味の区別に若干の困難を感じた。「実施や検討の体制」あるいは「実績と効果」が評価項目（評価対象）として説明されているが、同時に、それらが「評価の観点」の説明の中にも観点例として登場しており、そのことが一因であるように思われる。

評価項目の示し方としては、「（１）研究活動面における社会との連携及び協力の取組」に代えて、たとえば「（１）取組の内容・性格・意図」とし、それを「（２）取組の実績と効果」「（３）改善のための取組」という表現と並列させたほうが分かりやすかったのではないかと。また、取組の分類についても、「研究成果の活用」もまた「社会と連携及び協力するための取組」であると考えられることから、分類の表現をも少し工夫すれば、より区別が分かりやすかったのではないかとと思われる。

2 変更点等への御意見

目的および目標の設定に関する説明は適切であったと思われる。また、「特記事項」の設定も、記述の自由度を高める上で有効であった。

今回の自己評価は「設定した目標を原点としての評価」と理解しているが、「目標の設定自体が適切であったかどうかの自己評価」というものはどう扱われるのかについて、評価を受ける側としてまだ十分に理解していない。

横浜国立大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

ア 自己評価書の作成に費やす時間と労力が膨大であることから、提出する資料・データ等については、チェック項目を設けそれに回答する形式、あらかじめ想定される事項の数量的なデータの記載、などの工夫でより標準化簡便化していただきたい。

イ 自己評価の実施時期については、自己評価の期間は、入試・卒業・入学・授業開始等大学の繁忙期であり、担当委員及び事務職員の交替時期とも重なることから、年度をまたがない時期に設定していただきたい。たとえば実施要項の公表を4月に 行い、評価書の提出期限を10月にする。

ウ 全学テーマ別評価「研究連携」では、「1 研究活動面における社会との連携及び協力の取組」「2 取組の実績と効果」「3 改善のためのシステム」の3項目あるが、特に1の取組の状況を記述する際には、取組の内容等についても観点毎にある程度重複して記述する必要があることから、取組の多い大学では字数が6000字では全く不足である。字数制限は、項目ごとではなく全体でかつ取組の内容によって幅を持たせる形で設けていただきたい。

エ 「研究連携」のように観点毎に取組を記述する方法では、初めから順に読み込んでいっ

でも取組やその実績等の全体像が見えにくく、自己評価を進める上で、複雑で書きづらい。むしろ前年度の「教育サービス面における社会貢献」の方がより自己評価しやすい構成であったと思われる。自己評価書をこうした構成にするのであれば、適当なマトリックスの表に評価結果とその根拠をあてはめていった方が、書きやすいし読みやすいのではないかと考えられた。

オ 制限字数6000字程度の中に資料が挿入されるので、自己評価書は数十ページのものになる。そこで項目の頭につける分類番号は階層構造がわかるような付け方、即ち、1, 1-1, 1-1-1などの形式が良いと思われる。

2 変更点等への御意見

評価項目に「要素」を設定したことにより、評価の対象が明確になった点は良いが、大学で設定した目的・目標に対する評価との兼ね合いが難しかった。

新潟大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価の内容方法に関して、4つの評価項目についてはおおよそ妥当であり、それなりに有意義であった。

しかし、上記を踏まえた上で、教育課程編成に関する体系云々は、教養科目のみでできるわけではなくて、専門科目との関係を明確にした各学部教育のカリキュラム構成への評価によって系統性や体系性がいえることではないか。そうしたカリキュラム評価は、そう簡単に扱えることなく、一定の評価方法に基づく調査によって得られなければならないのではないかと考えられる。

したがって、そうした見地から9学部を擁する本学の教養教育の評価においては、短兵急で困難な部分があった。

2 変更点等への御意見

目的・目標の説明の改善や、特記事項の欄は良かった。

しかし、評価項目の要素に関する観点の設定のことについて、観点の例示をしながらも、各大学の自己評価としての範囲として、その観心の採用の是非について曖昧にしていた。これは自己評価であるとの節度と存じますが、消極的で、よく分からないところだった。試行であることが曖昧になっていることと関係があるように思う。

試行なのであるから、観心の多様さを示すための豊富な例示をしてもらえば、こうした自己評価に全く馴染んでこなかった場合においても、難しい観心設定の検討がしやすかったように思う。

関連して、要素の段階における5段階の、「おおむね」と「かなり」との序列の付け方には逆の印象が残り、最後まで馴染みにくい表現であったと思う。『広辞苑』では、そのような意味づけをしているが、『日本国語大辞典』（小学館）では、「かなり」には、『広辞苑』と同様な意味の他に、「思った以上に」、「相当の程度に」の意味のあることを記しており、こちらの方を現在一般には用いるこ

とが多いのではないだろうか。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

実施要項については、昨年度に比較して大幅に改善されているが、なお平易な表現が望まれる。

実施要項は、概念をアカデミックな立場から平易に解説しようという努力が感じられるが、実際に自己評価書を作成する立場からは、要求されている内容はかなり複雑であるため、例示等の実務的な説明が不可欠である。その意味で、本年度は参考資料においての例示を伴った解説が有益であったので、なお一層の充実を図りたい。

2 変更点等への御意見

目的・目標の説明の改善や、特記事項の欄は大学の個性を表現する意味でも良かった。

長岡技術科学大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価書における評価自体は各大学がそれぞれ大学の特色を出しながら評価するため短所につながる面は表に出にくくなっている。従って、自己評価書の書き方の上手な大学が高い評価を受けようになりやすい。短所を認識し積極的に改善に取り組んでいる大学の評価が低くなる恐れがあることは問題である。

機構側の想定している評価対象は、一般の4年制大学であると思われ、学部段階で教養教育が完成する場合の評価を考えているように思われる。3年編入学生を主体とし、学部・修士一貫教育を考えている本学のような場合にはこのような基準をあてはめにくい。

2 変更点等への御意見

水準を分かりやすく示す記述法で示された5段階での評価を書くだけでなく、各観点との関連において、評価を下した理由についても簡単に説明できると良い。

評価項目ごとに「要素」が設定されたことは有効であったが、固定の「要素」の他に大学が自由に「要素」を設定できるようにすれば、大学の特色ある取組については評価し易くなるのではないか。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

わかりにくかった点

目的と目標の設定に関する説明の充実は有効だったが、「観点」の設定例が非常に理解しにくかった。

問題や課題

自己評価書の原案作成者数人が長期間にわたり重点的に全部を見渡していないと、内容のバランスが崩れてしまうため、大きな負担がかかった。全体を統制することに大きな負担がかからないようにするために、たとえば、数値等を記入するような、もっと簡便な方法・システムを検討すべきであろう。

有意義だと思われた点

大学が行っているさまざまな研究業務を系統的に整理することができた。その整理された結果をみると、どこに今後力を入れるべきか、どこが優れた点かをあぶりだすことができた。ここで整理された結果をCOEの申請にいかすことができた。

2 変更点等への御意見

目的と目標

目的と目標の内容整理ができ、有効だった。

特記事項

評価項目であぶりだした内容を特に記述することができ、有効だった。

評価水準の言い回し

もう一步踏み込んで、アンケート形式で5段階方式くらいでこたえられるようになっていると有効と思われる。

上越教育大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

なし

2 変更点等への御意見

特記事項の新設については、趣旨を含めて評価できる。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- ・ 「...とらえ方」と 「...目的及び目標」を独立して立てる必要があるか、更に工夫していただきたい。当初から、自己評価について反復を余儀なくされた記載指示があり、執筆 = 自己評価者泣かせであったことは指摘されているところであるが、 は の中での項目立てで十分である。
- ・ 事前調査結果については、少なくとも分野別で整理して、参考資料としていただきたい。

2 変更点等への御意見

特記事項の新設については、趣旨を含めて評価できる。

富山大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

問題点

1. 年度をまたぐスケジュールで実施することについて、重ねて再検討をお願いしたい。教養教育の企画・実施等に関する最上位の委員会である教養教育運営協議会の中に、11人のメンバー（教養教育の各授業科目に対応する8部会の部会長を中心とする）からなるWGを設置して目的・目標の整理ならびに自己評価報告書の作成にあたった。『自己評価実施要項』等の配付後すぐに（1月末）WGを設置したものの、年度末にほぼ半数のメンバーの交代があり、また担当事務職員にも異動があるなどして、作業は実質的に2ヶ月近く中断され、最後は非常に厳しい日程で作業せざるを得なかった。

2. 自己評価の根拠としてどの程度のデータ等を提示すればよいのか判断しにくい面があった。『自己評価実施要項』によると、データ等は全て自己評価書の本文中に記載することが求められているが、これにより難しい場合には別添としての提出も可能であるかのような但し書きがある。別添の資料が認められるということであれば、より多くの資料を提示することが可能である。資料の提出方法が恣意的にならないような原則を確立してもらいたい。

3. 目的と目標の対応関係を明確にすることがむづかしかった。特に「豊かな人間性」「高度な倫理観」といった伝統的な教養教育の理念に関してそうであった。

4. 自己評価報告書の作成にあたっては「観点」が基本単位となることが、経験的に納得できた。ところで、機構の評価の建前は、目的・目標の設定を優先するものであり、設定された目的・目標に相応しい観点を設定すべきである、とするものであろう。しかし実際には、『自己評価実施要項』の中で「評価項目」と「要素」が設定されており、さらに『評価実施手引書』に「観点例」が示されていて、自己評価報告書の作成にあたってはおのずとそれを参考にすることになり、自己評価の枠組みは現実には相当程度リジッドであると言わざるをえない。結果的に、「観点例」に対応するように目的・目標を設定せざるをえなくなってしまうのではないか。

5. 自己評価報告書を作成する際には、本学では「評価実施手引書」の「観点例」にほぼ沿う形で観点を設定したが、その際、例えばFDに関して、「1実施体制 要素3、ファカルティ・ディベロップメ

ント」と「2教育方法、要素1、学習指導方法」との両方に関係するというように、すっきりと分類しにくい面があった(むろん、これはFDの定義とも関係する)。また、例えば「1実施体制、要素1」で、「教育課程を編成するための組織」と「教養教育を検討するための組織」を取って分ける必要があるかどうか疑問に思った(むしろ、両方は一元的であるべきではないか)。このようなことは他のところにも見受けられ、「要素」や「観点(例)」をさらに整理する必要があるように感じられた。

自己評価報告の作成において「観点」の設定が極めて重要であるからには、そして恐らく大半の大学が上記「手引書」の「観点例」に従って観点を設定したであろうからには、「観点例」は極めて重要な意味をもつものとなっていくであろう。今後、特に「観点例」を、いっそううまく整理していただきたい。

有意義な点

1. 本学の教養教育の現状を、特徴や長所・短所を含めて、データに基づき、あらためて検証できた点は有意義であった。

さらに、自己評価報告書の作成に、各学部及びセンターの代表者なども(とりわけ最終段階において)ある程度関与したことは、教養教育の目的や実状を、あらためて全学的に確認し周知するよい機会となった。

2 変更点等への御意見

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 現在行っている自己評価の方法は、過去にさかのぼって目的・目標を作成し、それに応じた観点を挙げ、評価を行うものである。本来は、平成12年度中に平成13年度の目的・目標を明文化し、それに基づいて、平成13年度に実施した内容について自己評価するものである。そのような意味から、今は試行期間であり止むを得ないと思われるが、現行の自己評価は作為的、恣意的でむなしさ、時には矛盾さえ感じる。現行の方法では、大学の改革・改善に役立つよりも、点検評価のための報告書作成の技術が身につくだけと思われる。

2. 取組や活動を「社会と連携及び協力するための取組」と「研究成果の活用に関する取組」に分類して評価するよう指示されていたが、実際の取組や活動は両方の性格を持っているものが多く、分類にとまどったり、記述の重複が避けられなかつたりすることがあった。取組を分類することは、評価の目的を明確にする上で重要であると思われるが、分類の仕方にさらに一工夫加える必要がある。

3. 観点例は、作業を進める上で大いに役に立った。しかし、機構の評価が各大学の努力の程度を比べるものであるとすれば、全ての観点を各大学が独自に設定するのではなく、欠かせないと思われる基本的な共通観点を設定し、それに大学独自の観点を加える方がいいのではないだろうか。

2 変更点等への御意見

1. 特記事項は、大学の特色をアピールするのに有効であった。
2. 根拠となる資料等を本文中に挿入することについて、挿入の方法によっては、本文が読みにくくなることも危惧される。本学では、根拠資料に番号を付けて各観点の最後に記載し、本文中には資料番号のみを示すといった方法を採用したが、今後の参考にするため、評価者にとってどのような形式が最良であるのかを示して欲しい。

富山医科薬科大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価書作成に携わった教員から提出された意見は次のとおりです。

< 有意義だった点 >

- ・本学では教養教育を対象とした外部評価を昨年度に受けており、今回の自己評価により、本学における教養教育の現状に関して更に整理・理解が進んだように思う。

< 課題・問題点など >

- ・特定の部分だけでなく、自己評価書全体を公表すべきである。
- ・大学の形態等について「暗黙のひな形」的なものを想定しているとしか考えられない設問があり、それに外れるような場合は非常に書き難い(例えば、「総合大学において、全学で行う教養教育」のみが想定されているように感じられた)。
- ・このような「書面+ヒアリング」で正当な評価が可能であるか確信が持てない。自己点検評価書の提出を受けて、評価機関から数人のスタッフが来学し、一定期間滞在して十分に調査した上で評価すべきではないか(少なくとも、JABEE程度の評価体制は必要であると思う)。
- ・大学では限られた年限の内にある程度の学力レベルを学生につけることを求められている。その時評価されるべきは「入学時にどの程度の学生」を「卒業時にどの程度の学力で卒業させるか」である。この視点で評価が行われなければ、立つ瀬のない地方大学が出てしまわないか。大学評価・学位授与機構の「評価」はそのような観点で行ってほしい。
- ・教育現場に強いる労力が大きすぎる。各大学が「自己評価」するのではなく、「大学評価・学位授与機構」による独自の調査等が行えないか。

2 変更点等への御意見

自己評価書作成に携わった教員から提出された意見は次のとおりです。

< 目的及び目標に関して >

・目的・目標の設定に関して新しい視点を学ぶことができたことは有意義であった。しかし、既に大学で定められている目的及び目標の捉え方と、自己評価の中で新たに定義された目的及び目標の捉え方の間に相違があり、混乱した。

・目的及び目標にアウトプットのなものだけではなく、インプットのもの、プロセス的なものも取り入れた。しかし、従来掲げてきた目的及び目標にインプットのものとプロセス的なものは含まれていなくて、そのことを目的及び目標に掲げることに関しての合意を形成する時間が少なかった。

< 要素の設定に関して >

・要素を設定することで、自己評価報告書が作成しやすくなった。

・項目、要素、観点における自己評価結果を文章で表すのは（しかもその表現が、項目、要素、観点で異なっている）、評価報告書を冗長にするのみで意味がない。自己評価結果は、項目、要素、観点の全てに対して共通に、「A、B、C、D、E」の5段階評価が望ましい。

< 特記事項に関して >

・肝心の評価項目の部分を公表せずに、評価項目に当てはまらない「特記事項」だけを公表することはいかがなものか。もし、「特記事項」のみを公表するのであれば、「特記事項=全体のまとめ」とすべきであり、現在の位置付けは不適當のように思える。

< 全体に関して >

・改善は行われているものの、複雑でわかりにくい。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価書作成に携わった教員から提出された意見は次のとおりです。

・本学にあっては、間近な独法化や統合・再編問題などについて全学をあげて 検討中であるこの時期に、研究活動面における自己点検評価が出来たことは有意義であった。

・今回の「自己評価」の趣旨を全学的に周知徹底するために、書面による広報 とアンケート調査を行ったが、十分に目的を達したとは言い難く、この点に課題を残した。

・社会との連携を念頭においた研究面での活動・取組としては、当該年度になって初めて開始されたものが多く、未だ目標達成年度に至っていないために、 具体的成果をあげて自己評価をすることに困難を感じる点があった。

・根拠資料に関しては、事務局で管理している資料に加えて新たにアンケート 調査により収集したものを含めて膨大な量になるために、その「分析」と報告 書における「提示」の仕方に苦慮した。

・情報収集及びその分析作業が年度末及び年度始めの多忙な時期に重なったこと、こ

れ以外にも同工異曲の調査が頻繁に行われていることなどのために、担当する部局や個人に過酷な負担を強いている。このため、評価機構側には評価報告書のフォーマットをさらに簡素化することを要望したい。また、大学側でもフォーマットに対応した情報をあらかじめデータベース化すること、などの対策が必要である。

2 変更点等への御意見

自己評価書作成に携わった教員から提出された意見は次のとおりです。

・評価項目に「要素」を設定した点は、一つの活動・取組を様々な観点から評価することができるので有用であった。その反面、同じ活動を別の評価項目に重複して取り上げることにもなり、記述が冗長になりやすく部分的には混乱する点があった。

・「特記事項」に関して、その趣旨が必ずしも明瞭ではないため、ここでは特に記載しなかった。その理由は2つある。一つは、それ以外の各項目の中でも十分に記述出来ると考えられること。2つには、大学全体の再編・改革の検討が進行中であり、将来構想と関連して研究活動面でも様々な改革や新たな取組が行われることが予想されるが、現時点では不確定要素が多いために、「特記事項」として記載することは困難であること、のためである。

金沢大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

今回の自己評価は、評価の対象となる活動を2つの取組（社会と連携するための取組、研究成果の活用に関する取組）に分類し、それを評価項目ごと（研究活動面における社会との連携及び協力の取組、取組の実績と効果、改善のための取組）に観点を決めて評価することであった。

評価の観点を決めるので、その観点到属するものにはどのようなものがあるかを知る点では確かに優れているが、評価対象に挙げられたものがどのように取り組まれ、どのような成果を挙げ、それをどのように改善したのかについて一連の評価をすると、個別の対象の動きがより鮮明になる場合もあるように思われる。

2 変更点等への御意見

福井大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1. 大学での裁量の余地が比較的多くあり、この点については評価できる。
2. 評価項目として「教育の効果」が設定されているが、そもそも「教養教育」の効果「測る」こと自体（しかも5年程度の単位で行うこと）が極めて困難な作業である。しかし、測らざるを得ないということであれば、この評価項目の「要素」の設定方法にもう少し工夫が必要であると思われる。

2 変更点等への御意見

1. 目的及び目標の設定に関する説明を充実したことは評価できる。しかし、教養教育の理念に則して言えば、その内容は「幅広く深淵」であるのに、具体的な目的及び目標を設定するにあたっては、評価する（測る）ことに困難を生じかねない「幅広さ」や「深淵さ」についてはその対象から除かざるを得ないというのが実状であり、この点について検討が必要であると思われる。
2. 評価項目に「要素」を設定したこと、「特記事項」を設けたことについては、書くべき内容を具体的にイメージできるようになった点において評価できる。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 研究活動は「取組の分類1と2」に区分して評価したが、活動内容によっては、明瞭な区分が困難であった。どちらかに分類することによって、かえって評価内容の記述が断片的になった場合もあり、分類の区分の必要性及び分類の内容については、さらに検討をお願いしたい。
2. 各大学における研究活動は多岐にわたり、また大学の規模、特色によって、評価項目・内容、評価方法は千差万別である。そのため、評価の観点を一律に設定できないことは当然であり、自己評価実施要項第2章の「3 評価の観点的設定」の説明も抽象的な表現にならざるを得ないことは理解できる。しかし、観点の適切な設定は今回の自己評価書作成の中で最も難しい作業であったので、観点の取扱いについては、さらに検討をお願いしたい。

2 変更点等への御意見

全ての評価内容について、根拠資料の本文中での記載が必要とされたことにより、本文中の評価内容の記述が非常に明解になった。この点から、今回の根拠資料の記述法は優れた工夫として評価できる。

福井医科大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

有意義な点

今後は、研究・診療活動をする上で、社会との連携及び協力をより意識するようになるだろうという点である。

問題点

- (1) 総合大学と単科大学を、同じ頁数の内容で比較できる評価が可能なのか疑問に感じた。
- (2) 短い期間での社会との連携及び協力になじまない領域の研究者などに対し、ある種のプレッシャーにならないかという点である。本学の場合、臨床の領域が必然的に内容が多くなり、基礎系の教官に少し抵抗感があった印象を持った。
- (3) 自己評価の水準の判断に際して、その基準が主観的となってしまった。(客観的データが乏しかった)
- (4) 実施要項の説明文、特に「インプットの」「アウトプットの」の意味が理解し難く、具体的例示を示してほしかった。
- (5) 字数の制限が厳しく、大学の特色を十分に述べるができなかった。
- (6) 評価機構が行う評価の方法についての説明がもう少し望まれた。
- (7) 全体的なイメージがつかみにくかった。

2 変更点等への御意見

- (1) 特記事項が設けられたことは、評価できる。
- (2) 目的及び目標の設定に関する説明の充実は、評価できる。
- (3) データの提示を本文中にすることは、「読みやすい」利点があるうが、提出できるデータに制約が加わった。
- (4) 参考資料1頁の「評価項目に「要素」を設定」の項の、はじめの5行に何が書いてあるのか、このことに御議論を重ねられた御担当の方には当たり前の表現かも知れませんが、すぐには殆ど理解出来なかった。可能なら、もう少し連携の対象となる一般の方も含め、何を評価しているのかがわかりやすい表現を用いた報告書であることを希望する。

山梨大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

- ・ 教養教育の効果という項目について、教養と言っても一義的な内容ではないので、効果という形で問えない領域があることを前提にして欲しい。
- ・ 教育方法の要素における成績評価の厳格性の基準については簡単に評価できないのではないか。
- ・ 教育課程の編成において授業科目の内容まで踏み込む事について、今の大学の体制では直ちには無理があるのではないか。身分保証がされている国立大学では、評価はできるが是正は困難ではないか。
- ・ 予算の関係上、施設整備に十分な措置が講じられない地方小大学に、全大学統一な施設面での自己評価をさせることにどんな意味があるのか。改善の見込みの少ない評価はいかなるものか。
- ・ 今度の自己評価は、マニュアルがしっかりしていて、ある程度はやり易い反面、基本的な各大学の教養教育の理念などの根本的な哲学の問題に関し、マニュアルを通して規制をしてしまうものである。この問題に関してどのように考えられるのか。

2 変更点等への御意見

特記事項を設けたことは、このような改革期にあって、各大学においては不断の改善努力がされているので、評価できる。

しかしながら、各大学とも改革中であり、その中で自己評価を一律に行うことは、かなり無理があると考えられる。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- ・ 「取組の現状」の後に「目的及び目標」が記述されるので、時系列が逆となり、通して読んだ際に解りにくいのではないか。
- ・ 「取組の分類」ごと、「評価の観点」ごとに自己評価するようになったが、特に「改善のための取組」では、一元的に改善策を講じている場合が多く、分けて記述するのが困難であった。
- ・ 全ての評価に対し根拠資料の提示が求められているが、様式の中に貼り付けると膨大な量になる。厳選または必要部分を抽出するのであろうが、困難なことが多かった。
- ・ 評価の項目ごとに字数制限があるが、書きたいことを全て書くには文字数が少なすぎる。機構側で求めていた形とは、評価結果報告書のような箇条書き的なもので良かったのか。

2 変更点等への御意見

- ・ 個々の大学で「観点」を設定し、その「観点」ごとに評価するように変更され、自己評価を行う際の視点が定まるようになった。
- ・ 「特記事項」を設けたことにより、大学の現状を機構側の評価員及び社会に理解してもらうことができる。
- ・ 「評価の観点例及び根拠となるデータ等例」が添付され、大学側にとって便利になったが、多くの大学で画一的な評価が行われるのではないかと懸念される。
- ・ 様式のダウンロードが可能となり、利便性が向上した。
- ・ 根拠データを本文中に添付することは、読む側にとって便利である。
- ・ 評価項目の水準の表現が5つに分類され、利用しやすくなった。

山梨医科大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

全学テーマ別評価（教養教育）は2月の説明会からスタートし、7月末締切りのスケジュールであるが、2月、3月は教官側にとっても事務局側にとっても学期末や入学試験の作業等で極めて多忙の時期である。4月に入っても事務局職員は新生入の手続き等がある。単科大学では教養教育担当教官も事務官も少なく、色々な仕事を掛け持ちしている。今回のように卒業生へのアンケートも必要になるような評価では準備や回収にも時間がかかり、評価作業が過重になっている。年度をまたがるスケジュールは、委員の任期等の問題もあるが、スタートを1ヶ月程遅くできたら、と考える。

2 変更点等への御意見

目標、目的の設定に関して、その性格がアウトプットの、プロセス的、インプットのなものに分けられ、要素、特記事項が設定され、また観点の例が挙げられたこと等の具体的な記述は自己評価の作業を進める上でたいへん役立ち指針になりました。説明書については精読するとその内容は理解できるが、もう少し分かり易い形式にしていただけたら、と考える。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

平成13年度着手の評価では、「評価の観点の例示」、「評価項目の水準を分かりやすく示す記述」等、自己評価の手順について段階を踏んだ作業を進められるよう配慮がされたが、逆にその手順に沿った作業が、型にはまりすぎるくらいがあり、自由度が少なくなった印象がある。被評価機関の自由な評価手法も取り入れられる余地があっても良いのではないかと、との印象を感じた。

2 変更点等への御意見

信州大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

【全般的事項】

(1) このような評価作業自体は、当該大学にとっても国民にとっても非常に有益である。

(2) 自己評価書で高い目的・目標、厳しい観点を設定した場合、自己評価は厳しくならざるを得ないが、機構側で目的・目標の高さ、観点の厳しさを勘案して評価してもらえないのではないかと不安があった。

(3) 教育の効果だけを評価すべきということ

これは当方の評価の仕方の責任でもあるのだが、実態に対する評価が難しかった。すなわち、目的・目標が優れ、その実施体制も優れ、さらにこれらは公表もされているが、実は、適当にやりくりしているのが実態と言うことがあり得る。

たとえば、「教養教育を担当する教員体制」はすばらしいが、実は、引き受け手がないのでくじ引きで授業担当者を決めていることだってあり得る。逆に、取り柄もないような教員体制だが、授業担当者の熱意がすぐれた教育成果を生んでいることもある。

とすると、外部評価は、結局は、結果としての「教育の効果」に対してのみなされればよいのではないだろうか。内部的には、目的に行き着くための途中段階やら措置を評価する必要もあるが、外部から見れば、ということは学生からすれば、よき結果をもたらしてくれれば途中はいつでもよいのである。

つまり、語学ラボが完備していても効果を上げていなければ無意味であり、完備していようがいまいが、教員の工夫で力が付けば万々歳である。

【個別的事項】

(1) 「(2) 教育課程の編成」について

【要素1】教育課程の編成に関する状況

【要素2】授業科目の内容に関する状況

これらが2つの要素として分けられている意図は理解できないわけではないが、要素1でも授業科目の内容に触れない記述は不可能であるため、要素1と2の書き分けに苦慮した。

(2) 「(4) 教育の効果」について

【要素1】履修状況や学生による授業評価結果から判断した教育の実績や効果の状況

「履修状況から教育の効果を判断する」という趣旨は理解できなかった。

2 変更点等への御意見

- (1) 目的・目標の設定に関する説明を充実したことは評価できる。しかし説明会（東京）での大塚教授の説明（現状では目的・目標が過去にあったことにして、とせざるを得ないが、大学評価作業が定着していくことにより、いずれ「目的・目標」がその文字通りの意味で機能していくことを期待する）によって始めて納得できた。
- (2) 『要素』と『特記事項』の設定は適切であった。『観点例・根拠となるデータ等例』は有難かった。『根拠データ貼り付け方式』は、評価書を書く側にとっても有難かった。『水準』を5段階にしたのはよいが、「おおむね・かなり・ある程度」という段階表示が日常言語の用法に則していない（「かなり」は良い点を積極的に認める、という語感がある）ため、問題があり改善を要する。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- (1) 評価方法等の説明における「インプット」、「アウトプット」、「アウトカム」や奇妙な用語「インプットの」、「アウトカムの」、「プロセス的」の多用は分かりにくい。もっと美しく分かりやすい日本語の用語で表現していただきたい。
- (2) 自己評価実施要項は、熟読玩味しないとまだまだ分かりにくい。
- (3) 機構は、以下の現状を再認識し、より進化した評価システムに努力していただきたい。
- 1) 評価機関である機構は評価の専門家集団で形成され、専門家集団が育ちつつあるが、評価される機関ではそうではないこと。とりわけ評価の専門家たる教員が育っていないこと。
 - 2) 評価される機関は評価機関を選択できないこと。
- (4) 実施要項では随所に字数制限が記されているが、機構に照会して初めて空白もカウントするとの解釈であることがわかった。空白もカウントする場合は、誤解のないように「行数」制限で表現すべきである。

2 変更点等への御意見

- (1) 将来構想や改革の方向性を記述し、大学等の個性や特色を發揮できるという観点から、「特記事項」の新設は評価できる。
今後とも、大学等の個性や特色を助長し、特性に配慮した評価の実施に一層の努力を期待したい。
- (2) 根拠となるデータ等を自己評価書本文中に記載する形での提示方法も評価できる改善点である。ただし、根拠データの提示は1箇所だけで可とし、データ等の番号と提示頁の明示によって、複数回利用できるように改めるべきである。
- (3) 各評価項目ごとに記載事項の分量制限が一律であるのは妥当性に欠ける。「2 取組の実績と効果」と「3 改善のための取組」の字数制限が同一なのは極めてバランスが悪い。例えば、「各評価項目ごとに10,000字以内」など、柔軟に制限することにより、大学・学部等の特色と個性を反映した評価につながるものと思われる。

岐阜大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

- ・ 大学・学部の個別自己評価以上の内容であったので、この自己評価結果を今後の行動指針に役立てたい。

2 変更点等への御意見

- ・ 要素設定に関して、全国的な共通性・統一性に沿ったガイドラインとしての必要性が理解でき、各項目分けなので記述が容易であった。
- ・ 資料データの本文中への記載に関して、本文に図表を使うことができ、説明がし易くなった。
- ・ 評価項目の水準等の記述性に関して、どうしても主観的な水準にならざるを得なかった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- ・ 根拠を必要とする記述及びその根拠となる資料の範囲や程度の判断に苦慮した。

2 変更点等への御意見

- ・ 特記事項が設けられたことにより地方大学の特質として、大学と県との研究協力という観点から記述することができた。

静岡大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1) 「学生による授業評価」という用語の範囲が広く、本学が従来実施してきた様々な「学生アンケート」がすべて含まれるのか、あるいは「評価」に重点のあるもののみが該当するのか明確でなかった。

2 変更点等への御意見

1) 目的及び目標の説明はあったが、なお概念規定（というより概念の解釈）に幅があり、例示があればよかった。
2) 「特記事項」は、将来の課題や改善点を明確化するうえで有意義であった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

「研究面での社会との連携及び協力」の項目が、著しく工学・応用部門に偏った内容である。

基礎と応用の学術の教育と研究を目的とする大学は専門学校ではないので、あたかも応用部門中心の「社会貢献」活動を評価することに主眼がおかれると、大学らしさを損なう。高等教育機関であり同時に研究機関であることを前提とする大学に求められるべきは、応用部門と基礎学問のいわば「車の両輪の均衡ある発展」を期待すべきである。全国の大学評価を行う際の基本的立場をそのように考えるとすれば、今回の「全学テーマ別評価」では、初めての取り組みであることをふまえて、全般的な「研究面での社会貢献」を調査目標とすべきだった。

また「研究面での社会との連携及び協力」と「教育面での社会との連携及び協力」を区別する弊害もあるように思われた。

2 変更点等への御意見

評価項目に「要素」をもうけた点、「特記事項」の記載を認めたのは評価できる。

その他、この「評価機構」の調査が基本的には各大学等の発展を願ってのものと認識しているが、平成16年度に移行を予定している国立大学の法人化以降、文部科学省の「大学評価委員会」（仮称）から要請される「研究」等の評価に参加することになると、資源の傾斜配分の資料とされると判断される。これについて評価機構として現在の段階から自己の課題の整理と説明を行うべきである。

浜松医科大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

特にありません。

2 変更点等への御意見

特にありません。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

特にありません。

2 変更点等への御意見

「研究面における社会との連携活動」の評価において、最も評価されるべき項目は、社会のニーズに応えるどのような活動を行ったかということであろう。これなしには、その他の活動がいくら充実していても、評価は低いものとなるべきである。しかるに、今回の評価のやりかたは、何をしたかの項目と、活動の開始のために何をしたかと、活動の後に何をしたかという項目がほぼ均等の比重で扱われる形式になっている。これが、今後、各項目での評価がいずれも高まるようにする努力目標を示すものであるならば、大学の管理事務活動量が増加することになり、委員会等の組織の肥大化に至る。この理由は、大学活動の成果の基準は単一ではなく多種多方向性を特徴としており、営利を追及していないためである。学長には、精神的リーダーシップはあるが、利益高に基づいて権力が保証される社長のようなリーダーシップは限られている。このため大学の全学的運営は委員会方式にならざるを得ない。これは、大学が雑務だけに追われる官僚的機構に陥ることを意味し、社会との動的な連携活動を目指そうとする当初の目的にそぐわない結果となる。したがって、前回（教育サービス面における社会貢献）評価方式のように、どのような活動を行ったかの詳細と、その活動がどのような成果を生んだのかを自由に記述する方式の方が、型にはまった評価基準を作らず、将来の活動を活性化する可能性が高いのではないかとと思われる。

名古屋大学

< 教養教育 > < 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- ・根拠データ、資料を自己評価書の中に、別添ではなく、貼り付け等で行う方法は 作成する側 にとって大変手間のかかる作業である。評価書を作成する仕事に専門的に従事できない現状で は、作業的に手間がかかる現在の方法は本務の仕事に多くの支障をきたしている。評価書作成 側の事情を斟酌した省力化を今後の最優先の課題としてもらいたい。
- ・総合大学と単科大学では取組の量に相当な差がある。それを同じ 3000 字から 6000 字の枠に一律 に作成要求するのは無理があると考えるので、書式を少なくとも二様にしてもらいたい。

2 変更点等への御意見

・機構独特の用語が大変判りにくい。たとえば、「目的」と「目標」の説明ではそれぞれの言葉を説明するのではなく、ゴールをなぜ二つに分けて書いてほしいのかを説明する必要があるのではないかと。また「評価項目」「評価項目ごとの取組」「項目ごとの評価プロセス」「評価項目ごとの水準」「評価の観点」「観点ごとの自己評価」などは概念だけで説明されても理解は難しい。したがって、言葉で説明するのではなくて、図解や例示を入れてもっと簡潔に説明してほしい。

・今回の件で一番困ったのは、目的・目標を記述したあとで、評価の観点を設定する段階である。評価の観点を例は明示されていたが、それよりはむしろ目的・目標と評価の観点の関係をどのようにつけたらよいかを具体的に例示してもらおうほうがよかった。

・教養教育は総合的な視点に立って目標実現に対する評価が重要であると考えているが、観点という仕組みを導入して部分毎に評価するシステムが果たして適切であったか疑問である。（根拠データは、多くの観点と関連しているものが多い。）

愛知教育大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- ・大学の個性や特色を発揮できるよう、当該大学の設定した目的と目標に則して自己評価をすることができたのは良かった。今後もそのようにお願いしたい。
- ・「目的」と「目標」に関しては、視点や留意事項の説明があるとはいえ、日常ではどれほど違いが意識されているであろうか。むしろ「目的」と「目的達成のための（個別的）課題」というような表現の方がわかりやすいのではないかと。
- ・「水準をわかりやすく叙述する」ということで例文があがっているが、「・・・おおむね貢献しているが、改善の余地もある」と「・・・かなり貢献しているが、改善の必要がある」という文章の差はわかりにくかった。
- ・自己評価活動の大切さを実感することができ、有意義であった。貴機構のご努力に心より感謝する。

2 変更点等への御意見

- ・上述したように「目的と目標」という用語の使用にやや問題を感じる。
- ・本来的には自己評価はそれぞれの機関や機関構成員の活動それ自体の目的、課題、内容、工夫、成果の活用等にかかわって実施する方が、わかりやすく叙述できると考える。貴機構のご配慮には感謝するが、『要素』設定等の手続きは、多様で個性的な活動を一定の枠にはめて無理に評価するような感じがあった。

名古屋工業大学

< 教養教育 > < 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

2 変更点等への御意見

1. 「評価項目に「要素」を設定」について

各評価項目において何を評価するのかを明確にするため、「教養教育」には、新たに「要素」が設定されたことにより、評価すべき内容が明確になりました。

しかし、「研究活動面における社会との連携及び協力」においては、「要素」ではなく、「取組の分類」ごとに評価することになっておりました。この「取組の分類」が、「評価の対象となる活動の分類」と同じであったため、観点ごとに評価を行う際に「取組の分類1」と「取組の分類2」の観点が同じになるものがあったため、この場合にどう記載すればよいのか、迷う点がありました。「取組の分類」ではなく、「教養教育」で設定された「要素」のほうが評価すべき内容が明確になり、わかりやすいと思います。

2. 「根拠となるデータ等の提出方法」について

根拠となる資料・データ等は全て自己評価書本文に記載することに変更されたことにより、わかりやすくなったと思います。

ただ、自己評価を行う際、どの範囲まで「根拠となる資料・データ」を示して記載すればよいのか、迷う点がありました。どの範囲まで「根拠となる資料・データ」を示す必要があるのかを、実施要項でもう少し明確にいただけるとわかりやすくなると思います。

豊橋技術科学大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

(1) 今回の自己評価書の構造は下記のとおりであり、多様な活動を取り組ごと、観点ごとに評価することになっている。一般に研究活動面における社会連携のための活動は、連携推進、成果の活用、など多様な要素を同時に含んでいる。今回の自己評価書の構造では同一の活動を、異なる観点から繰り返し評価することになる。個々の活動を取組や観点毎に切り分けるのが困難な場合や、どこに分類すべきか判断が難しい場合に多々遭遇した。結果的にRedundantになった部分もあることを否定できない。

研究活動については比較的定量化しやすい評価項目が多い。活動内容を的確に把握し評価結果を有効活用するためには、どのような構造(取組の分類や観点など)が適切か、今回の結果を基に検討が必要に思える。

< 評価書の構造 >

1 研究活動面における社会との連携及び協力の取組

(1) 取組の分類ごとの評価

- ・社会と連携及び協力するための取組・・・観点ごとの評価
- ・研究成果の活用に関する取組・・・観点ごとの評価

(2) 研究活動面における社会との連携及び協力の取組の水準

(3) 特に優れた点及び改善点等

2 取組の実績と効果、3 改善のための取組

(2) 限られた紙面(字数)の中での的確に大学の活動を評価する指標として何が適切か、今後の検討課題としたい。

(3) 多様な指標による大学の活動評価結果に加えて、評価に供する教官の多様なデータを収集出来たことは有意義であった。データベースとして蓄積しておきたい。学内外へのこれら情報の速やかな発信と更なる改善への活用も必要である。

2 変更点等への御意見

- 1) 前述したように評価項目に『要素』を設定したことは評価を行いやすくする一方で、切り分け方やどこに記述すべきか判断しにくくなる面と、さらに内容がRedundantになる恐れもある。
- 2) 結局、定量的な物差しが必要であるが、定量化しにくい活動(成果)についての評価が難しい。
- 3) 今後、定期的にこのような評価を行うには、費用対効果(評価に費やす労力・時間とその成果の活用による改善効果)を考えた主要評価指標の設定が必要になるのかもしれないが、それはある程度情報の蓄積が必要になるだろう。
- 4) 「自己評価」結果の「評価」は、活動自体の客観評価と、自己評価が方法・物差し等を含めて適切であったかの評価に分けられる。前者が本来の目的であろうし、自己評価方法(目標設定も含めて)はどうあるべきかの早い検討・習得が求められているのであろう。

三重大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 各評価項目ごと「社会と連携及び協力するための取組」及び「研究成果の活用に関する取組」の2つの分類に区分した上で自己評価を実施したが、各評価項目の記述内容に重複する部分が生じた。
2. 自己評価を実施する際の観点の設定について、観点の設定時期、「観点例」からの観点の決定等に意見の相違があった。
3. 各評価委員に「自己評価実施要項」の内容を理解してもらうことが難しかった。
4. 過去5年間の取組や活動の実績を分析した結果、根拠データがあり、かつ評価の高い内容のものについて記述することとなった。

2 変更点等への御意見

特になし。

滋賀大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

観点ごとの評価結果

大いに問題である。特に「研究連携」のようにテーマが必ずしも特定のとはいえ、また取組の対象が多種多様であるものについては、取組全体として評価するのではなく、個々の活動の評価を積み上げなければならないが、一つの活動の評価が観点ごとに細切れになり、トータルな評価とはなり難い。ある程度の数の観点を設定し、相当数の活動を取り上げる場合、取組全体の評価結果をまとめた形で記述することは難事である。

個々の活動や取組全体の状況ごとに、いくつかの観点を設定して評価するよう是非とも改めてほしい。

2 変更点等への御意見

目的及び目標の設定に関する説明の充実

このこと自体は評価できるように見えるが、自己評価実施要項では、目的及び目標の設定の意義に関わって、「本テーマにおける『目的』及び『目標』は、現に設定している目的及び目標や、既に行ってきた活動の意図や課題を踏まえつつ、機構の評価の枠組みにおける目的及び目標として、改めて整理の上、明確かつ具体的なものに記述し直す必要があります」と記述している点をも勘案すると（「教養教育」、「研究連携」とも11頁）、大学等が自由に設定した「目的」及び「目標」に即して機構が評価するというスタンスではなく、機構が大学等の設定する「目的」及び「目標」に枠をはめるというスタンスを採ることを表明し、その具現化を図っているようにもみえる。そうであれば、機構の実施する評価は大学等の設定する「目的」及び「目標」に即して行うという基本に反すると言え、疑念が残る。

評価項目に「要素」を設定

「教養教育」のようにテーマがより特定の取組の対象を画定しやすいものに関しては、「要素」が評価項目の内容の趣旨に即して示される限りで、評価項目に「要素」を設定することは評価できる。しかし、「研究連携」のようにテーマが必ずしも特定のとはいえ、また取組の対象が多種多様であるものに関しては、そもそも評価項目の内容の趣旨に即した「要素」の設定が可能か、疑問が残る。

なお、「研究連携」において、評価の対象となる活動を二つに分類したことに、問題は残る。「研究連携」には、必ずしも「社会と連携及び協力するための取組」と「研究成果の活用に関する取組」に截然と区分できないものがある。区分し難いものを無理やりどちらかに分類することは、実態を反映しないことになり、他方、両分類で扱うことは、一つの取組を分断して評価することになり、問題である。

「特記事項」の新設

それなりに評価できる。しかし、それがより総合的な評価の追求を放棄することの代償であってはならない。そもそも評価項目ごとの評価では十分でなく全体的な評価が必要なのではないか、評価対象を過去5年間の状況とするとしても進行中の改革、今後の改革課題・将来構想等の展望をも勘案した評価をすべきではないか、制度面に起因する活動の制約を評価に際して考慮すべきではないかなど、本来の評価方法について検討すべき課題は多い。それを追求してこそ、「進化する評価」となるのではないか。

自己評価の利便性の工夫

それなりに評価できる。今後とも、本来大学等が自由に記載できる内容を不当に限定・誘導しないよう留意してほしい。

根拠となるデータ等の提出方法

2

大いに問題がある。「自己評価の分析に基づいて評価を行うという趣旨」から、根拠となる資料・データ等を、「全て自己評価書本文中に記載（コピーの貼り付け等でも可）する形での提示を求めること」が論理的に帰結するわけではない。資料・データ等の本文中への記載は、次の問題がある。

（１）資料・データ等が頻繁かつ多量に本文中に記載されれば、本文が極めて読みづらくなる。この事態は、評価を受ける側にとっては不本意である。また、機構の評価担当者が大学等の自己評価書の全体像を的確に理解するのを妨げないか、懸念が残る。

（２）大学等にとっては、別添とする従来の形と比べ、多大な作業負担となる。

根拠となる資料・データ等は、自己評価書と分離して、別添とする従来の形に戻してほしい。全て自己評価書本文中に記載する形を採るのであれば、提示すべき資料・データはどの程度であれば十分であるかを具体的に示してほしい。評価を受ける側としては、どの程度の根拠が求められるのか分からない状況では、具体的な資料・データをできるだけ多く提示しなければならず、大学等にとっては合理化とならない。

評価項目の水準を分かりやすく示す記述法の変更

水準の表現の種類が4から5に変更になったのは、水準をより適切に表現する上で、評価できる。しかし、この変更によっても、どの程度であれば「十分に貢献している」のか、「おおむね貢献しているが、改善の余地もある」のかなど、区分の基準は依然として不明である。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

観点ごとの評価結果

大いに問題である。特に「研究連携」のようにテーマが必ずしも特定のとはいえず、また取組の対象が多種多様であるものについては、取組全体として評価するのではなく、個々の活動の評価を積み上げなければならないが、一つの活動の評価が観点ごとに細切れになり、トータルな評価とはなり難い。ある程度の数の観点を設定し、相当数の活動を取り上げる場合、取組全体の評価結果をまとめた形で記述することは難事である。

個々の活動や取組全体の状況ごとに、いくつかの観点を設定して評価するよう是非とも改めてほしい。

2 変更点等への御意見

目的及び目標の設定に関する説明の充実

このこと自体は評価できるように見えるが、自己評価実施要項では、目的及び目標の設定の意義に関わって、「本テーマにおける『目的』及び『目標』は、現に設定している目的及び目標や、既に行ってきた活動の意図や課題を踏まえつつ、機構の評価の枠組みにおける目的及び目標として、改めて整理の上、明確かつ具体的なものに記述し直す必要があります」と記述している点をも勘案すると（「教養教育」、「研究連携」とも11頁）、大学等が自由に設定した「目的」及び「目標」に即して機構が評価するというスタンスではなく、機構が大学等の設定する「目的」及び「目標」に枠をはめるというスタンスを採ることを表明し、その具現化を図っているようにもみえる。そうであれば、機構の実施する評価は大学等の設定する「目的」及び「目標」に即して行うという基本に反すると言え、疑念が残る。

評価項目に「要素」を設定

「教養教育」のようにテーマがより特定の取組の対象を画定しやすいものに関しては、「要素」が評価項目の内容の趣旨に即して示される限りで、評価項目に「要素」を設定することは評価できる。しかし、「研究連携」のようにテーマが必ずしも特定のとはいえず、また取組の対象が多種多様であるものに関しては、そもそも評価項目の内容の趣旨に即した「要素」の設定が可能か、疑問が残る。

なお、「研究連携」において、評価の対象となる活動を二つに分類したことにも、問題は残る。「研究連携」には、必ずしも「社会と連携及び協力するための取組」と「研究成果の活用に関する取組」に截然と区分できないものがある。区分し難いものを無理やりどちらかに分類することは、実態を反映しないことになり、他方、両分類で扱うことは、一つの取組を分断して評価することになり、問題である。

「特記事項」の新設

それなりに評価できる。しかし、それがより総合的な評価の追求を放棄することの代償であってはならない。そもそも評価項目ごとの評価では十分でなく全体的な評価が必要なのではないか、評価対象を過去5年間の状況とするとしても進行中の改革、今後の改革課題・将来構想等の展望をも勘案した評価をすべきではないか、制度面に起因する活動の制約を評価に際して考慮すべきではないかなど、本来の評価方法について検討すべき課題は多い。それを追求してこそ、「進化する評価」となるのではないか。

自己評価の利便性の工夫

それなりに評価できる。今後とも、本来大学等が自由に記載できる内容を不当に限定・誘導しないよう留意してほしい。

根拠となるデータ等の提出方法

大いに問題がある。「自己評価の分析に基づいて評価を行うという趣旨」から、根拠となる資料・データ等を、「全て自己評価書本文中に記載（コピーの貼り付け等でも可）する形での提示を求め」ることが論理的に帰結するわけではない。資料・データ等の本文中への記載は、次の問題がある。

（１）資料・データ等が頻繁かつ多量に本文中に記載されれば、本文が極めて読みづらくなる。この事態は、評価を受ける側にとっては不本意である。また、機構の評価担当者が大学等の自己評価書の全体像を的確に理解するのを妨げないか、懸念が残る。

（２）大学等にとっては、別添とする従来の形と比べ、多大な作業負担となる。

根拠となる資料・データ等は、自己評価書と分離して、別添とする従来の形に戻してほしい。全て自己評価書本文中に記載する形を採るのであれば、提示すべき資料・データはどの程度であれば十分であるかを具体的に示してほしい。評価を受ける側としては、どの程度の根拠が求めら

れるのか分からない状況では、具体的な資料・データをできるだけ多く提示しなければならず、大学等にとっては合理化とならない。

評価項目の水準を分かりやすく示す記述法の変更

水準の表現の種類が4から5に変更になったのは、水準をより適切に表現する上で、評価できる。しかし、この変更によっても、どの程度であれば「十分に貢献している」のか、「おおむね貢献しているが、改善の余地もある」のかなど、区分の基準は依然として不明である。

滋賀医科大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

特にありません。

2 変更点等への御意見

特にありません。

京都大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

教育の現状を総括的に把握し、目的・目標を設定し、成果や改善点等を抽出するという作業スタイルは、現状と課題を客観的に認識することができ、有意義であった。

教養教育は、全体として規模が大きく、評価対象が膨大であった。各評価項目・要素等は、それぞれ相互に関連するため、過去5年間を評価するには相当の一貫した現状認識と整理を必要とする。このために、特定の担当者に長期的に負担が集中した。

「教養教育」には、知識や技能の修得を目的とするものだけでなく、思想・文化等に係る歴史的・現代的学術に触れることを通して「豊かな人間性を培う」ことを意図したものもあり、その内容・方法は多岐にわたっている。科目・分野によっては、5年間の対象期間に限定することが不可能な場合もあり、成績評価法、学習指導法、授業形態、学生による授業評価等、示された「要素」の枠に従って評価を行うことが適切であるか疑問がある。

2 変更点等への御意見

「教養教育」がカバーする全てに対して、設定された「要素」に従って自己評価を行うよう強いられるという印象がある。このため、目的・目標の設定においても、これらの「要素」を強く意識せざるを得ず、教養教育の多様性や大学の自律性を狭めるという危惧が感じられる。

「要素」には 大学に対する社会的要請が反映されている面があろうが、社会的要請もまた流動的な面があり、教養教育全体に当てはまるものではない。「教養教育」の評価においては、「要素」は例示的に示す程度にとどめ、大学が自ら設定した目的・目標に沿って、適切な要素区分を選択・活用し自己評価に当たることが望ましい。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

有意義であった点：産学官連携活動を対象とした評価においては、「取組」「実績」「改善」の項目別記述は問題点を抽出しやすく、有意義であった。

わかりにくかった点：テーマ対象が広範囲であり、漠然としていたこと。項目と分類の組み合わせで記述内容が重複する場合があること。

本評価の対象活動（例：実施要項第1章 テーマの概要）として、産学官連携活動が強く打ち出されている。しかし、研究は教育と並んで大学における主要な活動であるため、社会とのかかわりも多岐に渡っており、産官学連携活動以外にも国際社会から地域社会まで多様な活動が「研究活動面における社会との連携及び協力」の対象となると考えられる。対象が広範囲に渡っているため、これらを全体評価し、統一した指定フォーマットに記述することに困難があった。いくつかのサブテーマに分類する方が、本テーマに関する有効な評価が可能になる。

また、評価の観点例が評価実施手引書に示されているが、各項目ごとの分類によっては内容が重複する組み合わせの内容もある。項目、分類、観点の設定の仕方に工夫（例：サブテーマ設定と組み合わせで、自由度を調整する）した方が評価を進めやすかった。

2 変更点等への御意見

「とらえ方」「目的」「目標」「取組」の設定、及び、その説明はわかりやすく、自己評価を行う上で有意義であった。

「特記事項」の設定は、現時点における評価の将来への発展性等を記述できるため、良い方法である。「特記事項」の記述内容に対しては「総合的評価」に代わるものとして所見が示されるが、評価の対象とはなっていない。評価項目ごとに「特記事項」を設け、自己評価の一部として評価対象とするようにすれば評価全体に幅が出る。また、改善への取組が企画・実施されている場合には、積極的に評価されることを望みたい。

さらに、上記1.項と関連して、産官学連携活動以外の活動において、設定された評価項目（「取組」「実績」「改善」）や「対象活動の分類」に従って記述することが適当でないものがある。機構サイドによる説明方法や記述方法に工夫を要すると思われる。

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

教養教育に関する点検・評価の作業は、本学の教養教育に対するポリシーをあらためて明確にする上で、非常に有効であった。また本学の教養教育の取組み状況を点検・評価する中で、改善点と課題を見出すことができたことは有意義であった。

ただ、本学は平成12年度に大きな改組とカリキュラム変更をおこない、また教養教育についても新しい試みを開始したところであるため、今回の点検・評価は、その成果を見極めるという点では時期が早すぎたと思われる。

自己評価の方法に関していえば、まず評価項目についての「インプットの・プロセス的・アウトプットの」の区別は、理屈としてはわかるが、実際の点検・評価の作業の中ではあまり意味をもたないように感じた。また、評価項目ごとの水準の判断の「十分に/おおむね/かなり/ある程度/ほとんど」の区分は再考の余地があるのではないか。三番目が「±0」となる(たとえば「とても良い/良い/普通/悪い/とても悪い」)五段階区分に慣れているため少し違和感があり、「おおむね」と「かなり」の意味合いもわかりにくい。

2 変更点等への御意見

目的・目標設定に関する説明、「要素」や「特記事項」の設定などの改善により、全般的にわかりやすくなり、また点検・評価の作業がやりやすくなったといえる。しかし、要素の下に設定された評価の「観点」の意味がわかりにくい。これは「観点」というよりも、各要素について評価をおこなうための具体的な小項目にすぎないのではないかとと思われる。「項目」の下位カテゴリーが「要素」で、「要素」の下位カテゴリーが「観点」という全体構造になっていることを、明確にしてほしかった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- ・この評価活動を機会に、本学のこのテーマに関わる実態把握を行ったことは有意義であった。
- ・目的及び目標の性格の視点で「インプットの、プロセス的、アウトプット・アウトカム」の区分がよくわからなかった。
- ・評価項目で、(1)「研究活動面における社会との連携及び協力の取組」と、(2)「取組の実績と効果」の違いが明確でない。むしろ、(1)は「実施体制」、(2)は「実際の取組とその成果」とすべきではないか。
- ・【分類1】は「社会との連携及び協力の取組」、【分類2】は「研究成果の活用に関する取組」となっているが、本学のような教員養成系の大学では、両者の区別はつきにくい。

2 変更点等への御意見

特記事項が新設されたことで、本学の将来構想と関連づけて総合的に評価ができたことは有意義であった。なお、評価結果は中期的な計画に反映されるべきであるが、改善は段階的にならざるを得ないことを付記しておく。

京都工芸繊維大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価の方法について、例えば、機構において評価方針に基づく項目を設定し、各機関はその達成度等についていくつかの項目(段階)から選択する。根拠となる資料の提出は必要に応じて最小限とする。また、各機関において記述を要する事項は、今後の課題や展望と、上記評価項目に挙がらなかった項目で、かつ各機関の独自の取組みについて等のみとするなど、より簡潔な方法を検討願いたい。

2 変更点等への御意見

特になし

大阪大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

実施要項は昨年と比べると大変わかりやすくなった。

事前調査は自己評価の進捗を促すという点では意義がある。
しかし、フィードバックの内容が一般的であるため、個々の大学で目的・目標の設定にどのように反映させたらよいか判断が難しいと思われる。
また、フィードバックの時期が6月上旬ということも大学内での作業がかなり進んでいる段階にきているので、有用とは言いがたいのではないかと、内容と時期について検討願いたい。

機構の自己評価を経験したことのない教官にとっては、目的・目標の設定から始まる「自己評価の手法」はなじみの薄いものである。「慣れ」の問題であるかもしれないが、今後、「自己評価の手法」が十分浸透するような方策を検討願いたい。

2 変更点等への御意見

様式をダウンロードするやり方は簡便でよい。

「研究連携」のような広範囲なテーマでは、観点ごとの自己評価は、活動項目やポイントを絞り切れず不向きであると思われる。

制限字数(3,000~6,000字)では、活動項目や記述内容を削らざるを得ず、十分な記述ができ得ない。フリーにしてほしい。

根拠資料を本文中に取り込むやり方は、記述がずれたり、ページがとんだりして作成に手間がかかる。たとえば、必要な資料だけをコンパクトにまとめた「資料集」を別冊で添付する方法等を検討願えないか。

資料部分は空欄でもよいということであれば、自己評価部分の電子媒体の送付は不要ではないか。

大阪外国語大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

わかりにくかった点

本学の教養教育のあり方は他大学のあり方と異なるタイプに属している。特に「4 教育の効果」の項目において、「教養教育」を「専門教育履修段階」と区別することを行っていないので、当初、わかりにくかった。

根拠となる資料・データをどの程度まで示すのかが、わかりにくかった。

有意義だと思われる点

「要素」及び「観点」が示されている点は、具体的に評価を行う際にわかりやすく、有意義であった。

「特記事項」の項目が設けられたことは、現状の自己評価に基づいて今後の改善点を確認し、将来につないでいくことができる点で、有意義である。

2 変更点等への御意見

上記の1でも指摘したように、有意義であった。

兵庫教育大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

有意義だった点

- ・自己評価を実施することにより、これまで気づけなかった新たな課題を発見することができ、結果として大学改革に資することができた。

問題点・課題点

・大学教育全体としての「教育の効果」は、それなりに根拠を示しつつ自己評価できると考える。しかし、教養教育の「教育の効果」と問われると、どこからどこまでが教養教育の成果でどこからどこまでが専門教育の成果であるなどと明確にできないところがある。

誠実に答えようとするほど、苦慮せざるをえない問いである。

・本学のように、単科大学で、かつ初等教育教員養成を目的とした大学の教養教育と総合大学における教養教育のあり方は、歴史的にも現時的にも相違がある。たとえば、本学の取り組んできた教養教育は、教養教育全体からみれば特殊な位置付けがなされると考えられる。教養教育の定義や概念とも関わってくるだろうが、一律に教養教育を一括りにするのではなく、個別の大学教育全体の中での捉え方を自由にさせてもらえれば、型にはまらない豊かな評価ができるのではないかと考える。

・評価結果の記述法については、評価項目についてのみ実施要項に示されているが、要素毎の評価と観点毎の評価については、明確な形では示されていない。要素毎については実施要項に説明があり、それほど問題はなかったが、観点毎の評価は「優れている」「普通である」「問題がある」という三段階を示すのみで、文例が示されていない。結局「……は普通である。」という、きわめて奇異な文章にせざるを得なかった。

2 変更点等への御意見

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

有意義だった点

・自己評価を実施することにより、これまで気づけなかった新たな課題を発見することができ、結果として大学改革に資することができた。

問題点・課題点

・現行のシステムでは、大学への自己評価実施要項等の通知・説明会は1～2月にあり、それを受けて大学としての作業を開始することとなるが、年度末又は年度初めの時期に、評価書作成の作業量が膨大であるため、その業務に忙殺され、本務の支障にもなりかねない状況である。については、評価書作成の立場を考慮されたスケジュールを再考していただきたい。

・大学は規模・歴史・性格の面で様々な個性を持っており、今回の「研究連携」においても総合大学や理工系の専門分野を有する大学とは自ずと自己評価も質量ともに異なってくる。例えば、前回の「教育サービス」と合わせて「社会貢献」のようなより大きいテーマにすれば、もっとまとめやすかった。

・「社会と連携及び協力するための取組」と「研究成果の活用に関する取組」に分類して評価することが求められたが、大学の行う一つ一つの「研究連携」活動は、この両側面を併せ持ちながら展開されるものであり、敢えて二つに分けてまとめる必要があるのか疑問がある。分類のための分類ではなく、自己評価をしやすい整理が必要である。

・設定された三つの評価項目はそれぞれ重複せざるをえなくなり、記述に苦労した。1の

「研究活動面における社会との連携及び協力の取組」は、取組が目的及び目標の達成にどの程度貢献しているかを評価することになっているが、「どの程度貢献しているか」を確認するためには、2の評価項目とされている「取組の実績と効果」を前提にする必要がある。同じことは、「改善のための取組が目的及び目標の達成にどの程度貢献しているか」という判断を求められている、3の「改善のための取組」についてもいえる。つまり、この三つの項目は、別々に記述することは不可能なのである。そのため、

同じことを繰り返し記述することになり、まとまりのない自己評価書にならざるをえなかった。今後、評価項目を設定する際は、記述する立場に立って熟慮していただきたい。

・評価結果の記述法については、評価項目についてのみ実施要項に示されているが、取組の分類毎の評価と観点毎の評価については、明確な形では示されていない。取組の分類毎については実施要項に説明があり、それほど問題はなかったが、観点毎の評価は「優れている」「普通である」「問題がある」という三段階を示すのみで、文例が示されていない。結局「……は普通である。」という、きわめて奇異な文章にせざるを得なかった。

2 変更点等への御意見

神戸大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

今回が最初であるということもあって、自己評価の完成には大変な時間と労力を要した。まとまった自己評価は、本学の教養教育を改革していく上で、重要な基本的資料となることはまちがいない。

しかし、自己評価を受けて大学評価・学位授与機構が示す評価がどのように活用されるかについては具体的に示されていない。このことは、自己評価をまとめることをより難しくしているし、その任に当たった者に大きな不安を与えている。

2 変更点等への御意見

目的及び目標の設定に関する説明が充実されたことによって「実状調査」の段階より随分この項目は書き易くなった。また、評価項目に「要素」が設定されたことによって、評価の視点が明確になり、自己評価がより容易となった。一方、それに対応して示された観点例については、あくまで例として示されているとはいえ、「3教育方法」などのように具体的過ぎるために、「実状調査」になっているような項目は、今後、改革への取り組みについて評価する方向に改善すべきではないか。

奈良女子大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 機構の実施要項に示された項目例や観点例に引きずられた感がある。本学として主体的に観点を設定できなかったという反省もあるが、特に、観点例については、実際には取り上げにくいものも多くあり、それらを取り上げないことに不安を感じるがあった。
2. 大学院への重点化を進める中で、評価対象期間中に学部から大学院へ所属の異動があった教員の業績や活動等について、学部と大学院のどちらでの取組と考えるのか区別できないものがあった。特に、このようなテーマでの評価を学部、研究科という単位で実施することが適切であったのかは判然としない。
3. 教員個々の活動には、様々な側面があり、それをテーマの観点に即して捉えようとする際の基準を明確に設定することができなかった。

2 変更点等への御意見

1. 特記事項は、大学の個性や特色を評価の観点とは異なった視点で、独自に記述することができるという点で意義があった。
2. 根拠となるデータ等の提出方法については、評価書全体を通して見る場合には、該当箇所に貼り付ける方式が望ましいが、自己評価書を作成する上では、既存の資料等を利用しにくい場合もあり、改めてまとめ直すために、相当の労力と時間を要した。また、結果として、十分なデータの提示ができなかったという反省もある。

和歌山大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

- (1)全学共通テーマとして、評価項目、要素、観点の階層性に分けた整理は、自己評価をまとめるに際し目標ができ、役立った。ただ全学テーマだからといって、詳細にわたる観点の例示は、各大学の独自性を損なうおそれがある。
- (2)これを補う上で、特に優れた点や特記事項の設定は、大学の規模や地理的背景などを説明するのに役立った。
- (3)設定された項目の中で、例えば「授業科目と教育課程の一貫性」などは、どのように整理し、説明すればよいのか、戸惑う内容も含まれていた。

2 変更点等への御意見

- (1)機構による大学評価に限らず、外部評価は繰り返し実施し、改善することが重要である。本学においても、教養教育内容の見直しや充実に直接的に役立っているし、教職員の意識改革にもつながっている。
- (2)根拠データの電子化は、資料の整理や自己評価書作成に際しても、効率的に作業が進む。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- (1) 評価項目、要素、観点の階層性に分けた整理は、自己評価をまとめるに際し目標ができ、効率的に作業が進む。
- (2)ただあまりに詳細な観点の例示は、柔軟性に欠け、大学独自の取組や自己評価が難しくなる側面を併せ持つ。
- (3) これを補う上で、特に優れた点や特記事項の設定は、大学の規模や地理的背景などを説明するのに役立った。

2 変更点等への御意見

- (1)機構による大学評価に限らず、外部評価は繰り返し実施し、改善することが重要である。実際の取組を整理し、まとめるだけでも今後に展開する活動計画に役立つ。何より、地域に立地する大学として、どのような教育研究サービスを提供するのか、不断に考える機会が提供され、教職員の意識改革につながる。
- (2)根拠データの電子化は、資料の整理や自己評価書作成に際しても、効率的に作業が進む。

島根大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1) 全体に関わる問題点

評価方法に関して、さらに具体的な工夫が必要である。教養教育には、技術・技能の向上を含む授業が開設されているが、一方では、必ずしも客観的な尺度によっては教育効果を判定しがたい授業科目も数多く開設されており、多彩な授業科目の開設がまさしく「教養」の教育たる所であることからすれば、たとえ理念・目的を明確に設定したとしても、教育の効果が在学中に顕在化するとは限らず、その評価を行うことは極めて困難である。今後は、この点に関する配慮が必要である。

最終的な評価結果を社会に公表する方法について十分な工夫が必要である。評価結

果があたかも共通の基準に基づいた客観的なものであるかのような取扱いが一部で行われている。大学独自の理念・目的に即した個別的な評価結果であることを強く打ち出し、大学の序列化につながらない形で公表されねばならない。

2) 個別の問題点

評価項目「3 教育方法」のうち、【要素3】『成績評価法に関する取組状況』の「成績評価の一貫性」については、多様な教養教育を評価する項目として適切であるのか否か疑問である。用語自体の問題として、「一貫性」が具体的に何を意味するのかが明確でない。

評価項目「4 教育の効果」については、全体として問題が多い。そもそも、教養教育について明確な効果を当然の如く設定すること自体に問題があるとも言える。それゆえ、自己評価はおのずから表面的・形式的な教育効果にその尺度を求めざるを得ず、それが教養教育の使命とする教育理念・目的を正しく反映しているかについては大きな疑問を抱かざるをえない。

2 変更点等への御意見

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1 設定された「評価項目」及び「取組の分類」毎のすみわけが不明瞭であった。

例えば、評価項目1の「取組の分類1：社会との連携及び協力するための取組」について自己評価する場合、大学の目的・目標や評価の観点に基づき自己評価しようとするれば、当然実績や効果について触れた上で行うこととなり、評価項目2との記述の重複が避けられない。

また、特に「改善のための取組」に関しては、一つの取組が「取組の分類1」と「取組の分類2」の両方に関する部分が多く、分けて記述しにくかった。

このように、何をどの「評価項目」で、あるいはどの「取組の分類」で記述して自己評価すべきかが分かりにくく、主目的である各大学の取組に対する自己評価書を作成する以前の段階で大きな労力を費やした。

2 評価作業を行う際に参考資料「評価の観点例及び根拠となるデータ等例」は非常に参考になった。

3 根拠となるデータの示し方で出典を明示するだけでよいのか、あるいは資料としての程度提出すべきなのかが明確でなかった。根拠資料については評価書への添付は精選し頁制限を設けて、出典だけを明示してヒアリングの際に活用する方法が望ましい。

4 「教育サービス」「研究連携」という全学テーマ別評価の作業を行った成果として、地域貢献に対する大学全体の活動状況をデータとして把握することができ、運営諮問会議等での資料として活用できた。

2 変更点等への御意見

1 各大学の目的・目標に基づいた自由な観点設定で自己評価を行うことは意味があり評価できる。その際、観点例・根拠データの例が示してあったことは検討する上で役立った。

2 自己評価書本文中に記載する根拠データ等について、データの絞込み、記載方法等について、苦労した。

島根医科大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

（教養）教育という性格上、目的及び目標に対する達成度又は貢献度を示す基準や尺度が必ずしも明確ではないことから、今回の自己評価結果を客観的に示すデータが乏しいものもあった。しかし、これらの事項に対する評価は、学生、学外者、本学専門科目担当教官等の感想・意見などを踏まえ、総合的に判断して行った。

2 変更点等への御意見

評価される側が最も心配することは、各大学に対する評価が公平なものかどうかである。活動の内容、効果などがほぼ同じであっても、自己評価書における記述の仕方によって異なった評価が行われることは十分あり得ることである。その意味で、「要素」を設定することにより、全大学に同一視点での評価を求められたことは大変良かった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

「評価の観点」の設定、特に、取組の分類1と取組の分類2の中での使い分け（設定）が難しかった。

また、評価結果を客観的に裏付ける資料が十分でないものもあったが、これらの評価については、本学教官や連携・協力の相手方の意見や感想などを踏まえて総合的に判断して行った。

2 変更点等への御意見

目的及び目標の設定について、具体的な視点や留意事項等が示されたことにより、大いに役に立った。

岡山大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

(1) 「社会との連携及び協力するための取組」と「研究成果の活用に関する取組」とは、書く場合に、どうしても相互にオーバーラップしてしまう部分が沢山あり、それらの内容をどちらの範疇で記述するかに関して、仕分けの視点が明確でないため、苦労した。これらの内容は、相互に関連しているので、一本化した形で記述できるように改善して欲しい。

(2) 自己評価実施要項をもっと分かりやすいものにして欲しい。何度も読み返さないと理解出来ない。特に同様な記述の重複は避けていただきたい。

(3) 実施要項の通知から自己評価書の提出の間が、大学の繁忙期にあたり、データの整理、文書の作成及び見直しの時間の確保に苦慮した。提出時期等を再考して欲しい。

(4) そのまま公表の部分については、より具体的で明確な記述の指示をしていただきたい。

(5) 社会から見て分かりやすい評価を考えるならば、自己評価を単純化し、各大学が公開している資料等により、機構が独自に評価することも考えられる。

(6) 本学では、この評価を通じて、全学的なシステムを見直すなど、社会との連携に対する考え方の整理と具体的な改善策を導き出すことが出来、今後、一層社会との連携を深めるため有意義であった。

2 変更点等への御意見

(1) 説明の記述において、膨大な分量のデータを単に並列的に掲載するのではなく、要約したデータを本文中に掲載し、その元となる根拠データに関しては別途準備しておくシステムが良いと思う。要約データを図や表の形にして本文中に入れ込むしか方法がないため、各校における創意工夫が見られるものと思う。そうした工夫の面からも、評価書作成における各校の熱意や、努力、実力の程が明確になってくるものと思う。

ただ、文書の容量が膨大となり、見直し・修正作業に苦慮した。根拠とする資料によっては、別添とすることも検討していただきたい。

(2) 評価項目水準の記述では、4種類から5種類になり、曖昧模糊とした部分が増幅され、国民及び社会から見て分かり難いものになる。

(3) その他の部分については、機構の改善への努力に敬意を表するものである。

広島大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

(問題や課題点)

- ・項目ごとの字数制限について再考をお願いしたい。評価項目によっては、観点の数が必要となり、それに伴って書くべき字数も異なってくる。例えば、「教育方法」では他の評価項目より観点が多くなるのは必定である。このことを考慮していただき、評価項目毎の字数制限ではなく、全体としての字数制限を設けてほしい。
- ・教養教育の効果について、評価を行うことは非常に困難である。履修状況などの数値的データと教育の効果は直ちに繋がるものではない。また、教養教育の改革に取り組んでいる現状では、卒業生にアンケート調査を行っても、社会に出てまもない卒業生であり、彼らが教育の効果をも十分に評価できるか否か疑問が残る。教養教育の効果がどのような指標で測定できるか、是非具体的な例を示してほしい。

2 変更点等への御意見

意見なし

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

(問題や課題点)

- ・各評価項目について【分類1】社会と連携及び協力するための取組、【分類2】研究成果の活用に関する取組とに分けて自己評価をすることになっていたが、結果的にはかえって困難な場合があった。
- ・自己評価書を作成するに当たり根拠資料を示すため全学的に調査を実施、分析するなど多大な労力と時間を費やすことになり、担当者の教育研究へのしわ寄せが極めて大きかった。

(有意義だと思った点)

- ・「社会」をどう捉えるかについて大学で考え直す契機になったのは有意義であった。

2 変更点等への御意見

- ・『分類』を設定するなど自己評価書を作成しやすい工夫がなされていたが、かえってスムーズな自己評価の流れを妨げる方向に作用した感じがある。
- ・「総合的評価」を廃止して、かわりに「特記事項」を設けたのは言葉からくる誤解を防げるという点で良かったと思う。
- ・自己評価書の様式が機構のホームページからダウンロードすることができるようになり自己評価の利便性が図られた点は良かったと思う。

山口大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価書を作成したことにより、今迄の自己改革を再点検する機会になり、今後の課題も再確認できたので有益であった。

自己評価報告書の作成には莫大な労力を必要としますので、「記載方法」に関する標準化・簡便化・マニュアル化等の一層の工夫をしていただきたい。

例えば、べた書き形式を表形式にする等の工夫が考えられる。

2 変更点等への御意見

評価項目に「要素」を新規導入したことにより、論点をより明確に記述することができる様になり、この改良は評価できる。

「特記事項」の導入により、個々の論点からは記述出来ない総体的視点からの記述をすることができる様になり、この改良は評価できる。

自己評価書様式の添付は今後も必要であるが、更に標準化・簡便化・マニュアル化等の一層の工夫をしていただきたい。

例えば、様式として、表形式等の工夫が考えられる。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

平成12年度着手の全学テーマ別評価の自己評価実施要項より、理解しやすいように改良されたと思う。しかし、カタカナ表記の語（インプットの、アウトプットの、アウトカムの、プロセス的等）は、正確な理解のために、今後はできるだけ避けるか、最初に使用する時に詳細な説明文を加えていただきたい。

多様な観点からの評価に重点を置くあまり、記載内容が多岐になり、自己評価書作成のための作業に膨大な時間と労力を費やした。教官の教育研究の時間を確保するためには、全学テーマ別評価の評価項目を1年に1種類程度に絞り、複数年に渡って複数の評価項目の評価を実施するようにすべきである。なお、平成15年度から実施予定の本格的な評価の実施内容について、早急に公表していただきたい。

2 変更点等への御意見

研究連携の3種の評価項目が段階的内容（しくみ、結果、改善）に設定されているにもかかわらず、各評価項目に同じ2種の「分類」の評価を課すことの意味について、自己評価実施要項の説明は不十分であった。各評価項目に適した「分類」

を設定するか、または、「分類」を削除して各評価項目ごとの観点の評価を纏めることの方が、自己評価書を書きやすくしたと思う。

評価対象となる活動の例示が自己評価実施要項に示されたことは自己評価書作成に役立ったが、本来は、このような例示がなくても記載すべき内容を特定できるような分かりやすい自己評価実施要項にすべきである。

自己評価書の書式の IV の 1 行の文字数を、自己評価実施要項の別紙 1（自己評価書様式）に明記してほしい。機構のホームページからダウンロードした書式の 1 行の文字数が、Windows と Mac で異なり、編集に支障を来した。

徳島大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1. 字数制限の設定は必要なことと理解できるが、各評価項目を 3,000 ~ 6,000 字で記述するには多少無理がある。主要な骨子しか記述できないために、評価委員に記述者側の意図が十分に伝わるかどうか、疑問を感じた。
2. 根拠資料は全て本文中に、最小限にして、とのことであるが当該のごく一部のみのデータでは、評価委員が的確な評価ができないのではないか。
3. 有意義な点としては、過去の改善等を行った経緯、その結果を再確認でき、どの程度改善できているかどうか一層の把握ができた。

2 変更点等への御意見

1. 目的・目標の設定については、その定義等が一般的な用法と異なり、依然として説明が明確でない。
2. 観点、要素、項目の水準の表記について、複数の観点の水準が異なる場合、要素や項目の水準を評価、表現する際の重み付けの判断が明確でない。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

難しいかもしれませんが、「目的および目標に関する事前調査結果」で示されているような説明（目的および目標の設定、記述に関して）を「自己評価実施要項」で最初から示していただければ有り難い。

2 変更点等への御意見

- 1) 「評価の視点」について、各分類ごとに評価の観点を設置することで評価のポイントが明確になり、機構が行ったこの改善は評価できる。さらにこれを一歩進めて、重要と思われる観点をいくつか機構側が指定すれば、その点については全大学に共通した評価判断が得られるのではないかと思う。
- 2) 「評価項目ごとの水準の判断」および「取組の分類ごとの水準の判断」に関しては、記述方式のかわりに5段階を明記してその中から選択する方式（AやEを選択する方式）にすれば、機構側としても簡便で全大学に共通した評価判断が得られるのではないかと思う。

香川大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- ・自己評価書の作成には膨大な時間と労力を要するので、自己評価書様式の一層のフォーマット化、マニュアルの簡素化等を行って欲しい。

2 変更点等への御意見

- ・「特記事項」を設けたことにより、対象期間の5年間では評価できない今後の改革課題、将来構想等の展望を記述することができて良かった。
- ・根拠となるデータ等の提出については、昨年と比べ本文中に記載することなどでの改善、工夫が図られたことは、作成者側にとっては省力化につながった。

愛媛大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

- 1 「貢献度の水準」，「実績や効果の程度」，「実績や効果の水準」は所定の語句を用いて自己評価することになっていたが，そこに含まれている「十分に」，「おおむね」，「かなり」，「ある程度」なる語の意味が漠然としており，判断に苦慮した。それぞれについてもう少し具体的な説明が欲しかった。
- 2 「教養教育に関する目的及び目標」の記述スペース（字数）が足りず，一部，昨年の実状調査報告書に委ね，また「評価項目」の箇所に記載せざるをえなかった。
- 3 自己評価の対象期間は「原則5年間」とされ，この度の自己評価を機に過去5年間の教養教育（本学においては共通教育）を所定の枠組みで振り返って見たが，改めてそれに対してより体系的に取り組むことの必要性を痛感した。

2 変更点等への御意見

- 1 「目的及び目標の設定に関する説明」は確かに「充実」したが，そこでの「目的及び目標の性格の視点」の記述内容は，平成13年1月の「実状調査票」の説明内容には示唆されていないものが含まれており（「インプットのもの」，「プロセス的なもの」），実状調査報告書の作成と自己評価書の作成を一連のものとして取り組んだ者としては当惑した。そもそも，「インプットのもの」，「プロセス的なもの」も含めて「教育の目的及び目標」と呼んでいいかどうか，躊躇を覚える。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- 1 共同研究や受託研究など数字で顕れる取組については比較的まとめやすいが，取組の主体でまとめるか取組の内容ごとによつてまとめ方が大きく異なる。学部やセンターで独自に行っている数多くの取組の評価を如何にコンパクトにまとめるか苦労した。
- 2 各大学から様々なまとめ方で自己評価書が提出されたと思われる。今後このような調査が続くなら，ある程度フォーマットを決めたほうが良いのではないか。特に，平成12年度の「教育サービス面における社会貢献」の自己評価書と様式が異なることは，まとめる側として戸惑いを感じた。
- 3 添付資料を省略し，根拠資料を貼り付けるという試みは今後も続けて欲しい。
- 4 本学で行なわれてきた諸取組を今一度全学的に総括する上で貴重であった。

2 変更点等への御意見

- 1 分類に従って分けにくい取組が多々ある。また、教育的側面と研究的側面を明確に区別することも無理な取組もある。大学として教育と研究は切り離すことは難しく、相手側もそれを区別して考えない。共同研究や受託研究のように明らかに研究主体の取組は別として、「教育・研究面における社会との連携」のように一括した評価点検はできないものか。
- 2 特記事項を設けたことは良いことだと思う。自由記述になっているので問題がないと思うが、特記事項に記述する事柄として機構が例として示した事項の他に、「大学として特にアピールしたい取組」のような項目を入れても良いのではないか。（この部分はそのまま印刷・公表されることを考慮に入れて）

高知大学

< 共通 >

1 自己評価に関する課題等

- (1) 字数制限が機械的である。全体の文字数のみ定め、項目ごとの文字数は各機関の裁量に任せてはどうか。
- (2) 根拠の裏付けデータ又は文中のデータいずれにするか、説明文では判然とせず、大いに悩むところとなった。

2 変更点等への御意見

特になし

高知医科大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

教養は極めて広く深い意味を持ち、しかも、文化、時代、民族によって違い得るものですから、その評価は大変難しいものと思います。

本学自己評価のためのアンケート調査では、1.辞書における教養の定義、2.大学設置基準における教養教育の考え方、3.高知医大における教養教育の考え方...を示した上で答えて頂きましたが、小数ながら「答えようがない」、「問がナンセンス」という意見もありました。教養の考え方に幅がある事の現われと思います。機構にはなるべく理由が判り易い評価を期待します。

2 変更点等への御意見

『要素』の設定は自己評価作業を進める上で整理しやすく有用でした。

しかし、要素、観点例は、旧教養課程、現教育学部の色合が濃く、幅広い教養教育の視点を表現し難いものでした。例えば、学生は課外活動、同好会、ボランティア、施設見学、短期留学、実際の職場（本学では病院）などで得られた（気づいた）事を大切にしている様ですし、これらは生涯の自己成長に欠かせない教養教育の大きな要素と考えます。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- 1) 分かりにくかった点
 - a 評価の観点例として出されていた「取組や活動の計画・内容」をどの程度まで記述するのか、不明であった。
 - b 評価の観点例として出されていた「取組や活動の地域性、国際性、公共性」のうち「公共性」がどの程度、範囲なのか判断しにくかった。
 - c 評価の観点例として出されていた「連携（協力）先に対する配慮」も本学にリエゾンオフィスのようなものがないので分かりにくかった。
 - d 評価の観点例として出されていた「連携先が得た実績や効果」「連携先が得た満足度」「研究成果の活用相手が得た満足度」「投入された資源に対する有効性」は何をどのように判定するのか、分かりにくかった。
 - e 取組の分類1と取組の分類2で同じ観点で記述しなければならない項目があり（例えば目的及び目標の趣旨の大学内外（機関内、機関外）への周知、公表）、その処置をどうするべきなのか、分かりにくかった。
 - f 観点ごとの評価は3段階であるが単純に割り切れない観点が数多くあり、どの段階にすべきか迷うことが多かった。
 - g その他全般的に使用されている用語がexplicitでないのが気になった。例としては、目的と目標、実績と効果、連携と協力など意味が重なる用語が頻繁に用いられていること、また評価項目「研究活動面における社会との連携及び協力の取組」と「取組の実績と効果」では同じく取組という用語が使われており、内容的に重複してわかりづらいこと、インプットの・プロセス的などの英語表現があって曖昧な解釈を迫られたこと、評価項目ごとの水準で、「おおむね」と「かなり」ではかなりの方が高水準にあるとも解釈されること、などが挙げられる。マニュアルづくりがもっと工夫されるべきかと思われる。
- 2) 問題点や課題
 - a 総合大学と単科大学と同じ字数制限で記述させると記述内容の濃淡の差がありすぎると想定される。
 - b 資料の挿入は数量に規定がないので、記述する側で重要と判断されるものはみな入ってしまい、本文の字数制限はあっても、総字数は大学によって相当な開きが出てしまうと想定される。
 - c 先に提出された目的・目標の設定に対して、個々の大学への機構側からのフィードバックがあれば、自己評価書作成に大いに役立つと思われる。フィードバックが全般すぎて今一つ有効でないように感じる。
- 3) 有意義だと思われる点
 - a 目的目標を明文化できたこと。
 - b 本学の「研究連携」の内容を包括的に把握でき、今後の改善に役立てられること。

2 変更点等への御意見

福岡教育大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

特になし。

2 変更点等への御意見

特になし。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

有意義な点

- (1) 大学での研究活動を項目別に整理することができ、どこに問題点があるかを明確にすることができた。
- (2) 研究連携、研究成果の公開・活用がどの程度（内容、範囲、方法等）行われているかがわかった。

問題点

- (1) 教員自身がこのような観点からの評価に慣れていないために、調査内容を理解してもらうのに大変だった。（再調査せざるを得なかった。）
- (2) 大学での研究活動を項目別に整理したが、教育大学における研究活動の多様性のために、具体的な研究活動の例が示しにくかった。
- (3) 件数で数量化したがる、件数には人数で数える場合と項目で数える場合があり、1件の価値が違うのではないかという印象を受けた。（研究活動が「研究連携」と「研究成果の活用」に跨っているときに、一方では人数で他方では項目で数えざるを得ない。）

2 変更点等への御意見

特になし

九州大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価実施要項は、目的及び目標は評価を行う上で基準となるものであることから、明確かつ具体的に示すことが求められており、また、目的及び目標を整理するに当たっての視点として4つがあげられている。

さらに、目的及び目標は2000字以内に記述することが求められている。最初に、この2000字という字数制限を考慮せずに、しかも、4つの視点と評価項目や評価の要素を考慮して、明確かつ具体的に記述するように努めたところ、6000字を越えるものになった。それを実施要項が求めていることを考慮したうえで、2000字以内に縮小することは容易ではなかった。

目的と目標の対応、インプット、プロセス、アウトカム目標の整理、社会的な要請や内的条件など多くの側面を配慮し、評価の基準となりうる明確かつ具体的な目的及び目標を記述するには2000字という字数制限には無理があるといえる。

2 変更点等への御意見

特になし

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

(1) 自己評価実施要項において、一貫して説明していただきたい評価書の作成要領 や留意点が、各章に分散されているためその内容の理解が容易でなかった。わかりやすい構成と平明な文章による説明等を望む。

(2) 評価の対象となる活動を設定された評価項目及び取組の分類等に基づき、評価を行うこととされているため、結果的に一連の研究連携の取組みを評価項目等に 応じ、分けて評価するものもあり、活動全体を捉えた包括的評価を行うことが難 しかった。これらの項目等の設定については、各大学の判断に委ねてはいかがか。

2 変更点等への御意見

特になし

九州芸術工科大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

・自己評価する趣旨と流れが明確に示され、また自己評価を円滑に行いやすいように構造設計されているため各事項の検討や取りまとめがやりやすかった。

2 変更点等への御意見

- ・「要素」を設定することによって、自己評価する大学側は記入しやすくなり、またこれを評価する機構側とのヒアリングにおける確認もやりやすくなったと思われる。
- ・評価は原則的に現状に対して行うものであって、将来への計画や構想に対して行うものではないとされているが、大学としては現状認識に対して将来へどのような考えと姿勢で臨むかは極めて重要であり、だからこそ機構側に知ってもらいたいポイントでもある。その点で、「特記事項」を新設して大学側の考えを確認しようとしたことは評価できる。
- ・「水準を分かりやすく示す記述」について改善されたことも、大学と機構の双方がヒアリングにおいて確認するときに便利であろう。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- ・評価結果を総合的に判断する水準を5段階にし、「真中(普通)」とみなす段階を設けたことで、評価がしやすくなった。

2 変更点等への御意見

- ・「特記事項」を設け、社会との連携・協力のための将来構想等、大学の姿勢を社会に示すことができるようにしたことは評価できる。

佐賀大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1) 目的・目標について

各大学が設定する「目的・目標」に則して評価を行うとされているが、「全国どこでも高等教育を受けられるようにする。」という目的があって設置されたのが「新制大学」であってみれば、その設置目的は、普遍的・一般的にならざるを得ない面が残っている。そのため、根拠資料で裏付けられる主体的・積極的な「個性・特色」を記すのは、少なくとも現段階では、かなり難しい。

目標と目的の対応関係を、根拠資料に基づいて明示するのも容易でない。実際の教育場面では、各教員が、各々の教育目標を達成するための授業を展開している。しかし、根拠資料の提示が難しいものは評価対象から割愛せざるを得ない。

「学部としての目的・目標があれば記す。」とあるが、制限字数(1000以内)に収めるのは無理ではないか。

2) 出典(根拠資料)について

根拠資料の範囲が必ずしも明確でない。今回は、印刷・製本されたものに限定したが、根拠資料の範囲をもっと広くとらえても良いのか。

3) 「貢献の程度」と「水準」について

両者とも、客観的基準はなく、主観的評価が入り込む余地は大きい。今回の自己評価は、根拠資料の「質と量」に基づいて行ったため、「出典」を明示できない場合は評価対象から外れた。

また、各大学の人的・物的な条件は異なるから、各条件下での達成度を相対的に評価することについても考慮が必要ではないか。いずれにしても、評価基準をより明確にすることを要望する。

4) 根拠となるデータ等について

根拠データを本文中に入れ込む方式は、読みやすさから言って、良い。しかし、データの提示方法が曖昧の感は拭えない。今回の結果を踏まえて、より明確な提示方法について検討願いたい。

5) その他

評価書執筆の際に電話で機構に問い合わせたところ、間違った回答があった。正確な対応に努めていただきたい。

大学評価書作成に関する説明会についても、より分かりやすくするように、改善を願いたい。

2 変更点等への御意見

1) 要素について

評価項目ごとに「要素」を設定したことは、高等教育機関としての大学の具備要件を明確にする上で有益であり、評価書を書く際の参考になった。

「観点例」は、「例」とはいいながら、要素との関係で記述を求められる事項と判断された。そのため、文意曖昧な観点例を除いて、「例」に準拠する記述とした。

「要素」も「観点例」も、場合によっては大学の個性化と逆行する危惧を孕むので、全国の大学の「個性」と「統一基準（品質保証）」との関係をどのように捉えるかについて検討願いたい。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1) わかりにくかった点

本学では、社会との連携・協力は開学以来、自明のこととし、大部分は教員の自主的活動にまかせてきたのであり、そのための目的・目標はつい最近、打ち出したのが実態で、全学に浸透したものは、必ずしも言えない。そうした実状にありながら、過去5カ年の自己点検を行うことは、かなり困難であったし、そうした枠をはめることに対して教員の反発も生じた。取組と実績の評価を分けて記述することは、かなり困難であり、重複した記述を入れざるを得なかった。また、観点の立て方にも、かなりの苦勞を要し、ここでも、重複した記載をせざるを得ない事項がかなりあった。特に改善のための取組では、複数の観点を立てることに困惑せざるを得なかった。観点例の提示は良かったと思うが、大学独自の社会との連携・協力のやり方が薄れ、提示された項目に沿った連携・協力が今後、強められていく懸念を感じる。外部資金の導入が、ともすると社会との連携・協力と捉えかねないことになるのではないかと。

2 変更点等への御意見

昨年度の自己評価では、とらえかたの記述が困難であったが、今年度の研究活動面での社会との連携及び協力では、記述内容が具体的に指示されており、比較的記述しやすくなった。また、要素を設定し、さらに観点ごとの評価が求められることにより、昨年度のものよりも、自己評価がしやすくなったことは認めるが、上記のような、困難さも一方では感じている。特記事項を設けたことは評価できる。根拠となるデータを本文中に入れることになったことは、大きな改善として評価できる。

佐賀医科大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

「とらえ方の整理」の項は「目的及び目標の基本となる考え方」だけで良いのではないかと、「取組や活動の現状」は「目標の設定」や「自己評価」の中で述べることで重複することが多いので、無くてよい。

2 変更点等への御意見

全般に昨年度の要項よりも判りやすくなっていた。
「説明の充実」、「要素の設定」、「特記事項の設定」はいずれも改善点として評価できる。

熊本大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

- ・全学テーマ別評価は、各大学の目的及び目標に基づいてなされるとはいうものの、大学の画一化を招く結果となるだろう。大学は、自己評価に基づいて第三者評価で良い評価を得ようとする。そうである限り、各大学はテーマに合わせた努力を開始し、あるいは継続していくことになり、こうした問題点が常につきまとうことになる。
- ・大学は評価作業のために膨大な時間とエネルギーを使わなければならない、そのため日常的な教育、研究、管理運営に支障が生じている。このようなかたちでの評価は、各大学の疲弊を招く結果となっている。
- ・「原則として過去5年間の状況を対象とする」と自己評価実施要項の冊子に記されているが、本学の場合、毎年少しずつ一般教育の内容が変わっている、厳密に言えば、教育の効果も各入学年度によって少しずつ変動しているということになる。よって、「過去5年間」について、年度や科目を一括して「実績や効果がおおむね挙がっているが、改善の余地がある」などと一言で水準を記述するのは困難である。

2 変更点等への御意見

- ・評価項目及び評価項目ごとの「要素」が設定されたことにより、何を評価するかが規定され、複雑な制約を課されることになり、無用の混乱を招くことになってしまう。その結果、各大学の目的及び目標に基づく評価であるはずが、各大学の目的及び目標を縛る結果となっている。よって、要素を設定したことは評価できず、もう少し自由な記述方式にして欲しい。
- ・「観点」を設定して評価するのは、大学評価機構の評価委員の評価には好都合かもしれないが、自己評価する側にとっては、問題を単純化し、一面化することにしかならないと感じられる。教育研究の関わる問題は、ある現象が正でもあり、負でもあるということがしばしばあるので、要素の設定によって、評価行為が浅薄なものになってしまうということが避けられない。
- ・この評価の方法は、ほとんど評価の数値化にほかならない。さまざまな基準による評価を一律化し、数値

化してその結果を一人歩きさせてしまう原因を作っている。

- ・根拠データを本文中に挿入する方式になったが、これだと大きな図表は本文の該当箇所に挿入することが技術的に不可能だったので、本文の文章だけを先に書き、文章のあとに大型図表をまとめて載せるという形式にせざるを得なくなり、昨年度の資料別添方式とあまり変わりがなくなってしまった。また、データを本文に入れようと意図するとデータを削らなければならない、学部別のデータは載せずに全学のデータのみにする、などということを行わざるを得なかった。また、本文に引用したデータの出典の資料を別添することが許されていないが、出典資料には自己評価書に引用したくてもスペースの関係で割愛せざるを得なかった種々のデータが出ているので、それを参照していただければ、本学の実情をもっとよく理解していただけるのに、と残念な気持ちがあった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 分かりにくかった点等

- ・「研究活動面における社会との連携及び協力」において、求められている「とらえ方」の記述が、評価項目における記述と重複してしまい、非常に書きづらく感じた。「とらえ方」のうち、「目的および目標の基本となる考え方の整理」の部分は良いが、「具体的な取組や活動の現状の整理」の部分は、評価項目の記述の要約にならざるをえない。毎年感じることであるが、この「とらえ方」の記述が一番書きにくく難しい。本当に必要な記述項目であろうか疑問を感じる。
- ・「研究活動面における社会との連携及び協力」において、取組を「社会と連携及び協力するための取組」と「研究成果の活用に関する取組」の2つに区分して記述することを求められているが、この区分があるために記述がかなり困難であり、それぞれの区分(項目)で繰り返し重複説明するする必要があった。このような機械的な区分は非常に解りにくく、評価を難しくしているだけである。大学の特徴を見る上でも、記述すべき項目を指定することに留め、記述には字数制限も含め自由度を持たせた方が良いと思われる。
- ・項目、取組、分類、実績、貢献の程度・・・等、文言の意味の相違を理解(作業員間での共通理解)するのに多くの時間を費やした。また、項目や小見出しの区切りとして、研究活動面における・・・、(1)取組の分類・・・、(取組の分類1)、・・・等、通常は用いない序列だったので、まとめる際に苦労を要した。もう少しわかりやすい序列にして欲しい。

2. 問題や課題

報告書の作成に当たり、データベース整備の必要性を痛感した。教官個人もしくは研究室という単位では膨大な社会貢献への取組がなされているが、これを大学全体で捉えようとするアンケートその他の調査によらねばならず、全体像の把握に非常な困難を伴ったため、今後は活動のデータベースを整備する事が肝要であると思われる。これは、ISOやJABEE等の認証を受けようとする際にも有効であると思われる。

3. 有意義だと思われた点

調査の結果、社会貢献の取組が多くなされている反面、大学全体としての組織的な取組による活動の効率化の余地が多く認められることが判明した。この点は、今後の大学組織の構成に反映されるべき有意義な事項と思われる。

2 変更点等への御意見

根拠となるデータを本文中に記載することも、報告書の作成並びに検討をスムーズにしていると思われる。また、特記事項を設けたことは、大学の実状把握の意味で有意義であると考えられる。

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1. 目的及び目標の性格の視点としてあげられたインプットの、プロセス的、アウトプットのという設定方法と、観点及び要素を組み合わせる作業がかなり困難であった。
2. 教育の効果を評価するための資料・データ等がアンケートなどが中心であるため、客観的な基準という点では心もとない点がある。特に、時間と労力を掛けた卒業生のアンケートなどは記憶がうすれているために、データとなりうるか、という危惧もある。
3. 観点例としてあげられた体系性、一貫性などを、どう受け止めるか委員の間でも共通の理解を得るために苦労した。
4. 根拠データを置く位置などがわかりにくかった。
5. 観点のアルファベット記号を、自己評価書全体、評価項目、要素のどこで切るかが明確でなかった。
6. 自己評価より踏み込んだ形で教養教育を評価したことは意義があった。

2 変更点等への御意見

1. 要素が中間項目として設定されたことは、評価する立場からも改善された点として評価できる。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 研究活動面における社会との連携及び協力に関するとらえ方
2 取組や活動の現状が、この位置にくるのは、構成上問題があると思われる。
の目標のあとに来るべきだと思う。
2. 分類
分類1 社会と連携及び協力するための取組
分類2 研究成果の活用に関する取組
分類1がインプットの、プロセス的、分類2がアウトプットのという観点で分類したものと推察されるが、社会連携の活動をこのような形で分けることには、実際上かなりの無理があるように思われる。
3. その他
(1)根拠データの提示方法
・データ名の記述方法
・同一データ名の複数箇所による参照法
・埋め込み場所
などに関して、もっと具体的な指示をしていただきたい。
(2)観点の名前づけ
観点A, B, … Cの名前付けが、分類ごとにAから始まるのか、あるいは全分類を通してやるのか明確でない。

2 変更点等への御意見

特になし

大分医科大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

「取組の分類」「観点」ごとの評価にしたことは整理する上で有益であったと思うが、このようにすると文中に同じ「主語」を何度も使用する必要があり、全体としては何度も同じ事を繰り返している感があった。

少し細かく言うと、「(1)研究活動面における社会との連携及び協力の取組」と「[取組の分類1]社会と連携及び協力するための取組」が両方共重複する言葉がありわかりにくい。「(1)研究活動面における社会との連携及び協力の取組」の方を例えれば「取組の体制、計画」とすればわかりやすかった。

目標ごとに(1),(2),(3)の取組を通して書く方が、文章の重複がなく、はるかに書きやすいし、読みやすい。最後にまとめる形で「取組の実績と効果の水準」「特に優れた点及び改善点等」を書くようにしてはどうか。

6月の事前調査結果は、全体的なことばかりでなく、提出した書類についての個別のコメントがほしい。

今回の自己評価に限ったことではないが、「全学テーマ別評価自己評価書」の作成にあたっては、一定のフォーマットに従って簡潔に記述する方法を考えて行かないと、毎年行われる自己評価に大変なエネルギーを使うことになり、教官の本来の業務である教育・研究に差し支えが生じることになる。

2 変更点等への御意見

「特記事項」は、自己評価をする上で定められた観点などに記述できない事項や全体像をまとめて記述する上で有効であると思う。

宮崎大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1 目的及び目標を、どの程度の幅で対応させればよいのか(厳密に考えるべきか、ある程度の幅の中で考えてよいのか)が、例示の視点や留意事項等からだけでは判断しにくかった。その結果、その議論に多くの時間を自己評価書の作成段階で費やした。

2 現在の活動の意図や実績から、目的及び目標を設定することの意図・意義について、疑問が出された。(自己評価書の作成段階で本来、目的及び目標が先にあって、その結果としての成果や実績等を評価するのが、一般的ではないのかという意見があった。)

2 変更点等への御意見

- 1 自己評価書の本文中に、根拠となるデータ等を記載する形式に変更された点は、一方でまとまりのある記述が可能になった。しかし、反面代表的な事例やデータに絞って掲載しなければならないことになり、その選択に悩まされた。もっと弾力的な方法も認められてよいのではないか。（例えば、枚数を制限した上で、別途添付資料を認める等）

宮崎医科大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

今回の「教養教育」の自己評価は、制度や取り組み、方法に関する項目が主で、教育の効果を見る割合が少ない。

教育の効果の評価することが重要だと思われるが、この評価の仕方に関しては、機構や大学側にとっていい方法が見出せていない現状にあると思われる。学生の授業評価や卒業生の判断だけでは不十分であろう。

入学してくる学生の人数、質、動機、勉学面の問題と、教育を担当する教員の人数、質、熱意、取り組み及び教育設備や環境等がどう関係して、教育の効果へ結びついていくかを明らかにしていくことが必要であろうと考える。今後評価法の研究と開発を期待したい。

評価の水準の記述に関して「改善の余地もある」や「改善の必要がある」とした項目があるが、不明瞭と思われる点がある。即ち(i)大学として今後努力することにより「改善の余地がある」ものや今後努力し、「改善の必要がある」ものとしての評価と、(ii)教育設備、施設や環境、人員配置や教育予算等に関しては、大学設置者（としての国又は文部科学省）として、今後「改善の余地がある」又は「改善の必要がある」ものの2つが含まれている。この点を書き分けられるように工夫したらよいと思われる。

2 変更点等への御意見

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

「社会と連携及び協力するための取組」と、「研究成果の活用に関する取組」が、どう違うのか、わかりにくい。

評価項目によっては、観点別評価よりも、総合的な評価の方がやりやすいものもある。特に、「改善のための取組」などは、全体のシステムの中で行われるので、総合的な評価の方がよいのではないかと。

2 変更点等への御意見

現在多くの大学で統合が進行しており、特記事項は非常に重要である。ここは字数制限を撤廃し、資料の添付なども認めた方がよいのではないかと。

鹿児島大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

1. 分かりにくかった点

- (1) 観点、要素、項目の各評価がもつ階層性に対する説明文（実施要項 14 頁）
- (2) 根拠資料・データ例として挙げられた事項について、平成 13 年 11 月手引書(案)(評価項目ごとの評価の観点例及び水準の記述方法等)と平成 14 年 1 月手引書(18 頁以降)との間にある相違をどう理解したらよいか。

2. 問題や課題

- (1) 「幅広く深い教養」、「総合的判断力」、「豊かな人間性」が身に付いたかどうかを判断するための客観的で長期的な基準と方法とは何か、なお検討が必要である。
- (2) 教育評価に関するデータ蓄積と解析の手法及びその一般的妥当性について、広く議論を展開すべきである。

3. 有意義だと思われた点

- (1) 教養教育に関する重要性と評価の必要性を、正面から取り上げた点
- (2) 教養教育の評価に関する基準や方法を確立する必要性に気づかせた点
- (3) 教養教育の評価を実施し、改善を図る必要性について啓発した点

2 変更点等への御意見

1. 「要素」及び「観点例」が設定されたことにより、自己評価のための具体的作業が分かりやすくなった。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- (1) 「事前調査結果」のフィードバックは、工夫例、表現例があり、目的及び目標の設定に役立つが、フィードバックの時期が6月ということで、この時期は目的及び目標の達成状況について具体的な評価作業の最中であり、目的及び目標の見直しにはやや遅い。

2 変更点等への御意見

- (1) 評価項目に「要素」を設定したことで、評価内容がわかりやすくなり、多面的な評価ができる反面、「観点」の設定によっては記述が重複したり、全ての取組をカバーできなかったりで、「観点」の設定如何によって評価が変わるおそれもある。このため、「観点」設定に多大の時間を費やしてしまう。
- (2) 評価に当たり、根拠となるデータを本文中に示しながら記述する方法は、評価者にはわかりやすいが、電子媒体として作り上げるのに困難を伴う。また、画像等を貼り付ける場合もあり、ファイル自体もかなり大きくなってしまふ。
- (3) 「特記事項」の設定は、評価事項の補足説明や今後の改革課題、将来構想等について、任意に特記できるため有意義である。

< 教養教育 > < 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

「観点ごとの評価結果」を記述する際の根拠となるデータ等については、各大学等の判断によりその内容や範囲を定め自己評価書に示すこととされているが、具体的なデータ等の提示内容の範囲や複数の評価項目や観点にわたる場合の示し方などについても、今回の全学テーマ別評価における各大学等の傾向を踏まえつつ、次年度以降の評価に際してはその旨を記述していただきたい。

2 変更点等への御意見

特になし

琉球大学

< 教養教育 >

1 自己評価に関する課題等

全般的に以下の点を除いてわかりにくい点はなかった。

- (1) 評価項目2「教育課程の編成」の要素1の「体系性」と要素2の「一貫性」という語句が曖昧であるとの指摘があった。
- (2) 評価項目3「教育方法」の要素1の「学習指導法」が授業担当者の指導方法を意味するのか、学部・学科等における学生へのアドバイス等の指導を意味するのか明確でなかった。

問題・課題としては次の点が挙げられる。

- (1) 評価項目3「教育方法」の要素3の『成績評価法に関する取組状況』については、過去5年間の全ての成績伝票を分析できたわけではない。今後は、大学として各クラスの担当教官が学期末の成績伝票提出時に成績評価の分布を明示するなどの対策をたてる必要がある。
- (2) 評価項目4「教育の効果」について、「学生の履修状況」、つまり受講学生数が良い教育であるか否かを測る指標であるのか否か疑問であるとの指摘があった。また、内部の問題として、学生による授業評価のデータが一項目しか利用できない状況であったので、それに基づいた評価しかできなかった。なお、この問題は全学的に学生による授業評価を教育評価に活用する方向で改善策が議論されている。

有意義だと思われたのは、この評価を通して本学の教養教育の優れた点と改善を要する点が明らかにされた点であった。

2 変更点等への御意見

評価項目に『要素』を加えたことは、評価の焦点を絞るうえで役に立った。また、「特記事項」を設けたことにより、現状評価に基づいてどのような改善計画が可能であるのか、さらに評価項目の中では言及できなかった本学の教養教育の優れた点を記述することができた。以上の点から、このたびの変更及び改善を高く評価する。

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

わかりにくかった点・問題点・課題点

- ・ 従来、社会との連携・協力を「意図」した活動 = 研究連携活動として意識されて行われてきたものではなかったために、今回の評価観点に合致する活動の把握、活動に関する資料等の収集・選別が難しかった。また、「連携先による評価」を調査したことがほとんどなく、研究連携活動（取組）の実績・効果や水準の判定の記述が難しかった。
- ・ 本学の研究連携活動を多面的に評価するための観点を検討するための時間的余裕が少なく、実施要項の例示をもとに多数の観点を設定した調査票による自己評価を実施した。そのため、調査票各項目間の記述の重複や解釈の相違があり、集計に困難を生じた。
- ・ 研究連携における社会貢献の必要性をあまりに強調した場合、社会との直接的関係が薄い基礎研究の分野に対する過小評価を生み出すことに繋がるのではないかと懸念する。

有意義だと思われた点

- ・ 今般の自己評価を通して、本学の教員の多方面における地域貢献活動の概要を把握するとともに、それらの活動に関する学内における広報活動の必要性を認識することができた。地域貢献を推進する地方の大学として、今後、教員の意識改革を図るうえで有意義な評価であると思われた。

2 変更点等への御意見

評価の対象となる活動を2つに分類した点

- ・ この工夫により、目的及び目標をより明確にすることができ、各々の分類ごとの研究連携活動を意識しつつ自己評価を行う際に役立った。

特記事項を設けた点

- ・ 実施されてからまだ日が浅く、具体的な実績や効果を把握することが困難であったため今回の自己評価の対象とはしなかった重要な取組（全学的な社会貢献活動推進に係る組織体制の整備や推進策等）についても、「特記事項」において記述することが可能となった。

根拠となるデータ等の提出方法

- ・ 自己評価書本文中に記載する形での提示は、データの精選・適正化及び自己評価の分析に基づいた評価の実施という点に関して確かに効果があると思われる。しかしながら、電子媒体としてこれらのデータを自己評価書本文に記載するために、アプリケーションソフトを活用したデータ処理作業が不可欠となり、これに多くの時間を費やさざるを得なかった。今後、この提出方法については、さらに工夫される必要がある。

評価項目の水準を分かりやすく示す記述法の変更

- ・ 評価の水準は5段階評価ではなく、「高い」「相応」「低い」の3段階評価でよいと思われる。

その他

- 平成12年度着手の大学評価「教育サービス面における社会貢献」では、活動（取組）ごとの評価であったが、今回は分類ごとに「評価観点」を設定した自己評価を行った。このため、評価の対象となる各々の活動（取組）を「評価観点」に沿って目的及び目標と照らし合わせつつ自己評価を行うこととなり、個々の活動（取組）を総合的かつ的確に評価するための「評価観点」の特定が非常に難しい作業であった。今回の自己評価は前回に比べより多面的な評価であることは認識できる反面、評価に関する専門家を持たない大学においては、複雑化した手法であるという感は否めず、前回の手法が分かり易いものであったと思われる。

政策研究大学院大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価書の作成に当たって、「 .とらえ方」、「 .目的・目標」及び「 .自己評価結果」の各標題間で、重複する内容を書かざるを得ない場合が多々あり、表現を微妙に書き分けなければならず、その記載に苦慮した。とくに、 中の「1.研究連携の取組」と「2.取組の実績」について、その感を強くした。

「機構」の評価の仕方では、目的・目標の水準をあらかじめ低めに設定するほど達成度は高くなり、結果として自己評価も外部評価も共に高い評定となってしまふ。このため、この評価システムでは客観的な評価が可能かどうかについて疑念を払拭しきれない。

なお、上記と関連して、「機構」の評価は、基本的に業績測定的な方法に依拠しているが、研究教育活動については、むしろプログラム評価的な方法の方が適切ではないかと思われる。

2 変更点等への御意見

今回新たに「特記事項」が設けられたため、自己評価書作成の際に、大学設置から間がなく、学年進行中であるという本学の特殊事情について説明する機会が与えられたことは有益であった。

北陸先端科学技術大学院大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

特に意見なし

2 変更点等への御意見

特に意見なし

奈良先端科学技術大学院大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

特になし

2 変更点等への御意見

評価の対象となる活動について、(1)「社会と連携及び協力するための取組」と(2)「研究成果の活用に関する取組」の2つに分類して自己評価を行ったが、該当する活動には、(1)と(2)の両方の意味を持つものがあり、明確に分けて記述することが困難でした。

総合研究大学院大学

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

わかりにくかった点：

1. 取組の分類1と2に分ける意味が本当にあるのかよくわからなかった。
2. 自己評価する際に減点法的な姿勢をとるのか、それとも様々な取組の優れた点を重点的に評価するかによって「取組分類ごとの評価」および「取組の水準」の判断は大きく異なる。この点についての明確な指針はない。また、これに関係して、「取組分類ごとの評価」が分類1と2で異なる場合、「取組の水準」をどのように判断するかが難しい。

問題や課題：

3つの評価項目の立て方が合理的とは思えない。これに更に「取組の分類」、「観点」を取り入れたため評価書はより複雑な構造とならざるを得ない。目的・目標にかなう取組は、それを実行するための組織や方法、実績、この取組を更によくするための改善策が一体となっているものである。したがって、この全体を見渡してこれが目的・目標にかなっているかどうかを評価すべきであるのに対して、評価書の構造はこれをむしろ分断を強いる方向にある。

有意義だと思った点：

当然であるが、評価の過程において本学の長所・短所がより明確にすることができたという点であろう。

2 変更点等への御意見

目的・目標の設定：

この両者の設定はよく理解できた。

特記事項について：

自己評価に際しては、過去実績のみについての評価を行うこととなっているが、特記事項があることで、過去の実績から、将来計画（目的・目標）を含め一貫して記載することが可能となる為、この点では良かった。

国文学研究史料館

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価に当たっては、研究活動面における社会との連携及び協力の取組、取組の実績と効果及び改善のための取組という区分に従って記述することとなっているが、この場合、その都度目的・目標と取組の内容を記述することとなり、字数の制限もあって苦慮した面があった。記述の工夫として、目的・目標ごとに上記 ~ を連続して記述する方法も検討願いたい。

観点の設定は、評価の基準が明確となって良いことと思われた。しかし、それぞれの取組についてどのような観点を設定すべきか苦慮したところである。

2 変更点等への御意見

特記事項を設けたことは、ある程度自由に記述できる部分であったため良かった点である。

国立極地研究所

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

特になし

2 変更点等への御意見

特になし

宇宙科学研究所

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1) 今回与えられたテーマ(社会との連携及び協力)は、基礎科学を目的とする我々の研究所にとって明示的に意図することではないため、「目的、目標」などを設定するのに無理があります。これはそれぞれの研究機関、大学(学部)で異なった目的を持って研究開発教育を進めているものを、その一部の目的を取り出して共通のテーマで評価しようとするところに根源的な問題があります。

2) 「意図して目標に設定したことのみを自己評価せよ」というガイドラインも不適當で、かつ偽善を強いると思います。その理由は、1)に述べたように、第1のより大きな、そしてより本質的な目的、目標を大学等は持っているわけで、その目標をねらった活動の副産物として(明示的に意図せずに)本テーマに沿った成果を得ることがむしろ多いはずだからです。

3) 目的、目標を過去5年に遡って設定し、しかる後に自己評価をするのは、いかにも不自然です。唯一可能な評価は現在の時点で振り返って、現在の基準で活動を評価することではないでしょうか。勿論、過去の各時点での環境は異なりますから、その評価は割り引いて考えるべきですが、むしろ大切なことは評価そのものよりも、その反省に基づいてこれからどうするかを考えることです。

従って、テーマがその機関にとって必ずしも第1義でない場合には「目的、目標」に代えて、現時点で見た「希望評価項目」の設定を各大学等が行ったほうが自然で、かつ実質的だと思います。

4) 与えられた、フォームが極めて複雑かつ冗長で、同じことを何回も表現を少しずつ変えて書かざるを得ないのは煩雑でした。書く方も、読むほうもこれでは、極めて無駄なエネルギーを費やすこととなります。よりフリーなフォームにして、論旨を明確にできるようにすべきだと思っていました。つまり全体の規格化を意図し過ぎたフォームにしたために、個々の大学等の特徴に沿った表現を規制する結果になっています。

2 変更点等への御意見

上に述べたように、より本質的な問題があり、このような部分的な改善では対応できないと思われまます。

国立遺伝学研究所

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

データの全てが自己統計であったため、自己評価書へのデータの範囲、また出典の記載の記述の有無が明確でなかった。

2 変更点等への御意見

「要素」の表現方法を理解しやすい記述を望む。

高エネルギー加速器研究機構

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

- (1) 「研究活動面における社会との連携及び協力の取組」に関する自己評価の仕方が判りにくい。全ての取組や活動が、「研究活動面における社会との連携及び協力に関する考え方」で述べられている考え方に基いて行われている事を考えれば、あえて取組に対する自己評価をする必要はないと思われる。むしろ「取組の実績と効果」の自己評価に「取組の評価の観点例」で挙げられている項目を加えて行う方が、わかりやすいように思われる。
- (2) 平成13年度着手の大学評価に関する説明会で、「海外の大学との連携及び協力は、評価の対象としない」との回答があった。「国公立大学や大学共同利用機関の間で行われている活動は、今回の対象とはしません」(実施要項)という事は、評価の対象となっている機関間の活動として除外するという事が理解できるが、海外の大学は上記の規定には含まれておらず、国際機関等と同じように「社会一般」の範疇に含まれるものである。当然、対象として含めるべきであると考え。来年の全学テーマとも関係する事なので、是非検討していただきたい。
- (3) 現在のスケジュールでは、実施要項の通知及び説明会が1月以降に行われ、自己評価の作業が年度をまたがって行われる事になる。実際の自己評価作業が、人事異動の時期を含まずに行うことが出来るように、夏前に説明会が開催されるようなスケジュールにする必要があるのではないか。

2 変更点等への御意見

「目的及び目標の設定に当たっての視点」及び「目的及び目標の設定に当たっての留意事項」が示された事から、目的及び目標の設定の仕方がわかりやすくなったが、視点の(3)「目的及び目標の性格の視点」は、目的及び目標を考える上でどの様に考慮すべきかという事がわかりにくい。

国立情報学研究所

特に意見はありません

国立民族学博物館

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. わかりにくかった点

実施要項には、自己評価書様式と例示が掲載されていたが、具体的な内容を盛り込んだ記載例を示していただくと、記述上の理解をより深めることができる。特に「 . 評価項目毎の自己評価結果」の項中、観点毎の評価結果についての記載例を示してほしかった。

「 . 評価項目毎の自己評価結果」の作成段階で、取組の分類毎、観点毎のそれぞれに自己評価が求められ、それをいかに区別して自己評価書へ記述していくかというプロセスがわかりずらかった。

2. 問題や課題

今回のテーマは、主として理工系を想定したものであり、特に研究成果の活用面では、文系の機関として書きづらい面があった。

研究連携の捉え方、目的・目標とレベルの違いはあるにしても、何度も繰り返して記述せざるを得なかった点は問題がある。

3. 有意義だと思われた点

根拠データは別添とするのではなく、自己評価書の本文中に盛り込み、記載する方式はよかった。

2 変更点等への御意見

- ・平成13年度着手への主な変更点として、目的及び目標を設定するにあたっての視点や留意事項についての説明を充実したとあるが、記載内容がはっきりせず、充実した内容がよく読みとれなかった。

国立歴史民俗博物館

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1. 総じてマニュアルの記述が分かり難く、理解するのに苦労した。特に、「取組の分類」ごとの「観点」の設定には苦慮した。
2. 大学共同利用機関であり、同時に博物館でもあるという本館の特質を、大学一般を対象にした評価方法で扱うことには無理があるのではないかと感じた。
3. 研究活動を総体的に整理して見直す機会となり、その意味では有意義であった。

2 変更点等への御意見

1. 技術的な問題であるが、根拠データ等を本文中に記載（貼り付け）するのに大変な労力を要した。改善についてご検討願いたい。

メディア教育開発センター

< 研究連携 >

1 自己評価に関する課題等

1 サイクル大学評価を行った経験が生かされ、昨年度より順調に進行したように思われる。なお山積する課題の解決に向け、今後も改善の努力が続けられることが期待される。

2 変更点等への御意見

目的・目標に関する説明が充実したことは、昨年の評価の経験と相まって、理解の助けとなった。

根拠資料を本文中に挿入することとした点について、本文のレイアウト、資料の挿入が相当な作業量で、評価書作成に時間を要した。また、一つの資料が本文中の何カ所かの根拠となる場合に、資料を分割して新たに作成するなど資料の入れ方に苦慮した。評価書を作成する立場からは、資料は別添とする方が作業しやすいと思われる。

「特記事項」について、記載する箇所が、自己評価の記載箇所のあとになっていることから、全体の評価とのつながりがわかりにくかった。

2. 分野別教育評価

東北大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

今回の自己評価は、自らの機関の研究教育活動を省みるよい機会となった。他方で、大学における研究活動と教育活動は不即不離の関係にあるため、今回の自己評価のように研究を切り離して教育のみに特化した形での自己点検・自己評価にはとまどいと困難を感じた。

過去5年間のすべての教育活動について、あらかじめ今回のような評価の実施を5年前に予期して十分なデータを保存・整理していたわけではないため、データの収集及び整理に多大のエネルギーを費やした。このような大がかりな評価の実施は、大学の本来の責務である研究教育に対して大きな支障を伴うものであるため、そのような多大のコストにもかかわらず大学の社会的責任からこのような評価を実施する必要があるのであれば、今後は幅広く網羅的な項目や要素について評価を行うのではなく、評価項目をかなり大幅に絞った上で、すべての国公立の法学部・法学研究科を対象に評価を実施すべきではないかと考える。

2 変更点等への御意見

とりわけ法学教育の場合には、「目標」と達成された「成果」という形での評価にはなじみにくく、むしろ一定の高水準の「状態」の教育を維持することが重要な課題であると思われる。従って、「目的・目標」の設定とその「達成度」を語るよりも、より望ましい状態の教育に向けた日々の努力が評価に反映される必用がある。

また、法学教育においても、おのずと各大学・大学院での重点を置いた取り組みがあつて然るべきだと考えられるが、評価項目となる「要素」を細かく示すことで、かえって画一的な方向性が示されてしまう危険性にも留意すべきである。

宮城教育大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

1. 追加資料について

評価書提出後に追加資料を求められ、その中で職員数、学生数、就職状況等各種基礎データの追加があったが、これらは、当初から様式を統一して、提出することとしていただきたい。時間のない中での作業は、負担が大きく困難を極める。

2. 自己評価書の評価用語の使い方について

実施要綱中、「観点」ごと、「評価項目の要素」ごとの評価用語の使い方の説明が、非常にわかりにくい。

評価項目の要素は、用語を5段階に区分しており、3段階目に「かなり」（広辞苑：非常にとまではいかないが、並一通りを越える程度）を用いているが、この使い方に戸惑った。

2 変更点等への御意見

宇都宮大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

- ・ 今回の評価は、大学の使命、役割等を再確認し、学部および研究科における 教育内容を改めて系統的に検討する上で有意義であった。
- ・ 大学、学部、学科、研究科、専攻等の独自性を評価しうよう、各機関ある いは部署等の独自の評価項目を設定できる自由度があっても良い。
- ・ 教育の成果は学生が卒業（修了）後10 - 20年経たなければその真価は見 えてこないことも多く、例えば、評価期間を5年に限定せず、卒業生の社会に おける活躍度、政財界への影響度、産業界への影響度等を考慮した評価を行う ことも必要である。

2 変更点等への御意見

- ・ 目的及び目標の設定に関しては、前年度より改善された。
- ・ 評価項目に「要素」があらかじめ設定されたことにより、評価項目の内容が 具体的となり考えやすくなったと思われる。
- ・ 自己評価書本文中に根拠となる資料・データ等を記載（コピーの貼り付け等）する形の指定が不明瞭で分かりにくい。（コピーの貼り付けの方法によらな い場合）電子ファイル中に電子的文章ないしは画像として貼り付けることを前 提とするならば、その旨明確に示す方が良い。さらに、この場合、膨大な資料 ・ データを組み込んだ評価書の作成は煩雑で非常に多くの時間を要し、また、 見る方にも見難いと思われることから、より良い方法を再検討願いたい。

東京大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

従来、大学における教育・研究は、各教官の自主的努力を基本として実施されてきた。優秀なる人材を教官として確保し、適切な分野構成を構築することにより、優れた個の集合体として優れた教育・研究組織とすることを実践してきた。弊害ももちろんあるが、メリットも大きく、実態としてうまく機能してきたと言える。

特に教育評価においては、組織の評価という形態をとることにより、本来評価すべき本質的な部分が評価され難くなっていると感じられた。また、根拠として資料を提出できるものを評価対象に限ることに問題がある。伝統に従った暗黙の規律など、実態としては有効に機能しているものも多い。

評価というのは大変難しいものであるが、評価し易いもののみを評価することにより、本質的に大切な要素が軽視されてしまうことが懸念される。

2 変更点等への御意見

横浜国立大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

ア わかりにくかった点(判断の基準に苦慮した点)

「評価項目ごとの水準」を、5水準の内のいずれとすべきかの判断が難しかった。とりわけ、第1水準の「・・・十分に貢献している(達成されている,機能している)」については、どの項目でも、現実的には何らかの課題・改善点が存在するという状況であったため、この評価水準とすることは事実上不可能であった。

イ 問題や課題

(ア) 「1 教育の実施体制」, 「2 教育内容面での取組」, 「3 教育方法及び成績評価面での取組」に関わる自己点検評価との関係で、関連する各種委員会や講座・専攻等の状況を毎年度記録として残し、資料として利用できるようにしておく必要がある。

(イ) 「4 教育の達成状況」に関連した資料として、学生の資質・能力の育成状況を示す客観的データや、卒業(修了)後の進路についてのデータをより詳細に収集・整理しておく必要を感じた。

(ウ) 自己点検評価全般について、大学(学部,研究科)で、評価項目,評価観点等の評価方法を統一的に決定しておき、各講座・専攻等ではそれに従ったデータの収集・整理を行っておくことの重要性を感じている。

ウ 有意義だったと思われた点

今回の自己点検評価を通じて、教育研究に関わる組織体制や内容、方法等について日常的に現状把握や評価を行うことの重要性を改めて認識した。また、学生への支援体制や教育の達成状況に関わることからについて、全学部(研究科)的にチェックを行うことの大切さを確認することができた。

2 変更点等への御意見

ア 目的及び目標に関わる説明

同一概念として捉えられがちな目的と目標を、明確に区分して扱うことに役立つ

イ 『要素』の設定

自己点検評価の範囲、対象をもれなくカバーするために大変有効であった。

ウ 「特記事項」

再編・統合等、変化の著しい時期における自己点検評価に当たっては、過去～将来の見通しも含めた特徴を記述することもできるので有効なものと考えている。

エ 「評価の観点例及び根拠となるデータ等例」並びに「自己評価書様式の添付」

自己点検評価を進める際の具体的手がかりとして有効であった。

オ 「学習に対する支援」への変更

支援対象の明確化に役立った。

新潟大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

(1) 評価項目と要素が統一的に設定され、観点の設定だけが自由に任されていたが、その観点の設定が分かりにくかった。評価の観点例が要素によって多いもので7～8例挙げられ、少ないものでは1～2例しか挙がっていなかったが、そのすべてを用いる必要はなく、それら以外の観点を設定できる、との説明があっても、要素ごとの観点例の数にこれだけの差があったため、それぞれの観点例の利用方法が分かりにくくなっていた。少なくとも、一般的に想定できる観点例と場合によって想定できる観点例とがあると言っているのであるから、両者を明確に区分すべきであると思われる。

(2) 評価項目 - 要素 - 観点の分析は分かりやすく、問題点や改善すべき点の析出に有意義であると思われるが、その反面、構成・文章が画一的になり、個性を示すことが難しくなるという問題があると思われる。

< 大学院法学研究科 >

(1) 評価項目と要素が統一的に設定され、観点の設定だけが自由に任されていたが、その観点の設定が分かりにくかった。評価の観点例として類似したものが挙がっており、特に「2 教育内容面での取組」と「3 教育方法及び成績評価面での取組」の評価項目の間の違いが分かりにくくなっていた。

また、文系と理系の違いが観点例に反映されていない部分があり、利用できない観点例が多くあり、一般的に想定される観点例がどれなのかを一つ一つ判断しなければならなかった。

(2) 評価項目 - 要素 - 観点の分析はわかりやすく、問題点や改善すべき点の析出に有意義であると思われるが、その反面、構成・文章が画一的になり、自己評価書で個性を示すことが難しくなるという問題があると思われる。

2 変更点等への御意見

(1) 「要素」の設定によって、評価内容の構造（評価事項相互の連関）が明瞭となり、自己評価を進めやすくなったと思う。

< 大学院法学研究科 >

(1) 「要素」の設定によって、評価内容の構造（評価事項相互の連関）が明瞭となり、自己評価を進めやすくなったと思う。

長岡技術科学大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

評価項目・要素・観点という形式で評価することになったことはかなりの改善であるといえるが、この形式での自己評価を通常の専門系工学部教官が行うためには多大な経験・時間を要する。説明会から半年弱の期間で自己評価書を作成する現在の日程で実施するのであれば、各大学で共通する基本的な評価項目（根拠データ等も様式を統一）を設定し、その上で各大学独自の評価項目を別に設定できるようにして、後者の評価については、共通項目の評価に加点するような評価システムを検討しても良いのではないかと思う。

例えば、施設・設備に対する取組みが整備（評価項目2）と活用（評価項目3）に分けて評価するようになっているが、これらは一つの項目にまとめた方が評価し易い。

例えば、施設・設備に対する取組みが整備（評価項目2）と活用（評価項目3）に分けて評価するようになっているが、これらは一つの項目にまとめた方が評価し易い。

2 変更点等への御意見

機構側の求める「目的・目標」のうち、「目的」は従来大学の有している基本的理念や教育目的とある程度合致しているが、「目標」はかなり具体的な内容が要求されており、どの程度具体的に記載すべきが苦慮した。目的と目標の関連の具体的な記載例や教育目標と各要素との関連等について例示してもらえればイメージし易いと思う。

上越教育大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

なし

2 変更点等への御意見

- ・要素の設定は良かった。
- ・特記事項の新設については、趣旨を含めて評価できる。

金沢大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

・評価対象期間内に学科の改組が行われた場合、文章量が通常の字数より多くなる可能性がある。このような場合、どの程度までなら字数を増やせるのか、事前に明確にしておいてほしい。

2 変更点等への御意見

- ・要素を設定したことによって、評価の執筆が容易になった。
- ・特記事項の設置は、現在進行中の取組や今後の活動計画等、評価の対象とならない事柄について記載できるという点で有意義と思われる。

名古屋大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

・自己評価はこれまで大学で独自に行ってきたが、統一的な手法によって実施されることによって、評価の客観性・透明性が確保され意義あることと考えられる。

・根拠資料は全て自己評価書の中に埋め込む形で提出が求められたのは、報告書の簡素化あるいは評価する立場からは良い方法と思われるが、大学はこれまで種々の形で独自の自己評価を行ってきており、その資産を有効に生かす形での報告ができるような工夫が欲しい。

・現況、目的・目標、特記事項の3項目をそのまま公表することとし、項目間での記載内容の調整ができるようになっているが、目的・目標のみが自己評価の尺度として用いられることとされておりその記述は容易ではなかった。

・「過去5年間の実績に基づいて、目的・目標を立て直す」こととなっているが、教育改革が過去から将来にわたり継続的に行われていることから、将来計画を含めた記述の余地があるとよい。

2 変更点等への御意見

- ・目的・目標の設定に関する説明文はやや抽象的で理解しにくい面があった。
- ・指定された目的・目標の記載項目と、自己評価項目（6項目）の記載事項とは縦と横の関係になっており、後者を意図した目的・目標の記述に難しい面があった。
- ・学部と大学院とで同一の枠組みが指定されたが、それぞれの教育内容には歴史的にも目的と形態が異なる面があることを考慮した枠組みが望ましい。
- ・全国の大学を一つの方法で評価するためある程度の枠組みの指定はやむを得ないとしても、項目と要素の指定ならびに字数の制限があり大学の独自性が表現しにくい。例えば、多くの学科、専攻からなる本学では、それぞれの歴史、任務、個性があり項目ごとに限られた字数のなかで記述しきれない面があった。

京都教育大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

評価活動によって本学の問題点の洗い出しが行われ、将来に向けての改善点の整理ができたことは有意義であった。

しかし、本学は一学部のみの小規模大学であるために、評価の際の学部間調整等に関わる労力が不要とはいえ、評価活動のために割ける人員が限られるので、全学テーマ2件と分野別テーマ2件（学部と研究科）の合計4件の評価活動と評価書作成は過大なる課題であった。今後、この点については工夫・調整をお願いしたい。

2 変更点等への御意見

評価項目の水準（5段階の水準）及び要素や観点の自己評価の結果（優れているのか、普通なのか、問題があるのか）については、他大学の状況すなわち基準がわからないので判断が難しく、評価担当者の中でも意見の大きな違いが生じた。

神戸大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

書きにくかった点

2【要素3】、3【要素3】、5【要素2】が、それぞれ観点を異にしていることは理解できないわけではないが、書くとすると、重複せざるを得ない。「整備」と「活用」という表現をもっと絞り込んだ表現に改めるよう、工夫をお願いしたい。あるいは、施設・設備をすべてまとめて、一つの項目にした方が、書きやすいようにも思われた。

不明な表現

2（研究科）【要素1】 研究者養成に必要な研究能力を養成する教育課程編成

「実施要項」について

全体として、非常に親切で分かりやすいものであった。今後も一層の改良に努めて欲しい。

2 変更点等への御意見

「評価の観点例及び根拠となるデータ等」の例示に関して

評価の観点例及び根拠となるデータ等の例示は、自己評価作業を進めていく上で大変役に立った。「の取組状況」について具体的に何を書くべきかを、むしろ根拠となるデータの例から逆に導き出した場合もあった。機構は、観点例は「一般的に想定できる」あくまで一例であると説明するが、実際は、ほとんどの場合、「評価の中心的内容」であった。データの例をより具体的にし、且つ要素ごとに分けて記載すれば、より作業がしやすくなるものと思われる。

「根拠となるデータ等の提出方法」に関して

根拠となるデータ等の提出方法につき、別添の方式をやめたことは、膨大な資料添付の手間が省け、こちらとしても歓迎すべきことである。また、本文中に記載するためには、資料を厳選し、記載し直す必要があり、その作業に手間はかかるが、提出する側として、本文及び根拠の内容をより明確に意識しながら書くことになった。

「評価項目の新設」に関して

「教育の実施体制」の新設は適切なものと思われ、それ自体に問題はないが、こちらとしては、従前の実施分を参考にしながら作業をするので、変更されると戸惑う場合がある。新設・変更にあたっては十分慎重に行うようお願いしたい。

和歌山大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

- (1) 評価の項目・要素は、学部の教育評価にはほぼ適切であったと思われるが、大学院については一部、とくに「学習に対する支援」において記述しづらいところがあった。学部と大学院では教育の目的・目標、実施方法が異なるので、評価項目・要素の構成と内容が両者ほぼ同一では対応しにくいところがある。
- (2) 施設・設備に関する評価は、その整備と活用に分離し項目をまたがって要素が設定されていたが、これは記述しにくく理解しにくい。計画側面と実施側面という形式にこだわらず、「教育方法」の項目で一括して評価する方がよいと思われる。
- (3) 「観点」という用語とその使われ方に違和感がある。観点とは、同一の事象 に対して異なる評価の視点・指標を適用して立場を設定するという意味あいを持つ。しかし、今回の自己評価の構成では、単に項目 - 要素 - 観点という内容的階層構造の最下位実体にすぎない。それならば、大項目 - 中項目 - 小項目といった言い方をした方が、理解しやすいと思われる。
- (4) 有意義だと思われた点については、自己評価の活動全体がきわめて有意義だと確信している。これを今後の教育の改善に最大限活用したい。

2 変更点等への御意見

- (1) 今回の評価における変更点については、すべて支持できる。とくに根拠データの提出方法は、評価書の電子化に対応するもので、たいへん望ましい。

山口大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

自己評価を実施して、組織全体の長所や短所を明確に意識しうる機会が得られたことは意義がある。同時に、日常の個別的な仕事の意義を再確認し、その諸活動の記録を怠りなく行っておくことが肝要であることを痛感した。

自己評価書作成に当たった大学及び評価委員の負担が大きすぎるのが問題である。いかにして負担を軽減し、通常の業務の中に組み込んでいくかの工夫が必要である。年によって評価項目を絞っていくことも検討して欲しい。

近年の教員養成学部は目まぐるしい変化のただ中にある。結果のでないうちに次の組織改組を行ったり教育職員免許法の制約など、5年前に立てた目的・目標に従って評価されても困る面もある。その意味で、大学・学部の裁量を超えた部分をいかに評価できるのか疑問であり、将来計画に繋がる評価になるのかには不安がある。

2 変更点等への御意見

「評価項目」「要素」「観点」という評価手順は有意義である。

「要素ごとの貢献の程度」、「評価項目ごとの水準」の判断は対象組織に委ねてあると解釈するが、定型的な評価文の記述だけでは判断理由、観点の「重みのかけ方」などが読み手に分かりにくいのではないかと心配である。

評価内容を明確に区分し記載することに困難を感じた部分がある。例えば施設・設備の整備・活用に関して、「2.教育内容面での取組」「3.教育方法及び成績評価面での取組」「5.学習に対する支援」で要素に取り上げられている。整備、活用、学習支援と違った角度からの評価を求められているのではあるが、内容は必ずしも明確に区別できない。

「学生に対する支援」から「学習に対する支援」への変更は、分野別教育評価においては「2.教育内容面での取組」「3.教育方法及び成績評価面での取組」との内容的な重複を生じた面もある。

福岡教育大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

問題点

(1)教育の「内容」と「方法」は、お互いに密接な関連を持つ領域であり、別々に点検・評価するのは難しい。

2 変更点等への御意見

特になし

九州工業大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

学部，研究科の評価が問われている中で，学科・専攻ごとの評価まで明らかにされる
ことが必要なのだろうか。

2 変更点等への御意見

教育目的及び目標の設定に関する説明は充実されたが，理解が容易になったとも
いえない。

4つの視点が説明されているが，これらを満足するように目的・目標を設定する必要があり，また
この作業を，評価する「要素」との関連を意識した上で行う必要があるという説明はわかり難い。

評価の枠組みとして，評価する6項目と評価する要素が項目ごとに与えられているのだから，
それらに対応して教育目的を設定し，観点(例)に対応して教育目標を設定できることの説明が
あれば，より早く明確に理解できると思われる。

観点 要素 項目という評価手続きは明快である。

3. 分野別研究評価

北海道大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

- ・ 自己評価を通じて，組織における問題点が明確化されるとともに，評価に対する組織・構成員の意識が向上した。
- ・ 「実施要項」の記述については，全般的に，より簡潔な表現となるよう工夫願いたい。
- ・ 「研究内容及び水準」と「研究の社会（社会・経済・文化）的效果」の評価の単位となる「領域（部会）」の構成で，「基礎工学」関連の適切な領域（部会）が設定されていないため，関係する教官が該当部会コードを選択する際に苦慮した。
- ・ 「研究内容及び水準」と「研究の社会（社会・経済・文化）的效果」の自己評価では，過去5年間における各教員の代表的研究業績（5点以内）に基づく自己判定を基礎として行うこととなるが，各教員の研究経歴等も参考としながら，業績を総合的・系統的に評価する方法も必要かと思われる。
- ・ 「研究の社会（社会・経済・文化）的效果」に関し，業績の対象期間が過去5年間では，根拠

資料となる具体的な効果が現れていないものが多い。

2 変更点等への御意見

- ・ 特記事項として、全体の総括や今後の課題等を任意に記述できることは、組織ごとの個性及び将来に向けての決意を発信する場として、評価できる。
- ・ 変更点、改善を図った事項については、全てにおいて適切なものであったと認識している。

弘前大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

評価項目「2 研究内容及び水準」において、観点として「研究の独創性・発展性」を設定したが、「根拠となるデータ等例」として機構側で示す「評価の高い内外の学会誌」、「論文被引用回数」、「招待講演」、「学会賞等受賞」については、独創的で発展性のある研究が、認められるまでかなりの年数（5年以上のことも多い。）を要する場合が見受けられ、提示にあたって苦慮した。

このような研究・創作活動の特性を考慮した「根拠となるデータ等」の提示方法について検討してほしい。

評価項目「3 研究の社会的効果」において、「社会的効果」の判断基準が不明瞭なため、自己判定に苦慮した。

「政策形成への寄与」は例示されているが、他の「教育実践への寄与」、「地域の教育課題の寄与」、「生活基盤の強化」についても、具体的な例示を行ってほしい。

「個人別研究活動判定表」の「研究の社会的効果」欄と「個人別研究活動参考資料」の「2. 研究の社会（社会・経済・文化）的效果」欄との関係がわかりにくかった。後者は、一般書・一般誌論文・教育実践刊行物・教育専門誌の論文・初等中等教育テキストに限定されているため、国際学会雑誌に発表した研究や高等教育に関する論文等は、該当する欄が無く、整合性がとれず、対応に苦慮した。

「個人別研究活動判定表」に記載する内容と個人別研究活動参考資料における「1. 研究内容及び水準」、「2. 研究の社会（社会・経済・文化）的效果」に記載する件数は、整合性をとるべきなのか両者の関係が明確でなかった。

2 変更点等への御意見

「特記事項」の新設、「個人別の研究水準の自己判定」の廃止を図ったことについては、評価できる。

評価項目「社会的（社会・経済・文化）貢献」を「研究の社会的（社会・経済・文化）効果」に改めたことで、評価事項が明確になり、かつ、研究者自らの社会的責任を自覚させる上で、適切な措置が図られた。

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

- ・ 今回の調査対象が5年前に遡り,その準備体制が整っていなかったため,根拠資料等の収集が困難であった。この問題は,自己評価が恒常化していけば,解決される問題でもあろう。
- ・ 「研究の社会的効果」は大切な視点であろうが,その社会的効果の判断基準を明確にする必要がある。同時に,教育学研究は,必ずしも即効的な研究だけではないことも勘案する必要があると思われる。
- ・ 「インプットの」、「プロセス的」、「アウトカムの」の説明,及びそれらの関係や区別が截然としないくらいがある。できれば,分かりやすい日本語で説明してほしい。
- ・ 「業績一覧」の書き方も,具体的に指定してほしい。
- ・ 「個人別研究活動参考資料」の「1 研究内容及び水準」と「2 研究の社会(社会・経済・文化)的效果」の分類,及び原著・報告・総説・著書の分類や区別が困難な場合も少なくなく,戸惑った教員も少なくなかった。

2 変更点等への御意見

- ・ 『要素』及び『観点』が具体的に示されていることは,自己評価書作成にあたり,概ね有効である。

東京大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

1. 目的、目標については、機構の定義がやや理解しにくく、より分かりやすい定義を検討いただきたい。「過去5年間の実績に基づいて、目的、目標を整理し、将来の目的、目標を記述しない」とありますが、より長期的な視点が必要と思います。研究の目的・目標については、将来への展望があつてこそ、現在の活動が位置づけられる面も少なくありません。将来への発展性を擁する萌芽性、フロンティア性、あるいは、教育への貢献を評価することも重要な視点と考えます。
2. 個人、分野、研究科という階層構造での研究評価は、研究活動の基本的単位となる学科・専攻の取り組みが評価されにくく、法人化後の学科・専攻の設置形態が、組織運営の重要な戦略的側面となることを考えると、学科・専攻の視点からの評価をより重視することが必要ではないかと考えます。

2 変更点等への御意見

東京学芸大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

1．実務上の負担について

東京学芸大学は、13年度の自己評価では、全学テーマ「教養教育」と「研究活動面の連携及び協力」の他に、「分野別研究評価」の自己評価を実施した。実施後の率直な感想として、3テーマについて、同時に実施することは、単科大学として実務上大変な負担となった。

2．改善策としては、本格実施では評価事項を一つに絞ることが望ましい。

3．規模の大きな単科大学の研究評価については、1学部であっても、領域ごとに細分化して実施する等の工夫をしてはどうか。本学の場合、約350名の教員の研究業績に基づく自己評価を実施したのであるが、自己点検評価の実施要項に関する理解を周知徹底させるために、多大の努力を必要とした。例えば、教育学系においても、教育学領域と教科教育学領域に二分できるのだから、どちらかを選択実施できるようにすれば、かなり負担が軽減されよう。

4．分野別研究評価判定票 のフォーマットについて

判定票 の作成作業が学内で展開する中で、「研究内容及び水準」と「研究の社会的効果」が共に高い研究業績を5点そろえることの困難さ、2欄のうちでは「研究内容及び水準」欄を重視した研究業績の選択にならざるを得ないのではないかと、等々の意見や問合せが点検評価委員会に寄せられた。要するに「研究内容及び水準」と「研究の社会的効果」については、記述の重複を認めた独立の記入欄（フォーマット）が作られていれば、「研究の社会的効果」についての研究業績をもっと多く上げることができたのではないかと、ということである。例えば、教科書の編集という業績は、「研究内容及び水準」では水準の高い研究とは評価できないが、「研究の社会的効果」では高いものになる場合がある。また、新書あるいはリーフレットのような啓発的な単著、教師向けの実践的な教育専門雑誌への投稿論文についての積極的な評価が、このような記入欄の改善で可能になるのではないかと、ということである。

2 変更点等への御意見

（今後の改善要望）

実施要項の説明は、改善されたとはいえ、やはり分かりづらい。分野別評価については、もっと専門性に特化した評価項目と要素の参考例を示してほしい。

一橋大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

法学・国際関係など社会科学系においては、自然科学系の研究領域とは異なり、個人研究が中心であり、あるテーマについて領域や教室を単位として共同で研究することは、中心的なスタイルではない。研究科として、あるいは複数の研究者がグループとして共同研究を行う場合にも、それはあくまで個人研究がベースとなっている。確かに本評価において求められていることは、対象組織の設定する研究目的及び目標に基づく研究体制および研究支援体制等であり、行われる研究スタイルが個人研究か共同研究かを問わない形式がとられている。しかしながら、評価作業を進めてみると、實際上個人研究を中心にしては評価しにくく、共同研究を重視した評価になりがちになった。自己評価の項目や評価対象を全体としてみると、必ずしも研究分野ごとの研究の特質に配慮したものはなっていないように思われる。今後、そのような自己評価内容によって大学評価の結果が左右されることになるならば、それは、間接的に大学における研究のあり方を、研究分野の特質に必ずしも合わない方向に誘導する結果となる可能性がある。

「研究目的及び目標」は評価の趣旨から必要なものであるが、例示などの工夫、改善がなされなければ、その具体的理解は困難であり、記述は著しく難航した。評価項目に関しては、諸施策、諸機能など、その意味の把握が困難なものがあつた。また、研究体制及び研究支援体制と諸施策及び諸機能の達成状況とで重複する項目があり、強いて書き分けるよりは、一体として記述できるような工夫をしていただきたい。

本評価の作業を進めるために、相当の時間を要した。評価の意義を生かしつつ、評価作業に要する時間がもっと削減されるよう、評価システムの改善が望まれる。

2 変更点等への御意見

要素に基づく評価については、評価する側としてはやりやすかつた。ただ、評価要素の例として掲げられている事項がどの程度拘束力を持つものなのかが不明であり、結局は自主的に取捨選択して評価せざるを得なかつた。たとえば、共通の評価要素と、自主的に設定できる要素に区別して例示するなどの改善をお願いしたい。

特記事項の新設は有意義であると思われるが、内容が限定されていないだけに、最終的な評価にどのような影響を与えることになるのかわからず、かえって書きにくいという面もある。このほかの変更点についても、おおむね妥当であると思われる。

信州大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

- (1) 研究に関しては、分野（学部）によって研究対象，方法，成果の評価など（研究の内容及び水準，研究の社会的効果等）が大きく異なる。できれば機構側から，分野（学部）別に内容・方法をもう少し細かく分類・設定，提示してもらった方が効率よく効果的な評価が実現できるように思われる。
- (2) 特に，教育学部は研究領域が多彩であるため（特に芸術，体育系 etc ），教育学部特有の自己評価の内容・方法の手引が必要かと思う。また，教育学部の研究評価に関しては，何を重点的に知りたいのか等を明示してほしかった。
- (3) 今回のように評価の「項目」，「要素」，「観点」と固定してしまうことの良否について議論が必要ではないか。すなわち，このように固定してしまうと大学の個性が発揮しにくくならないか（誘導質問のような感じを受ける）という懸念ある。大学（学部）の個性化がより進むと，その大学が取り上げる「要素」や「観点」は自ずと決まってくるであろうし，それに伴う独特の「要素」や「観点」が出てくるのではないか。
- (4) 教育学部の研究評価に関して，特に以下の点について配慮願いたい。
今回は代表的な5つの研究業績をまず挙げ，これらに関して，研究の内容の観点からと研究の社会的効果の観点からの2面から評価した。しかし，教育学部場合（他学部はよくわからないが），研究論文として研究内容を評価してほしい業績と，附属学校や地域の教育現場での教育実践による社会的効果の観点から評価して欲しい業績が一致しない場合が多い（後者は実践論文・資料であり，レベルの高い論文として一流の論文誌への投稿は一般的に難しいのが実情）。したがって，代表的な5つの業績を選択する場合，研究内容に関する業績と社会的効果に関する業績を別々に選択できるような工夫が必要かと思われる。

2 変更点等への御意見

(1) 評価項目に「要素」を設定したことについて

自己評価の作業がシステマティックにやすくなった点は評価できる。一方、評価内容・結果が画一化し、自己評価の個性（大学の個性に繋がる）を発揮しにくくなる恐れもある。このことは今後、「本来の大学評価の目的」と照らし合わせて、時間をかけて十分議論し対処すべきことではないか。

(2) 「特記事項」の新設について

どのようなことを記述したらよいのか、曖昧にも取れるが、本文中で言い残したことなどを自由形式で述べられる機会が与えられたと捉えれば、大いに評価できる（効果的な）改善点と思う。また、大学の個性を発揮するところ、と捉えても有効である。

(3) 評価項目「研究の内容及び水準」の改善について

研究の内容及び水準の判定証拠資料として、「論文の引用」があるが、過去5年間、特に1, 2年前に公開された論文の引用を証拠資料として挙げるのが可能になるのは一般的には希である。論文の引用は10年前のものでも大いにあり得ることである。論文引用に関しては、時間的な遅れ等を十分配慮する工夫が必要と思う。

(4) 評価項目「社会的効果」の改善について

社会的活動とその効果の両方がそれぞれに評価されるべきではないかという考えも成り立つのではないか。どんなに活動しても効果が認められないと評価されないという考えもあるが、一方では、効果があったことの証拠集めは、活動の内容によって難易があり、公平でなくなる恐れもあるのという見方もある。

名古屋大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

・第三者によるピアレビューということにして、大学が提出する資料に基づいて、大学評価・学位授与機構が評価する方式にしたい。現在の自己評価方式は教官側の負担が多すぎ、研究活動に支障が生じると思われる。

・個人別研究活動判定票の作成及び提出方法については、下記の点に留意し判りやすくまとめていただきたい。

過去5年間以前における代表的研究業績の取扱いについて

個人別研究活動判定票 に記載する「代表的研究活動業績」の5点と、個人別研究活動判定票 で提出する「代表的研究活動業績」の5点の関連について

実施要項以外に補足説明を配付した場合の周知徹底について

2 変更点等への御意見

・目的及び目標の調査結果、評価の手順が送られてくるのが遅すぎると思われる。今年のような時期でないと出せないのであれば、自己評価書の提出時期を9月末にしたい。

大阪大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

各要素ごとの自己評価について、観点例が参考資料として添付されていた点は記述する上で大いに役立った。

他方、研究内容及び水準について、対象組織の全体及び領域ごとに自己評価することの困難さを感じた。基本的には、個人別研究活動判定票に記載されている代表的研究業績をもとに、研究目的及び目標に照らして、特徴的な研究内容・社会的効果を記述する方法を採らざるを得なかった。この点については、参考例などを提示していただくよう強く要望しておきたい。

また、法学系の研究評価の場合に、「国際的視点を踏まえた」評価とは、何を意味するのかについて、あらかじめ、具体的に提示していただければ、大いに参考になったのではないかと思う。

2 変更点等への御意見

平成13年度着手分の評価における変更点及び改善点として、目的及び目標の設定に関する説明を充実したとあるが、容易には理解できなかった。

他方、『要素』を設定したこと、「特記事項」を設けたこと及び改善を図った事項（参考資料参照）などは、大いに役立った。

ただ、全体として、自己評価の様式が理科系を前提に考えられているのではないか。文科系には理科系と異なる面も少なくなく、研究分野の性格に応じた評価が必要であると考えます。

この点については、是非再考されることを要望したい。

広島大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

(問題や課題点)

1) 「自己評価実施要項」及び評価項目について

・「自己評価実施要項」の記述が、全般に、抽象的であったり用語法が特殊(インプットの・プロセス的・アウトカムのなど)であったりして、評価書作成担当者全員が内容を理解するだけで相当の時間を要するため、改善の必要があると思われる。

・「1 研究体制及び研修支援体制」については、特に、「諸施策」及び「諸機能」という要素が何を指しているのかがわかりにくい。参考資料で例示された「観点」を見ても、「研究体制」や「研究支援体制」において記述すべき観点と、「諸施策」や「諸機能」で記述すべき観点とがどのような基準で振り分けられているのかわかりにくい。また、「諸機能」の観点として、共同研究や共同利用に対するサービス機能のみが例示されているが、そもそも「サービス機能」の範囲が不明確であるし、なぜ個人研究に対するサービス機能について触れられていないのかも理解できない。

「諸施策」及び「諸機能」については、その内容をより具体的に明らかにし、かつ、記述すべき内容が明確に理解できるような名称に改めるべきである。

・「2 研究内容及び水準」「3 研究の社会(社会・経済・文化)的效果」に関する自己判定及び自己評価のしかたについては、「実施要項」における説明(17~20頁)がわかりづかった。その理由は、他の項目も含めた全般的な説明のあとで、これら2項目に関する判定・評価のしかたの説明が別途出てくるからで、他の諸項目では必要だがこれら2項目では必要ないもの、他の諸項目では必要ないがこれら2項目では必要なものについて、担当者が理解するのに時間を要した。

また、これら2項目の自己評価・判定の拠り所として、「個人別研究活動判定票」の自己判定があるが、記入者（各教員）の自己判定の基準がまちまちで幅が大きく、この判定票を基に客観的に自己評価を試みるのは非常に骨が折れた。法学系における研究の社会的効果については、官公庁のプロジェクトなどに直接参加していない限り、例えば論文で政策提言などをしてその後、にそのとおりになったとしても、因果関係は曖昧で社会的効果があったと断言できないところがある。

- ・「4 諸施策及び諸機能の達成状況」は、項目そのものが直感的に分かりにくい表現となっており、項目を見ただけでは何が要求されているのか理解しにくい。

（有意義だと思った点）

個人の研究活動の判定については、過去5年間における代表的研究業績5点以内を選定して現物を提出するようになってきている。これは悪しき業績主義による研究の質の低下を防ぐ効果があると評価できる。

2) 個人別研究活動判定票の記入方法について

・業績の記入の仕方につき、要項の記載が不十分であったため後に補足資料が配布されたが、それでも十分とはいえず、混乱を招いた。特に、文科系では、記念論文集などの書籍に重要な論文を掲載することが多いが、考慮されていない。また、ページ数を入れる必要があるかどうかについても最初から明確に指示してほしい。

さらに、指示された記入の仕方が独特であり、別の目的ですでに作成されている業績リストを活用しにくいという問題がある。最初から、例えば、科研費の申請において指定されている方式に準拠して具体的に指示すれば、不要な混乱は生じず、また、作成の手間も省けるはずである。

3) 主要研究業績の提出について

- ・提出した主要業績は返却されないということであるが、これらの業績は、書籍も含め、すべて機構で保管されるのであろうか。もし死蔵したり廃棄したりということになれば、資源の無駄遣いではないかという批判は免れない。提出された書籍が有効に活用されることを望む。

2 変更点等への御意見

1) 目的及び目標の設定に関する説明

研究目的と研究目標の関係など明確に分かりやすくなっている。しかし、文系の研究機関は研究者個人を単位として研究がなされていることが多く、また共同研究をするにしても個々の研究機関の枠を超えて組織化されることが一般的であり、その場合、学部・専攻としての研究目的・目標を研究内容面について具体的に示すのは非常に困難である。法学系であれば例えばこのような書き方がある、という具体例が欲しかった。

2) 「特記事項」について

本学部及び本専攻は、他の法学系の研究機関とくらべて、その成り立ちや組織形態について特異な点が多々ある。「特記事項」欄はこの側面について補足的に説明し理解を求めるという点で有効に活用することができた。

徳島大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

(1) 「自己評価実施要項」だけでは、目的及び目標の設定、記述に関する説明が十分理解できなかつた。したがって、「自己評価実施要項」において、より具体的な説明が望まれる。これに対し、平成14年6月に送付された「目的及び目標に関する事前調査結果」では、記述例を含めた具体的な解説がなされており、目的及び目標の設定に非常に参考になった。

「自己評価実施要項」に、「目的及び目標に関する事前調査結果」で書かれているような説明があれば、より円滑な作業ができると思われる。

(2) 評価書の本文中に評価の根拠資料を提示する(貼り付ける)方式に関して、どの程度まで根拠資料を示せばよいのかの判断が難しかった。特に、根拠資料が学内の報告書(例えば、外部評価報告書等)に収められているような場合は、関係箇所が分散していたり、数頁にわたることがあり、根拠資料を提示したものの、機構が意図しているような対応ができたかどうか不安である。このような場合は資料を別添する方式の方が、作業の負担が軽減されるし、安心である。

2 変更点等への御意見

(1) 評価項目に、『要素』が設定され、さらに「観点」が置かれたことにより、自己評価の記述をより明快に行うことができた。また、取りまとめ作業の負担軽減にも役に立った。

(2) 「特記事項」が設けられたことにより、対象機関の将来計画や課題を記述することができた。つまり、ある意味では評価結果に対する対象機関の姿勢を示すことができ、非常に意義のある項目と考えている。

鳴門教育大学

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

今回、研究評価の対象校として指定されたため、報告書作成へ全力を傾注したが、評価項目が多岐にわたっており、執筆と検討の時間にあまりにも負荷がかかり過ぎた。評価項目の精選をすることによって、労力の軽減を考えることが今後の課題である。

2 変更点等への御意見

評価における変更点や改善の配慮は、歓迎すべき事項である。ただ、「特記事項」の字数を現行の倍程度にして、大学での種々の改革や将来展望との関わりの中でこれまでの取組み状況、成果等を判断していただけるとありがたい。

九州大学

< 法学系 >

1 自己評価に関する課題等

有意義な評価の実施のために、試行を重ね改善の努力をされていることに敬意を表しつつも、マニュアル（「手引書」）の説明文は、それ自体が評価の参考資料として広く国民にも公開されることを考慮すると、現状ではわかりにくい表現が散見されるので、一読して理解可能な平明な文章となるよう、一層の工夫を望みたい。

2 変更点等への御意見

各大学の個性を活かすという方向性と、各大学の評価作業の利便を図るという方向性が、必ずしも十分な調和を保てていないように思われる。また、評価のポイントが細かすぎるように思われる。この点は、二律背反的な側面をもち、難しい課題だと認識しているが、もう少し、大学の営み全体に目を向けながら、それとのバランスを意識しつつ評価を行えるよう、工夫をしていただきたい。

以下、少し具体的に問題点を指摘し、今後の参考に供したい。

（１）目的・目標で個性を打ち出そうとすると、項目・要素の設定や観点例の提示が 過剰な束縛となる。たとえば、一つの目的達成のためのインプットの目標とアウトプットないしアウトカムの目標について包括的な評価を示すことができず、設定されている項目や要素によって分断されてしまう。

（２）一般的な理念や目的の記述は、ある程度の量的制限はやむを得ないが、「明確かつ具体的」で、しかも、各要素に対応する目標を、目的と合わせて2000字の制限内で記述するのはきわめて困難である。とらえ方や目的について一定の字数制限をするのとは別個に、目標の記述については、もう少し制限を緩和していただきたい。

（３）各大学とも、これまで2年間の経験があり、また他大学の例も知ることができるので、今後は、観点の例示は必要ないのではなかろうか。また、要素の設定についても再検討をお願いしたい。これらは、評価への取組が進んでいない大学の場合には評価の方向を誘導する危険があり、目的・目標の個性化に真剣に取り組む大学にとっては、足かせにもなりうる。各大学の目的について、目的達成のためのインプットの目標、プロセス的目標、アウトプット・アウトカムの目標をきちんと区別しつつ明示して評価することを義務づけ、あとは各大学の工夫に委ねるべきだと思われる。

（４）各大学の個性が示される事柄（独自の人材養成や研究遂行の取組等々）と、それとはあまり関係がなく、各大学で共通して充足すべき事柄（学生による授業評価、評価体制の整備、教員の研修体制の整備等々）とを区別することが重要だと思われる。特に「要素」のような形で各大学に必須の評価事項を課すとすれば、それは後者に限定し、前者については自由に設定できるようにすべきではなかろうか。現在の「要素」には、こうした区別の姿勢が弱いように思われる。

（５）機構の提示する観点例に配慮しつつ、丹念に評価基準を示して評価を行うとすれば、各項目について6000字という字数制限は厳しすぎると思われる。要素や観点の数を考慮すれば、項目によっては、より柔軟な記述が可能となるように字数制限をもう少し緩和していただきたい。

（６）逆に、資料提示については量が無制限というのも、かえって不安を生むように思われる。評価の根拠を明確に示すものに限定するよう努めたものの、念には念を入れるということに（とりわけ評価担当者以外の者の要望により）なりがちである。

今後、各大学で評価資料のフォーマットを作成する際にも参考になるように、（４）で述べた観点も考慮して、緩やかではあれ一定の制限を設けることも考えられよう。

宮崎大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

工学の研究を進める上で、様々な問題をより基本から検討し直すことがしばしば必要になる。大規模大学は理学部を有するので、そのような相談に乗れる研究者が身近にいる。本学の規模の大学では、理学分野をはじめとする工学分野ではない研究者を、工学部教員として持つ必要がある。このような点から、今回指定された6つの評価対象領域に加えて、「工学基礎」のような領域を設けて評価いただくとありがたい。個人別研究種別定票の「研究内容」や「研究の社会的効果」の事項の選択にあたり、多くの方は、非常に迷ったように見受けられる。例えば、「独創性」・「有用性」・「新規性」・「発展性」について、一般的には、個々の論文の価値は、これらの複数をわたっていると考えられる。その中で、あえてどれか1つを絞るとすると、項目それぞれがどのような観点から提示されているか、理解できるような例示などがもう少しある方が、良いのではないかと。

「研究内容及び水準」と「研究の社会的効果」に関して、個人別研究種別定票等を基にまとめるとき、できるだけ厳密に客観的評価をする立場でまとめるか、大学評価・学位授与機構の評価に対してアピールする立場でまとめるのか、若干あるまいであり、どちらかと言うと前者の立場を取ろうとしたように思う。この点を明確にした方が書き易い。

また、個人別研究種別定票の「研究の社会的効果」は、過去5年間を対象として評価することになっている。しかし、社会的効果が現れるまでに長期間を必要とする研究課題もあり、このような研究を十分評価できる工夫も重要である。

研究種別の全体的な状況を捉える上で、今回の自己評価書作成のプロセスは大変勉強になった。これを契機として、工学部が抱えるさまざまな課題の把握と分析がより明確となり、工学部内の各種委員会の活動を改善し、積極的に展開する際に大いに参考となった。

2 変更点等への御意見

評価項目に要素が設定され、観点例が示された。自分たちの状況を考える上で、要素や観点例は参考になり、状況を捉える上で大変良かったと思う。一方で、一旦示されると、例とは言えるだけ応えようとする傾向が強まってしまう。観点については、共通に答えて欲しいものと、比較的機関の選択に任せるものとの整理して、提示いただくと書き易い。

機関の取り組みの経緯によっては、例えばある施策が、示された観点の個々にわたり明確にできる段階にまで、必ずしも至っていない場合もある。この場合、例示の観点の幾つかを一つに括ってまとめるのが適切かと考えるが、それでよろしいか。全体的にどの程度忠実に示されたガイドラインに沿って書き、どの程度示されたガイドラインから免れながら書いて良いのか、これらの判断に苦しんだように思える。

奈良先端科学技術大学院大学

< 工学系 >

1 自己評価に関する課題等

諸施策、諸機能について、取組状況と達成状況を項目1と項目4に分離して評価する今回の形式は適切でないと感じました。例えば外部資金の導入のための施策を項目1で書いた場合、それがどの程度実を結んだのかは項目4にまわすため、その場で続けて記述できず、分かりにくくなる、ということが起こりました。

工学系の組織には、数学、外国語、あるいは、生物系など理学系の研究者も所属しています。個人別研究活動判定票の評価部会は、工学系以外の分野も用意しておくべきであると思います。

手引きの表現と言葉遣いについて、若干違和感を感じたところがありました。たとえば、目的と目標、施策と機能などの単語です。「目的」と「目標」の使い分けについては、解説の定義を読めばある程度理解可能ですが、日常的にはほとんど同じ意味に使っている単語なので、最後まで紛らわしさを払拭できませんでした。同様に、「諸施策」と「諸機能」の違いについても、分類の難しい場面がいくつかありました。

他の大学とは違うユニークな目的や、新規性のある定量的な目標などを設定しようと努めました。関係者の意見を集約して論議を重ねるほどに、結局皆特徴のない似たものになってしまいます。単一の目的を研究科全体に適用すること自体に無理があるのかもしれない。

その他、「取り組み」、或いはインプットやアウトカムなどの言葉遣いになじみにくかったことや、納税者に対するアカウンタビリティーを自覚するうえで、この自己評価作成経験は有意義であったといった感想が評価担当者からありました。

2 変更点等への御意見

大学の裁量で「要素」を設定できるので、自己評価の座標軸を決めやすくなったと思います。

メディア教育開発センター

< 教育学系 >

1 自己評価に関する課題等

一連となっている活動を、インプット、プロセス、アウトカムに明確に区別すること、それらを総体としてわかりやすい説明とすることは、とても困難な作業であった。活動全体が見えやすい評価の仕組みについて検討が必要と考える。

分野別研究評価の個人別判定票における論文の分類（判定票、参考資料）の観点が変わりにくい。例えば、研究内容面において「教育実践への貢献」が、研究の社会的効果において「教育実践への寄与」があり、両者の区別が困難であった。

評価作業は、組織改善が目的であるから、例えば「研究者の卓越の割合」が、安易に大学ランキングのように用いられないよう、慎重な取り扱いが望まれる。

自己評価書が、本来の目的である組織改善のために機能するような仕組みについて、更に検討が必要と考える。

2 変更点等への御意見

「要素」があることは記述を助ける1つの目安だが、それぞれ別個に記述していくと、内容が散漫になりやすい。要素をなるべく多くあげておき、そこから取捨選択して全体を通して記述するほうが、わかりやすい説明になると思われる。

個人別研究活動参考資料中の過去 5 年間の論文数などは、研究水準の判断のためのもっとも基礎的なデータになり得るので、例えば研究の領域ごとに、その領域に対応した分類を用いるなどの工夫が必要と思われる。